
King of the forest ~Improved version~

龍門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

King of the forest ~Improved
version~

【ZIPコード】

N6045M

【作者名】

龍門

【あらすじ】

失われた魔法。新たな力。争う三大国。そして未知なる【森】。
森の王（見習い）と悪夢を名にする女。一人が出会い物語りは動き出す
なんて言つてはいるけど田舎セラブコメ！『異世界の
King of the forest』の改良版です。

The different world <protozone> (前書き)

書き直し版です。

書き直しているのかは解りませんけど。

色々と設定増やしたり減らしたりを試みています。
まあ、この段階で結構変わっているのですけどね。

暇つぶしにでも読んでくれれば嬉しい限りです。

The different world <Prologue>

魔法 それは失われた過去の力。

200年前。世界に巨大な隕石の落下があった。
世界の3分の1が機能を停止し、億を超える人々が死んだ。

そして、魔法が失われた。

その隕石を『永久凍結』と名付け、隕石が落ちたその日を『世界が変わった日』と名付けた。

魔法と呼ばれる力を失つた人間は違う力を求め造り出した。
それが『有限魔法』

魔法と言う名を入れているのは名残だろう。
そして魔法を『未知魔法』と呼ばれる様になつた。

世界 『偉大なる大地』

3つの大国が占める大地の名。

ガランド大帝国

神聖国ミニキュラ

コードディア共和国

この3つの国が『偉大なる大地^{ガランドアース}』を占めていた。

この3つの国は互いに和睦^{ヒツヅク}し合っていた。
それも全ては3つの国全てと隣接していた【森】と呼ばれる大森
林のせいだ。

たかが【森】で。と思われるかもしない。
だが、この【森】には様々な逸話や噂などが在る。

1つは「【森】には存在しない魔法が存在している」。

1つは「【森】には不思議な力が宿つており、祝福されれば万物
を支配する力を与えられる」

1つは「【森】には様々な宝が眠っている」

1つは「【森】には200年前に失われた遺跡が眠っている」

1つは「【森】には全ての真実が眠っている」

等々だ。『太話も良い所であろう。

普通ならば「所詮は噂」で流される話ではある。

けれども、人々はこの話をそつ簡単に流しはしなかった。

魔法と言う過去の遺物。

万物を支配する力。

宝・遺跡。

そして真実。

これだけ人の欲を刺激するモノが【森】に存在していると聞けば誰でも疑いはしても否定はしない。

それは国を治める王達も一緒に万物を支配する力。

国と言つモノを支配し治めている者に取つて、これ程そそるモノは在るだらうか？

信じてはいけない与太話。それを一国の、しかも大国の王が信じてしまつた。

「【森】には何かがある」それがこの現状の原因である。

人々は 気付かぬ内に【森】を田指した。
そう田指した。

だが、そう容易く入れるのならば苦労はしない。

現時点までで、三国は【森】に入を送つてゐる。
そして、無事に帰つて来た者は0。

頭部・片腕・片足・臓器だけだつたケースは多数だ。

これによつて、【森】に関する噂・・・いや、もう事実だらう。

「【森】に入れば呪い殺される」

現に入った調査の者が悉く死んでゐるのだ。いや、殺されているのだ。

もう既にこれは噂ではなく、真実として人々に広がつてゐる。

この時点では力を持たない人間は諦める。

だが、一国の王達は違つ。

【森】に入つた者達が殺された。

これは【森】には何かが在ると言つ事。

王達は狂氣に顔を歪めた。

「何かがある」不確かで不透明な何かを求め、【森】を目標している。

だが、それもそう簡単にはいかない。三国が同じモノを目標しているのだ、何も起きない方が可笑しい。

当然牽制し合つ。そして、現時点では冷戦状態だ。

それが現時点での『偉大なる大地^{グランダース}』を占める三国の現状。

さて、気付いているだろうか？

【森】の中に何かが眠つてゐる。

この『太話を誰が流したのだろうか？

【森】に入れば殺される。

ならば、誰がこの話しが流したのだろうか？

誰も氣にもとめない。

目先の欲望に溺れて

・
・
・。

The different world

『Prologue』（後書き）

わたくして・・・どうなつたかとせん。

次の投稿は少し遅れます。

書きためておきたいですしね。

それでは。

Kings and fantasy kind (前編)

遅くなると無いながら連続投稿。

プロローグだけじゃ解らないと思い。セシトと同じ事で。

てか、結構厨一臭い感じですよね。

ネタがぶつてるーとかあるかもしません。

暗闇。高木に空は覆われ光が閉ざされた世界。

【森】

その暗闇の中で影が大木の根っこに腰を下ろしていた。
暗闇のせいか、解るのはそれが人だと言う事だけだ。

いや、もしかしたら人の形をした人外かもしれない。

『他の奴等はまだ来てないのか?』

突然、声が響く。

そして、茂みの中から何かが現れる。

それは四つ足で歩く獣。

「…………皆急け者だからね」

この声は大木の根っこに腰を下ろす人の声。
声は幼さが残る男の子の声。

その少年の言葉を聞いて、獣は大層嬉しそうに笑う。

『ハハツ！ それにしてお前が一番とは……威儀も糞も無いな

『！』

「威儀なんて、俺には似合わないでしょ？ それにまだ『森神樹』^{グラウンドシリー}に加護を受けていない。見習いた」

少年も少し嬉しそうに言つ。

『まあ、それもすぐや。最初の頃は他の奴等からの反発が凄かったが、今では全ての奴等がお前を認めている。『森神樹』もそれはご理解しているわ』

獣が少年に近づく。

『認めて欲しい訳ではないんだけどね。それに、王にならなくとも特別困らないし』

少年は先程までの嬉しそうな声ではなく、億劫そうに言つ。

『相変わらず……まあ、そんなお前だからこそなのだがな』
獣は呆れ、それでもビートなく嬉しそうな声で言つ。

ふと、一人と一匹は同じ方向を見る。

『…………良くなんな暗闇の中で会話が出来ますね？』

茂みの中から一人の、声からして男が現れる。

『暗闇が嫌いか？』

獣が現れた男の方を見ながら尋ねる。

「嫌いではありませんよ。けれども、相手の顔を見ていないと話している気がしないのですよ」

男は「フフフフ」と笑つ。

『我等は夜目が利く。それは貴様も同じであろう?』
獸は呆れた様に男に尋ねる。

「そりなんですけどね。明かりを点けても大丈夫ですか?」

「大丈夫だよ」

少年が答える。

「それでは」

そう男が言つた瞬間、暗闇に閉ざされていた【森】が一瞬で明るくなる。

全体ではない。周りだけだ。

その明かりによつて少年や獸の表情がハッキリする。

少年の姿は黒髪に黒い瞳。灰色っぽい上下の服。
表情も声同様に幼さが抜けきつていない。

獸の外見は狼だ。黒い毛の色。口から出る牙の右側が欠けている。
だが、普通の狼と違うのが体に黒い靄の様なモノがかかっていると
言つ事だ。

そして、明かりを点けた男は白いローブを着ており、フードで顔
をすっぽり覆つてゐる。

その様子を見ながら狼が茶化す様に笑う。

『クハハッ! こんな所でも隠すのか? 用心深いと言つのか』

フードを被る男は苦笑しながらフードを脱ぐ。

「大変なんですよ。今の御時世

『そうだな……』『失われた魔法』を使う幻想種と今では言われる
人外。エルフ』

フードを脱いだ男。

白いロングヘア。蒼い瞳。そして尖った長い耳。

正にエルフ。

今では幻想種として恐れられる人外。

エルフはニ「リと笑いながら狼に言つ。

「まあ、貴方も十分幻想種ですよ？」『不確か^{ゴーストウルフ}な狼』

そう言われ、狼はエルフから田線を外す。

先程まで黙つてエルフと狼のやり取りを見ていた少年が口を開く。

「集まりは相変わらず悪いなあ～」

「まあ、集まると言つても毎度毎度何をする訳では在りませんからね」

エルフが腕を組む。

『面倒臭いだけだろうがな』

狼が大きく口を開け、欠伸をする。

すると、

「遅れましたあ～！！！」スイマセン、スイマセン……！

茂みの中から飛び出し、そのまま土下座をする青年。

『……良い加減その腰の低さと言つか、プライドの無さをどう

かした方が良いぞ?』

狼が土下座をする青年をみながら溜息を吐く。

「まあ、それが彼の良い所ですよ。顔を上げて下せり。怒つていま
せんから」

エルフが微笑みながら土下座する男に言う。

「スイマセンでした。本当にスイマセンでした」謝りながら頭を上げようとする男。

「ガオッ！！！！

顔を上げた瞬間、少年が青年の顔の前で大声を出した。青年は悲鳴を上げ、土下座をしたまま後ろに下がる。

「その様子を見ながら少年は笑う。
ハハハツ！ 本当に臆病者だよなあ！」

『あまり虐めるな。挙動不審が更に悪化して自殺しちまつた?』狼が呆れた様に注意する。

「大丈夫ですよ。臆病者は自殺するのにも躊躇りますから、微笑みながら酷い事を言うエルフ。

「御免な！ 大丈夫だぞ！ ！」

少年が笑いながら土下座をしながら震える青年の肩を叩く。

「あ、あまり吃驚させないで下れこよお~」

青年は顔を上げながら情けない声を出す。

金髪天パのタレ目の中だ。

「いやあ～チキンが余りにも面白にリアクションをしてくれるから
わ」

少年が年相応の笑みを浮かべる。

それを見て少し男はホッとした。

「心臓に悪いです……それと、僕の名前はチキンじゃないですよ
お～」

青年が情けない声を出しながら抗議する。なつていなが。

「ええ～美味しいじやん」

少年が首を傾げながら微笑む。

『確かにな。鶏は面白いな』

狼が「ジユルリ」と涎を流しながら言ひ。

「何にしても美味しいですよね。鶏は

エルフが微笑みながら言ひ。

「ぼ、僕食べられるんですかあ～？」
涙を流しながら情けない声を出す。

「食べる訳ないじゃん！」

少年が青年の肩を叩きながら笑ひ。

「よ、良かつたですう～」

『まあ、気を付ける』

狼がボソッと言う。

「出汁にしか出来ない様な氣もしますけどね」「エルフもボソッと言う。

それが聞こえなかつたのか、青年は涙を流しながら笑っていた。

「まあ、チキンは食べても美味しいから食べないけどな……」少年が大声で笑いながら言う。

「…………僕が太つていたら食べていたんですか？」

青年が笑みを固めたまま尋ねる。

「ん？」
「」

何故か沈黙。

青年は急いで少年から目線を外し、狼とエルフを交互に見る。だが、狼もエルフも沈黙している。

「な、な、な……！？ 何で答えないですか！？ どうしてですか！？」

アタフタしながら叫ぶ。情けない声で。

『なあ』に下らない事を大きな声で言つてゐるのか。情けない通り越して哀れ』

その声を聞き、少年・狼・エルフ・チキンは上を見上げる。

木の枝に腰を掛けながら笑う猿。

一見すれば唯の猿だ。だが、頭にはお面を付けてゐる。何処かの民族が被る様なけつたいな色合いのお面だ。

首からは猿が付けるには不釣り合いな青い石のネックレス。手首にも幾つかのアクセサリーが嵌められている。

『その猿を見ながら狼は不機嫌そうに言ひ。』

『『嘘吐きの猿』が何を言つてゐる。喉元を食い千切るぞ?』

『フフアツ! 惨い、惨い! これでは落ち落ち嘘も吐けない!』

猿はオーバーアクションをしながら甲高い声を出す。

それが狼の感に障る。

『貴様を喰い捨てたくて堪らないぞ? 気を付けろよ。獣には食物連鎖が付きものだ』

それを聞いて猿は狼に指を指す。

『お前が何時までも喰う側の獣だと? 傲るなよ。お前も喰われる側なんだからな』

そのまま猿と狼は囁み合つ。

その様子を見ながらチキンはオドオドしており、エルフは微笑み、少年は苦笑している。

『おや? 早く来たつもりなのだがな。所詮はつもりか』
茂みの中から四つ足で歩く獣。だが、狼ではない。

白い虎だ。

この【森】の生態系はどうなつてているのかと疑問に思ひ。

虎はノシノシと歩きながら辺りを見渡す。

『少ないが、仕方無い。それにこれ以上猿と狼が共に居ると互いを喰い合う羽目になつてしまふからな』

虎を見ながら少年が口を開く。

「で、態々集めて何を話すんだ? 『**ファンターム**』『**幻影**』」

幻影と言われ虎が笑う。

『氣付いておつたか。流石は王だな』

少年は王と言われ眉を緼める。

「簡単な話だ。本体は今西だろ? 流石のアンタでも此所まで直ぐ
さま戻つて来られないだろ? まあ、本氣を出せば話は別だけどな」

『その通りだ。その為『幻影』で来たと言ひ訳だ。さて、話を戻す
か』

そう言つた瞬間虎の雰囲気が変わる。

いや、それは少年・狼・猿も同じだ。

それを見てエルフも氣付く。氣付いていないのはチキンだけだ。

虎が何も無い所を見ながら呴く。

『話は後だな。何処の誰かが森の側に集まつている』

『方角的に南。『帝国』だな。もしくはそこらの小国か』
狼も虎同様の方角を見ながら呴く。

すると、狼が纏う黒い靄が完全に狼を包み込む。

そして、その靄が晴れた時には狼の姿はその場に無かつた。

『あちら側は確か狼の担当だ。俺は関係無し』
猿がアクセサリーを「ガチャガチャ」鳴らしながら呴く。

「私は人の前に出たくありませんね。殲滅出来る可能性は低いです」

『うし』

エルフが眉を細めながら言つ。

それを聞いて少年は立ち上がりながら眞（チキン以外）が見る方角へ歩いて行く。

「まあ、来なくとも俺とディガーハー居れば足りるや。それに向こうにはディガーハー以外の『不確かな狼』が居るからな」

『では、話は愚者を殲滅した後だ。頼むぞ王よ』

虎が少年を見ながらまるで頬を吊り上げる様に言つ。

王。それを聞いて少年は眉間に深い皺を寄せる。

「…………まあ、まだ王じゃないけど、ね！――！」

少年は脚に入れ、脚力で【森】の奥深くに飛び込む。

『帰つて来たら真っ先に貴様を喰つてやるよ――！』

【森】の中から狼の声が響く。猿へ向けた言葉だろう。

それを聞いて猿は鼻で笑う。

『それなら罷でも張つて待つていろ』

King and fantasy kind (後書き)

疲れた。それだけ残してベッドにダイブしたいと思っています。

Combat mania and kung-fu (前書き)

連続投稿

書いたら投稿したくなる。
しうがない。仕方無い。

ガランド大帝国側南領土。【森】付近。

時計の針が天辺を指す時間帯。

暗い空の下、100は超える兵士達が何かをしていた。

松明のお陰で辺りは昼並みだ。

だが、それでも【森】は暗闇と不気味さを放っていた。

鈍く光る鎧。そんな中に一人銀色の綺麗な鎧を着た兵士が居た。
この部隊を任せている隊長だろう。

その隊長は辺りを見渡しながら誰かを捜していた。

他の兵士と違つて兜は被つていない為、表情が良く解る。いや、
被つていたとしても解るだろう。隊長は苛立つていた。

「糞がツ！あの戦闘狂は何処だ！？何故居ない！？」

舌打ちをし、唾を吐き捨てる。

丁度その隊長の前を通った兵士に尋ねる。

「あの女は何処だ！？」

こきなり大きな声で尋ねられ、兵士は畏縮しながら答える。

「は、はい！ 先程「森を見てくる。直ぐ戻る」と言つて森の方へ行きました！…」

「なに？ ふざけやがつて！…！」

隊長はもう苛立ちを隠すつもりは無いのだろう。大きな声で叫ぶ。

「これだから

」

「これだから何かな？」

隊長が何かを言おうとした瞬間、それを遮る様に声が響く。その声が聞こえた瞬間、隊長はその声がした方を見る。

そこには黒髪・黒い瞳。そして全身を黒で固めた服装。その格好でも十分異質だ。しかも鎧なでは着ていない。軽装なのが一層異質さを醸し出す。

それに、何よりこの場に不釣り合いなのがその者が女性であるからだ。

すらりと長い髪。女性らしい体型。美しい容姿。

それは凄まじく場違いさを醸し出す。

隊長は女性の顔を睨む。そして直ぐにその視線を落とす。落とした先は女性の胸だ。

結構際どく開いた胸元。豊満な胸。激しい動きをすれば脱げるのでは？などと男ならば誰でも考えてしまう。

いつの間にか隊長は鼻の下を伸ばしていた。

女性はそんな隊長に気付きながらも気にせずに手を腰に当てながら

ら尋ねる。

「それで、私を捜していった様だけれども？ 何か御用かな？」

そう尋ねられ、隊長は女性の胸を見ながら答える。

「ん？ ああ、姿が見えなかつたからな。貴様の様な賞金稼ぎは信
用なんて無いに等しい。だから勝手な行動は慎め」

「そんな事で叫んでいたのか？ 短気は揃氣だぞ。まあ、今は雇わ
れている身だ。これ以上は勝手な事はしないさ」

女性は【森】を見つめながら答える。

その様子を見ながら隊長はやつと女性の胸から視線を外す。
そして、横目で少し離れた場所に設置されたテントを見る。

そこには周りの兵士と違う鎧を着た兵士。

真っ赤な鎧。『紅蓮騎士団』と呼ばれる特務部隊だ。

エリートだけを集めた部隊。

入れれば一家永劫を辿るとまで言われている。

そんな部隊の騎士が何故？

それが隊長が疑問に抱いている事だった。

【森】への侵攻は普通の戦争とは違つ。

言わばこれも十分特務だろ？

だけれど、それでも『紅蓮騎士団』の騎士が出張る事でも無い。

何か在るのか？ そう勘ぐるのも仕方の無い事だ。
紅蓮騎士団は一名。それだけでも十分な程だ。

そこまで戦力が必要な作戦なのだろうか？
そう思いながらも隊長は【森】を見つめた。

黒を纏う女性は赤い鎧を着た兵士を見ていた。

いや、騎士だつたかな？などと考えながら見つめる。

『紅蓮騎士団』有名過ぎる『ガランド大帝国』が誇る部隊。

それが何故？『紅蓮騎士団』を寄せこすのならば、自分を雇う必要が在ったのか？

何かが在る。女性は静かに笑みを浮かべた。

粗方の予想は付いていた。だからこそ笑みを浮かべたのだ。

戦闘狂。

先程隊長が言った事は間違いでは無い。

彼女を戦闘狂以外で表す言葉は無いだろ？。

戦いを好む戦闘狂。

賞金稼ぎになつたのも戦いと金稼ぎの両方を得る事が出来るからだ。

だが、理性を失い本能で戦う殺戮者ではない。

あくまでも仕事。殺したいと言つ欲はそこまで強くはない。

けれども戦いたいと欲は強い。

生きる為の生存本能ではない。唯の戦いたいと言つ欲だけで彼女は今まで生きてきたのだ。

ある意味獣だ。

理性が在るだけマシだとも思えてします。

人が本能で殺しをしないのは感情と言つ理性コリッタシタが働くからだ。

それを破壊してしまえば例え、どの様な理由が在ろうが戦いから殺戮へと意味を変える。

その分彼女は戦いで止めている。

戦いと言つても殺さずではない。殺しの正当化は愚行だが、それでもマシと言えよう。

そんな彼女が笑みを浮かべている。

良い意味の訳がない。

戦える。それが今の彼女のモチベーションを保つてこる。

何よりこの【森】と言つのが彼女の欲を刺激していた。

未知なる何か。それと戦える事が何よりも樂しみであった。

『ガランド大帝国』から依頼。

最初は不審に思つたが、依頼内容と高額な金に釣られた。

受けた時は少し後悔していたのだが、「まあ、良いか!」で片付けた。

ポジティブさが爆発している。それ程に楽しみなのだろう。

だが、そんな中でも彼女は考えていた。

何故自分を雇つたのだろうか、と。

兵士を使つならば自分の必要性は無いのではないか、と。

だが、その思考も途中で止めた。

考えるのが苦手な訳ではない。唯その考えはこれは以上無駄だと思つたからだ。

『紅蓮騎士団』から視線を外し再度【森】を見る。
風が吹き葉が揺れる。

ゆつくつと唇を舐める。

依頼内容は「森の中へ侵攻し敵の殲滅」。
不透明な依頼内容。

だが、それで十分だった。

彼女のモチベーションは十分上がっている。

戦いの本能を理性が必死に押さえているのも知らずに。

設置されたテントの中。真っ赤な鎧を纏う騎士が椅子に腰を掛けていた。

『紅蓮騎士団』

エリート集団と呼ばれる部隊の名。

その内の一人が椅子に腰を掛けたまま、微かに開いた隙間から外を見ていた。

「……アレが『黒き鎌使い』か」

目線の先には全身黒の女性。

先程まで此方を見ていたが今は【森】を見ている。

「『黒き鎌使い』名づけの賞金稼ぎ。名をナイトメアーと名乗つて
います。偽名でしようけどね」「もう一人の赤い鎧を纏う騎士が言つ。

二人とも声からして女性だ。

『黒き鎌使い』を見る騎士がそれを聞いて呟く。
ナイトメアー
「悪夢…………か。過ぎた名だ」

その後数秒『黒き鎌使い』を見て、騎士は田線をテント内のもう一人の騎士に変える。

「上の奴等もまどろっこいやり方をする。態々雇つ雇わないのやり取りの必要性が全然感じられない。余程暇なのだろうな」

面倒臭そうに騎士は言った。

それを聞いたもう一人の騎士は苦笑しながら答える。

「多少なりとも利益にしたかつたのでしよう。所詮は戦闘狂。戦える場を与えれば戦う。裏切れば殺す。その為の私達ですよ？まあ、だとしても面倒なやり方ですけどね。暇潰しと言つのが適切でしょう」

「まあ、間違つてはいない。だけれど、最後の方は違うぞ？」
それは騎士の言つた通り。だが、違う所が在る。

「まあ、間違つてはいない。だけれど、最後の方は違うぞ？」
騎士が兜を脱ぎながら言つ。

「最後？」それは何処を？
「何処が違うのか？見当も付かないらしく尋ねる。

「簡単だ。裏切れば殺せではない
兜を脱いだ騎士の素顔。」

綺麗なウェーブのかかった金髪。碧と蒼のオッドアイ。容姿端麗
と言える。

その美しい顔で頬を吊り上げる。

「 裏切らなくとも殺すのだよ。それが……我々の任だ」

作戦開始は間も無く。

Combat mania and kung-fu (後書き)

進まないのは今に始まった事じゃない。

To an overwhelming, disadvantageous

進まないなあ。

ラブコメをを目指しているのだけれど、全然だ。

何時になれば書けるのだろうか。
イチャイチャとかさあ。

暗い【森】の中。少年と狼は身を潜めていた。

田の前には大量の兵士。

その兵士を見て狼が嫌気が差した様な声を出す。

『これだけの滓を……吐き気がする』

その一言で狼が人間を嫌つてているのが解る。
だが、それだとこの少年は?と思ってしまう。

少年は狼の隣で兵士達を見ている。

狼は少年を見ずに尋ねる。

『で、骨の有りそうな奴は居たか?』

その問いに少年は直ぐには答えない。

『居ないみたいだな』

少年の答えを聞かずに狼が言つ。

その意見に頷こうとした瞬間、少年が一人の人間を見つける。

「……あれは」

『ん? 居たのか?』

狼も少年が見ている人間を見る。

少年の視線の先には全身を黒で固めた女性が居た。

『女？…………だが、異様だな』
狼が何かを感じ取る。

その言葉に少年は頷く。

「魔力だ。まさかこんな所で『失われた魔法^{ロスト・マジック}』を扱える人間に会うなんて」

『それは早合点し過ぎた。魔力を保持している奴など少くない。

問題はそれを使えるかどうかだ』

狼は少年を見ながら言つ。

「そうだな。でも、異様なのは確かだ」

『そう言いながら少年は後ろに下がる。

狼もそれに続き後ろに下がる。

『作戦は？』

「俺的にはあの女が気になる。周りは兵士だけなのにあの女だけ兵士じゃなかつた」

少年が切り株に腰を下ろしながら答える。

『そりだな。では、向こうの出方を見るか。バルデトとクィスには待機だと伝える』

狼はそう言いながら【森】の闇に駆けて行つた。

残つた少年はもう一度外を見た。

視界に居るのは全身黒の女性。

その女性を見ながら少年は少し微笑んだ。
その真意は解らない。

だが、その微笑みは年相応の無垢な笑みだった。

『黒き鎌使い』ナイトメアーは【森】の前に立っていた。
後ろには複数の兵士。その兵士達の前に隊長が腕を組み仁王立ち
している。

「作戦内容は解つているだろ？」
隊長がナイトメアーに尋ねる。

ナイトメアーは振り返らずに答える。
「内容？ ああ、あの不透明なアレか。大体はな」

それを聞いた隊長は後ろに立つ兵士に何かを尋ね、そしてナイトメアーに言つ。

「良し。では行けッ！……」

その命令に若干眉を細め、けれども仕方無いと言つた感じでナイトメアーは【森】へ歩き出す。

暗い、暗い闇。

【森】に入つて直ぐに周りが見えなくなる。

外では松明の明かりで昼並みなのだが、【森】の中は暗闇だ。少し入つただけで光が届かない常闇へと変わる。

だが、ナイトメアーは気にせず歩く。

夜目が利くらしい。

全身黒の彼女は闇に同化し、息を潜めながら移動する。

見渡しても生き物の気配が無い。

あの噂、「【森】に入いれば呪い殺される」。これが本当ならば何かしらのアクションが在るはずだ。

だが、元々彼女はそう言つ噂の類信じ無い方だ。

所詮は【森】に住む獣の仕業だろう。

そう思いながらも何かイレギュラーが起きないか楽しみにもしていた。

すると、微かに生き物の気配を感じた。

立ち止まり、辺りを見渡す。

けれども夜目が利くと言つても隅々まで見える訳ではない。

静かに、静かに息を潜め辺りを見渡す。

何かが居る。だが、それが何かは解らない。
獸か、はたまた人外か。

ガサツ
。

後ろで茂みが音を鳴らす。

誰か居るのか？彼女は差ほど慌てず息を潜める。

ガサツ ガサガサツ
。

ナイトメアの周りの茂みが不自然に揺れる。

何かが居る。だが、直ぐさま襲つて来ないと言つ事は多少なりとも考える事の出来るモノ。

彼女は直ぐさま攻撃出来る体勢を取る。

ガサツ！
。

茂みから何かが飛び出す。

彼女は笑みを浮かべ、その方へ攻撃しようとした瞬間、

「甘い」

声が響く。

「なつ！？」

彼女は慌てて後ろを振り返ろうとする。
だが、それは遅かった。

「ぐッ！！」

何かが彼女の首を掴み、そのまま押し倒される。

首を押さえられ、そして胸に刃物の刃先が当たる。少し痛みが走る。

「ぐッ！…………」これは…………」

ナイトメアーは自分の首を掴む手が人の手だと気がつく。

目を見開き、自分を押し倒す何かを凝視する。

「なつ…………子供だと！？」

彼女は驚愕した。

自分を押し倒し、刃物を突き付けているのは子供だった。

だが、直ぐさまその少年の異常性に気がつく。

「貴様…………何者だッ！？」

ナイトメアーが尋ねる。だが、少年は無表情のままだった。

喋れないのか？いや、警戒しているのか？

彼女は考えながら今の状況の打破を考えていた。

子供だと言つて油断しない方が良いな。

【森】の中に居るのだ。只者ではないだろうし。ナイトメアーは考えながら左手を少し動かす。

「ぐッ！！」

だが、少し動かしただけで少年は首を強く掴む。

胸に突き付けられた刃先が皮膚にチクリと刺さる。

血が流れているのが解る。

すると、先程まで黙っていた子供が口を開いた。

「……何故使わない？」

一瞬その言葉の意味が解らなかつた。

そして、それを理解した瞬間この子供は危険だと本能が知らせた。

「チツ！……！」

舌打ちをし、直ぐさま左手に力を集める。

掌を開き力を籠める。その瞬間、掌に黒い固まりが生まれる。

その黒い固まりは瞬時に形を変える。
それは黒い鎌。

「フツ！……」

ナイトメアーその黒い鎌を少年へ振るひ。

だが、少年はそれを紙一重で躱し後ろに跳ぶ。

躱された。だが、退かす事は出来た。

彼女は少年から目を離さずに立ち上がる。

子供は涼しい顔でナイトメアーを見続けていた。
その目に若干の苛立ちを感じていた。

何故、こんな子供がそんな目を出来る？

一瞬感情が揺らいだ。だが、その感情を冷酷さが抑え込む。

黒い鎌を構える。

「……矢張り使えたか。『失われた魔法』お前等では言ひ所の『ロスト・マジック』アンノウ・マジック未知魔法』」

少年が彼女の持つ黒い鎌を見ながら呟く。

それを聞いて彼女は背筋を凍らせた。
まったく感情の籠もっていない声。

こんな子供が出せるモノなのか？ そう思いながら唇を噛んだ。

「良く勉強出来ているね。頭でも撫でて欲しいかい？」

彼女は笑みを浮かべる。

余裕は無い。

彼女は今初めて自分の目の前に立つ子供の強さを感じていた。

異質。異常。

それはどれも初めて感じるモノだった。

逃げる。本能が告げる。

気を抜いた瞬間、きっと自分は瞬殺される。
頭の中でそのビジョンが何度も再生される。

それに、この子供は彼女が『未知魔法』^{アンノウ・マジック}を使える事を予測していた。

それが何よりも驚愕だった。
勘でも気付く訳がない。

鎌の柄を握る力が強くなる。
どう動く？ 右か？ 左か？ 上か？ 下か？
駄目だ。どれも愚策。

ナイトメアーは自身の田の前に立つ少年を睨み付ける。
汗が流れる。

すると、少年が口を開く。歳不相応な口調で。

「…………中途半端な『失われた魔^{ロスト・マジック}法』だな。それ以外使えないのか？」

その言葉に唇を噛む。

舐められている。こんな餓鬼に。

苛立ち。苛立ち。苛立ち。

「…………糞餓鬼が」

そう呟いた瞬間、手に持つ鎌がグネグネと動き出す。
そして、少年を睨み呟く。

「『^{ナイトメアー・オブ・ナイトメア}悪靈の惡夢』」

鎌は形を固定せずに不規則に形を変えている。

「殺す」

ナイトメアーはそれだけ言い、動き出す。

手に持つ鎌を振るう。

それを少年は紙一重で躱そうとする。だが、喉元をギリギリで過ぎようとする鎌の刃が不規則に揺れ形を瞬時に変える。

「……？」

少年は田を見開き、瞬時に刃を蹴り上げ後ろへ飛ぶ。

少年は鎌を凝視する。

鎌は不規則に揺れ、動いている。まるで生き物の様に。

鎌を凝視したまま短剣を構える。

それを見てナイトメア^{リミテッドマジック}は眉を細めた。

先程の短剣……『有限魔法』か？

鎌を構える。

彼女の表情には余裕は感じられない。

それ程のやり取り。

先程の攻撃も奇襲紛いの一発だ。もつ一度やつても今度は完璧に躱されるだろう。

その為、次の攻撃からは自分の反応速度がモノを言つ。少年は見た目からしても力押しで来るタイプではない。

スピードで翻弄して瞬殺。

暗殺に向いたタイプだ。

その反面ナイトメアは力で押すタイプだった。

鎌と言う武器自体も小回りに向かない。

唯でさえ彼女の持つ鎌は大きい。

だが、彼女にはそれを扱える程の技量が在った。

けれども格上の相手だとこの鎌と言つ武器では手に余る。

それでも彼女は武器を変える素振りは見せない。
まさか鎌しか造り出せない訳では在るまい。

そう、彼女のそれはプライドだった。
この武器で刈り取る。

余裕の無い表情のまま唇を舐める。

沸々と沸き上がる高揚感。

彼女は気付いていなかった。今この状況を本能が楽しんでいる事

だ。

命のやり取り。しかも自分が劣勢。

これ程に生きている事を実感出来るだらうか。

これこそが彼女の異常だ。

生に対して執着していない様に見えて一番貪欲に生を求め、生を理解している。

だからこそ、死ぬ訳にもいかないし逃げる事もしない。

けれども、だからこそ読まれやすい。

現に少年は彼女の、ナイトメアの異常性に気付いていた。

この状況を楽しもうとしている。

この時点では少年は自分が負けると言つ事が無いと確信する。

戦いを楽しむと言つ事は勝敗を求めないと言つ事。

まずは自分の欲を満たす。勝敗は二の次。

きっとこの女は自分が負けると解れば容易く負けを認めるだらう。

生きる意味を本能的に理解しているからこそ、だ。

逃げはしない。それはプライド。

だが、負けを認めないのはプライドではなく傲りだ。

少年は少し悩んだ。

それはナイトメアへの対処だ。

殺すか。殺さないか。

殺せば済む話はある。

そう、済む話なのだ。

「……一つ尋ねる

少年は短剣を構えたまま尋ねる。

だが、ナイトメアはそれに全く答えない。

それでも少年は口を閉ざさず尋ねる。

「森の外に居る兵士は貴様の仲間か？ それとも敵か？」

この質問は少年の立場からしては愚問だった。

尋ねてはいけない質問。優勢な彼がこれを言つてしまつた場合、自分が殺すか殺さないかで迷つてている事を知らせてしまう。

彼女は口を少し開く。

予想外の質問だったのだろう。

少し返答に悩む。

殺すか殺さないかで悩んでいると言つ事は、返答次第で即決すると言つ事だ。

一字一句違えない様に言わなければ、即少年は動く。

唇を噛み、静かに口を開く。

血と唾液が混じり口の中に広がる。

「仲間ではない。私は雇われの身でね」

「雇われ？ 殺し屋か？」

「いや、賞金稼ぎだ。まあ、殺し屋と大して変わらないがな」
そう言つてナイトメアーは苦笑した。自然に。

その表情を見て少年は驚いた顔をした。

「……………そ、う、か」

それだけ言つと少年は構えた短剣を腰に戻した。

「……………何のつもりだ？ 情けか？」

ナイトメアーは怪訝し、顔を歪めた。

「いや、残念だけどそりじゃない。これは何て言つか…………ええへ
と…………「ううへん」

そう言いながら少年は考え込んでしまつた。

その様子を見ながらナイトメアーは首を傾げた。
それは少年から異常さが消えたからである。

短剣をしまうまでは異常な殺氣を放ち、有無も言わさない威圧感
が在つた。

けれども今の少年には威圧感のいの字も無い。

拍子抜け。それが素直な感想だつた。

「…………ん~」

少年は未だに考え込んでいる。

何をそんなに考える事があるのか。

ナイトメアーは溜息を吐き、鎌を消した。

「君、一体何者だ？」

武器を消す事は自殺行為だが、今の彼女は興が削がれている。既に戦う気は毛頭無かつた。

「何者？…………何て言つたら良いのや？」

「そう言つて少年は笑つた。

年相応な無垢で、純粹な笑み。
少し驚き、そして思わず凝視してしまつた。

ギャップと言うヤツか。

先程のやり取りでの高揚感が消えていないせいなのか。

ナイトメアーは少年から視線を外した。

「…………？」

すると、少年がいきなり殺氣を放つた。

それに驚き再度鎌を造り出そうとする。

だが、少年は彼女に殺氣を向けているのではなかつた。

「…………糞が」

少年は忌々しそうに吐き捨てる。

その表情は怒りで歪んでいた。

彼女は何がなにやら意味が解らず、警戒を続けていた。

すると

【森】が異常に明るくなつてこるのを感じ付く。

「これは……」

彼女は空を見上げる。

赤い赤い 燃えさかる空を。

To an overwhelming, disadvantageous

戦闘シーンが少し面倒だった。

此所で勝敗つけるつもりが無かつたので。

まだ少年、つまりは主人公の名前が出ない。

タイミングを見失った・・・。

F i g u r e o f s t a r t (前書き)

中々に大変だ
・
・
・
。

真夜中の箸なのに、空は赤く光っている。

その空を見上げながら少年は奥歯を噛み締めた。

「まさか火を放つてくるとは」

「全て燃やすつもりではないだろ？。炙り出すつもりなんだろ？」
ナイトメアーも少年同様空を見上げている。

「クソが。愚策中の愚策だな」

少年が空から視線を外し歩き出す。

「私を放つて置いて良いのか？ 何かしでかすかもしないぞ？」
ナイトメアーが薄く笑みを浮かべながら尋ねる。

少年は半身だけ振り返り、笑みを浮かべる。
「じゃあ～着いて来てよ」

「は？」

予想外の返答に彼女はあんぐりする。

「それなら放つて置くって問題を解決出来る」
少年はそれだけ言って歩き出す。

「…………何なんだ一体」
 彼女は少年のどれが本当でどれが嘘か見抜けないでいた。
 だが、下手に動けない状況で未だに殺されていないのは幸いだろ
 う。

ナイトメアーは一定の距離を開けて少年に着いて行く。
 すると、

『おいセン！』

茂みから何かが飛び出してくる。

それが獣であると理解するのに数秒掛かった。
 そして、理解した後に異常さに気付く。

「…………何故狼が人語を？」

『んああ？…………何故人間の女が…………コイツは兵士共の中に居
 た…………』

狼はナイトメアーを睨みながら近づく。

普段の【森】ならば暗闇で狼かどうかなど解らない。
 だけれど今は火の明るさでうつすらと見える。

ナイトメアーは驚愕していた。

それは自分の田の前に居る獣のせいだ。

黒い毛色。赤い眼。体に纏わる黒い靄。
 そして人語を話す。

「…………まさか『不確かな狼』か？」

『フンッ！ だつたらどうだつて？ 貴様は今から俺に喰われるんだよ。何を知つても無意味だ』
狼は鼻で笑いながら近づく。

ナイトメアーは狼が言つた事よりも、未だに狼が喋ると言つ現象の方に驚いていた。

『不確かな狼』
ゴーストウルフ

名の通り存在が不確かな事と、その狼が幽霊の様に実体が無いと言われる所から付けられた名だ。

『世界が変わった日』^{ワールド・チェンジ} の時に『未知魔法』^{アンノウン・マジック}と共に消えたと言わ
れている。幻想種。

今では絵本や童話になつており、伝説上の生き物だ。

その生き物が田の前に居る。

驚愕。そして、その状況で思わず唇を舐めた。

「ハハッ！ 伝説上の生き物と『対面なんて……最高だね』

そう言いながらナイトメアーは瞬時に鎌を造り出す。

その様子を見た狼が田を丸くする。

『失われた魔法』^{ロスト・マジック}！？ 本当に使えたのか！』

ナイトメアーは造り出した黒い鎌を、最小限の動作で狼の首めが
けて振る。』

それは一瞬。

殺つた！！

そう彼女は確信した。

だが、

『小娘が』

狼がそう呟き笑みを浮かべた瞬間、鎌の刃が狼の体をすり抜けた。

「なつ！？」

ナイトメアーは驚き、後ろに下がるうとした。

すると、狼が体に纏っていた黒い靄が完全に狼を包み込み、その場から姿を消す。

「！？」

ナイトメアーは辺りを見渡す。

消えた！？

そう思った時、

『終わりだ』

ナイトメアーの耳元で狼が囁く。

耳元には黒い靄に包まれた、狼の頭だけが宙を浮いていた。

彼女は体を硬直させる。

これ程の距離まで近づかれて、反応出来なかつた。

そして、急に襲い来る死への感覚。

直ぐ側で狼が口を開く。

鋭く鈍く光る牙。

その牙がナイトメアーの首筋に食い込む瞬間、

「そこまでだ」

今まで見ていた少年が止める。

『……何故だ?』

狼が首筋に牙を当てたまま少年に尋ねる。

「殺す必要性が今は無い」

少年は腕を組みながら淡々と言つ。

『必要性? それを求める必要性が無いが?』

「俺がその女と共に居た時点で、俺に今は殺す気が無い事ぐらい解るだろ?」

少年がそう言いながら狼を睨む。

『チツ!』

狼がゆっくり首筋から牙を離す。

そして黒い靄に包まれた頭部がゆっくりと少年の側まで行く。

少年の側まで行つた時には何時の間にか狼の頭部は体に付いていた。

その光景を見ながらナイトメアーは冷や汗を流した。

もし少年が止めなければ確実に喉元を噛み切られていた。

彼女自身が油断していたのもあつた。

それでも力量は断然狼の方が上だつた。

幻想種に会えた嬉しさと好奇心で行動してしまつた事を後悔していた。

『命拾いしたな女。だが、気を付けろよ？』この森ではテメエは餌だよ』

狼がニヤリと笑みを作る。

「…………確かに。貴様みたいなのが大量に居るのなら私は餌だな」頬を流れる汗を拭う。

此所まで力量差を見せつけられたのは初めてだった。本気を出してないとは言え、それで死ねば元も子も無い。

悔しさの反面彼女は嬉しさも感じていた。

田標と言つモノを見つけた様な気がしたからだ。

すると、狼が思い出した様に少年に話しかける。

『そうだセン！！ 兵士共が森に火を放ちやがったぞ！！』

それを聞いた少年は「解つている」と呟き、ナイトメアーを見た。「アンタどうする？」

質問の意味が解らずナイトメアーが首を傾げる。

その様子に少年は笑いながら説明する。

「簡単な質問だ。此所で死ぬか後で死ぬかって事を？」

少年は笑いながら言つた。殺氣や威圧感などは含まれていない。だが、ナイトメアーは背筋を凍らせた。

本気だと解つているからだ。

それに、先程少年は言つた。「今は殺す気が無い」と。

生かされていると言つ事を理解させられる。

「何時でも殺せる」そう言われている。

彼女は静かに口を開く。

「……少しでも長く息をしていたいね

それを聞いて少年が歩き出す。

「それなら、付いて来てよ」

『……チツ！ 潔く死ねば良いものを』

狼が舌打ちしながら少年の後を追う。

その様子を見ながら、今なら逃げられるのでは？と思つた彼女だつたが、この【森】は彼等のホーム。下手に動けば殺される。

ゆつくりと彼等の後を追う。

少しでも長く生きられるのならば、当然付いて行くだろう。

そこまで彼女は潔い人間ではない。

負けイコール死が彼女の方程式ではないからだ。

彼女にとつての死は、最後まで足搔いての死なのだから。

【森】の外。

兵士達が【森】へ向かつて火が付いた矢を放つていた。

その様子を見ながら『紅蓮騎士団』の騎士が舌打ちした。
「愚策だな。これで炙り出せると思つてはいるのか?」

そう吐き捨てた騎士の隣に立つもう一人の騎士も言つ。
「タイミングも最悪です。これでは『黒き鎌使い』に勘づかれます
よ」

この作戦を考え実行したのは一応この作戦を任せている隊長だ。
『紅蓮騎士団』はこの中では一番偉いのだが、この作戦に関して
は別任務で来ている為口出しはしない。と言つ約束事が結ばれてい
る。

その別任務と言つのが『黒き鎌使い』の抹殺と【森】の調査だ。
だが、この様子だとその『黒き鎌使い』の抹殺が不可能に近くな
つた。

それでも何も言わずに傍観しているのは約束事があるからだろう。
「……まあ、何かを言つても良いのだがな。面倒だから何もしな
いだけで」

『『黒き鎌使い』の抹殺が失敗しても森への調査が上手く行けば問
題なしですからね』

火は盛大に【森】を焼いていた。

その様子を眺めながら、騎士が呟く。

「あの女とは戦つてみたかったのだがな。この様子だと残念ながら

諦めるしかないか

ナウザキトントの中に床ひびきした時、

「ぐああああああああああああああああああああああああああシツシツ！！」

「な、な！ 何だ、さうやああああああああああああああああああシツシツ

！！」

「……？」

兵士達の悲鳴。

それを聞いて騎士は振り返る。

すると、燃える【森】から一人の女が現れる。
それを見て騎士は驚きの声を出した。

「…………まさか、現れるとはな」

現れた女は鎌を持ち、不敵な笑みを浮かべていた。

「貴様シツシツ！！！！！」

複数の兵士達が剣を翳しながら女に向かつて走り出す。

それを見て、女は浮かべる笑みを一層に深くした。

「『サウザンド・オブ・ナイトメア』
幾千もの悪夢』」

そう女が言つた瞬間、手に持つ鎌の刃が弾け飛ぶ。

その弾け飛んだ刃は、黒い固まりとなり兵士達めがけて飛ぶ。

「……………」「……………」「……………」

兵士達は叫び、血を噴き出し倒れて行く。

「まさか、あれは『未知魔法』!? 扱えるのか!?」
アンノウンマジック

「匂ぬこ……匂ぬこも……」

兜で顔は見えないが、彼女は笑みを浮かべていてるだろう。

「アロアー！！ 私達も行くぞーー！」

「一人の騎士はそぞろ叫び、進み出す」

フロアと呼ばれた騎士も剣を抜き、後に続く。

すると、【森】から複数の何かが飛び出した。

「！？」

騎士はそれを見つめる。

誰かがそう口にした。

【森】から飛び出したのは黒い狼達。

その狼の一匹、赤い眼。右側が欠けた牙。その狼は女の後ろで止まり、兵士達を睨んでいた。

その狼が女の側まで行く。

『愚者共！！ 貴様等は我等の森を汚した！！ その代償…………貴様等の死で払つて貰うぞ…………』

狼が声を発した。

「なつ！？ まさか『不確かな狼^{ゴーストウルフ}』か！？」

騎士が驚く。それはこの場に居た全ての者もだらう。

『行くぞ！！！ 我等の牙の鋭さ…………見せつけるツツツ…………』狼がそう叫んだ瞬間、全ての狼が兵士に向かつて走り出す。

「クソが！！ まさか『黒き鎌使い』は【森】となんだかの繫がりを！！」

騎士がそう叫び、走り出し叫ぶ。

「怯むな！！ 我々は『ガランド大帝国』の剣だぞ！！ 我々が獸如きに怖じけ付いてどうする… 前を見よ！ 剣を構えよ！ 我々には力が在る…………」

その叫びを聞いた瞬間、逃げようとした兵士達が剣を構える。土壇場でのこの統率力が中々だつた。

だが、それだけで切り抜ける程の力は持ち合わせていなかつた。

先程叫んだ狼とは違う、尻尾に鎖を巻き付けた狼が叫ぶ。

『塵共が！！ テメエー等の末路は死だけなんだよツツ！！ 獣の恐ろしさを体に刻んでやるぜツツツ！！！！』

叫び、狼が纏っていた黒い靄が完全に狼を包み込む。

その瞬間、その黒い靄が凄まじい速さで動き、兵士達を噛み殺して行く。

「アレが『不確かな狼』の力か！？」

そう騎士が吐き捨て時、フロアが叫ぶ。

「レイナード隊長！……！」

名を呼ばれ、騎士が振り返ろうとした時何かが迫つて来ているのに気付く。

「なっ！…？」

兵士達の間を縫つて、何かがレイナードと呼ばれた騎士へ向かつて来ている。

その存在に気付いた兵士達が攻撃するが、全て躲し向かつている。

「ハツツ！…！」

フロアが落ちていた槍を拾い何かに向かつて投げた。

だが、その何かは投げられた槍を紙一重で躰し、通り過ぎる瞬間に槍の柄を掴む。

「なっ！…？」

それに驚きながらもフロアは剣を構え走り出す。

そこでレイナードがその何かが何なのか気付く。
「子供だとツ！…？」

少年は姿勢を低くし、槍を構えながらフロアに向かつて駆ける。そして、その槍を投げるモーションに入る。

それを見てレイナードは直感で危険だと気付いた。

「フロア！…！ 避けろツツツ！…！」

フロアは動かず剣を構えている。

アレは避けなければ駄目だ！！！

そう思い、レイナードは短剣を抜いた。

少年かはフロアめがけて槍を投げた。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

凄まじい速さで槍が投げ出された。

「なつ！！！？」

その異常な速さに驚き、動きが一瞬止まる。

当たる。

そうフロアが思った瞬間、声が響く。

「貫けツツツ！！！！！」

その叫び声が響いた瞬間、投げられた槍の真横に何かが衝突し、槍をへし折る。

「れ、レイナード隊長……」

フロアがレイナードを見て名を呟く。その表情は安堵。

そのレイナードは短剣の刃先を少年に向けていた。

「此所で使う気は毛頭無かつたのだがな。お前は余りにも危険だ」
彼女は短剣の柄を掴む力を強くする。

少年はゆっくりと腰から短剣を抜く。

そして、笑みを作る。

「俺も使うとは思わなかつた……かな？」

これが一人の初めての対峙だった

。

F i g m e t o f s t a r t (後書き)

少し疲れた。いや、スゲエー疲れた。

どうしてナイトメアーが狼と一緒に戦っているかは次回。

それでは・・・。

Meaning of life and death (前書き)

短いです。

まあ、うん。この話から一気に書いていたのだけれど、長くなるし〜。って事で次回へ。

ナイトメアーと少年＆狼達が兵士を奇襲する数分前。

【森】の中から兵士達を見ていた。

『火を放ちやがつて……喰い殺すぞ』
狼が殺氣立ちながら顔を歪める。

「…………その前にだよ」

少年は兵士達から視線を外し、腕を上げる。

ナイトメアーは何をしているか解らず、尋ねようとした瞬間、囲まれる。

「！？…………狼」

周囲に、100程の狼が彼女を睨みながら唸つていた。

すると、その狼の群れの中から尻尾に鎖を巻き付けた一頭の狼が前に出る。

その狼を見た瞬間にナイトメアーは気付く。

「…………一頭目の『不確か^{ゴースト}な狼』…………」

『さつきから何か臭うと思つたら、人間の臭いか』
小馬鹿にしながら笑う狼。

「こんなに大量の狼が近くに居たのに気付かなかつたなんて……」

ああ、獣臭くて逆に気付かなかつたのかしら？
挑発し、微笑む。

『んああ？ 犀めてるのか』『アーッ……』
狼は簡単に挑発に乗る。

すると、その狼の後ろから白い狼が現れる。
『落ち着きなさいよ？ そんな簡単に挑発に乗つてどうするの？』

「なつ！？ 白い『不確定狼』！…？」

『あら？ 白いのを見るのは初めて？ ……ああ、白じやなくとも
初めてよね』

そう言いながら白い狼は少年を見る。

『どうします？ 此所でこの子を噛み殺しますか？』

『ハツ！ 当たり前じゃねえーか！…！』

狼が叫ぶ。

『バルテト。少し黙れ』

最初から居た狼が叫ぶ狼を睨む。

『んああ？ テメエー誰に命令してんだ』『アーッ……』

『本当に少し黙りなさいよ』

白い狼は溜息を吐く。

『クイズまで…………解つたよ！ 黙れば良いんだろッ！…！』

そう言い、バルテトと呼ばれた狼が拗ねる。

『さてさて、煩いのが黙つた所で…………どうあるのですか？』

再度白い狼、クイスは少年に尋ねる。

少年は何も言わずに、ナイトメアーを見ていた。
その場に異様な空気が流れる。

ナイトメアーは額から流れ出る汗すら拭える余裕は無い。
動けば殺される。その様な錯覚に襲われているからだ。

すると、少年が口を開く。

「……尋ねる」

その言葉に無言で彼女は頷く。

「貴様は死を恐れるか？」

「死を……恐れる？」

その問いの真意が解らず、彼女は考える。

だが、少年は答えを聞かずに続ける。
「貴様は生を恐れるか？」

少年は淡々と尋ねる。

「貴様は何を求める？」

問いの意味を理解出来ない。

すると、少年が短剣を腰から抜き、ナイトメアーに向ける。

硬直。鎌を造り出そうとしたが、周りには『不確かな狼』が三頭
も居る。下手に動けば瞬殺だ。

その為、唯々短剣の刃先と少年の顔を交互に見つめた。

「答える。貴様にとつての生死を」

そう少年が言つた瞬間、少年から殺氣が放たれる。

「ツツ！……？」

一瞬目の前が真つ暗になり、倒れそうになつたのを必死に堪えた。少年は光の宿らない田で彼女を睨む。

彼女は必死に考えていた。

どう言えば助かる？何を言えば殺される？

「どうした？ 貴様にとつての生死を尋ねているのだぞ？」

少年が言つ。

その言葉に、彼女は気付く。

そう、こんな問いの答えなど尋ねた者のさじ加減でビリビリでもなるのだ。

そんな答えが疎らな問いに、完璧な答えなど無い。

彼女は唇を軽く噛む。

そして、少年を見据える。

「……私にとつての生死は意味を探す事さ」

「意味？」

「ああ。まだ、人間は完璧な生死の意味を理解していない。人の命を軽く見ているのも、それはどうして人が産まれるのかを理解していないからだ。私自身もそうだ。もし、人は神が産み落とした神秘と言つならば、人は人を殺さないだろう。だが、そんな事は有り得ない。だから人は殺し合つ。私自身それでも十分だと思うんだけどね。でも、私は理由も無しに殺されるのはまっぴら御免なんだよ。私はまだ自分が産まれた意味を理解していない。そして、奪う意味

も。だから死ねない。これが私の考える曖昧な生死さ

彼女は生死を求めている。

産まれた意味と、死ぬ意味。そして奪う意味を。

生死などと簡単に言うが、世界の何割の人間がその意味を理解しているのだろうか。

自然の摂理だと片付けているのではないだろうか。
それで納得する者も居るだろう。

だが、彼女はそれで納得は出来なかつた。

だから彼女は死を感じる。

その意味を求める為に。矛盾した探求。

それこそが戦鬪狂の異常さの根源。

「……傲慢だな。求める為には人を殺すのもやむを得ないと言つのか？」

少年が睨む。

彼女は退かず、怯えず答える。

「傲慢じやなければ、私は既にこの世とさよならをしているよ。私は強欲なんだ。だから生きたい。だから知りたい。それを失えば、私は私ではなくなる」

聞いただけでは彼女は唯の強欲な殺人鬼だ。

そんな彼女の生死についてを聞いた所で、心は揺れない。

だが、この世界は綺麗事で片付けられる程簡単では無い。
人殺しは駄目など、解りきった事。

それでも奪う。『の中に信じる何かが在るか』。

「…………そ、うか。それがお前の生死か。意味を求める為に死に触れる事を選んだ・・・か」

そう言い、少年は横に居る狼を見る。

『…………ハツ！ もっと綺麗事を並べると思つたんだがな。まさかこんな答えが返つてくるとは思ひもしなかった』

最初に出会つた狼が忌々しそうに言つ。

「ハハツ！ そうだね。逆に清々しいくらいだ
笑いながら短剣をしまつ。

その様子を見ていたナイトメアが恐る恐る尋ねる。

「…………私は助かったのか？」

その問いを聞いて、クイスは愉快そうに笑う。

『フフフツ。あんな風に言つていたのに、貴女は自分の命に対しても貪欲ね』

何か言つ返そつたが、その通りだつた為彼女は苦笑した。

「さてと、んじゃ自己紹介をさせてもらうよ
少年は微笑みながら言つ。

「俺の名前はセンだ。そして、コイツがディガー」

そう言い、隣に居た右側の牙が欠けている狼の頭を撫でる。

『よひしくはしないぞ？ 下手な事をすれば即殺だ』

そう言い、ニヤリと笑う。

「んで、そつちの白いのがクイスだ」

白い狼はナイトメアー見る。

『よろしくねお嬢ちゃん』

「そしてそつちで拗ねているのがバルデト」

そう言い、センが指さした先には未だに拗ねている狼が居た。

『フンシ！俺は認めてねえーよ』

「それじゃ、君の名前は？」

そう言いセンがナイトメアーを見る。

「あつ、私はナイトメアー…………だ」

そう彼女が言うと、バルデトが吠える。

『ケツ！偽名じやねえーか！！ やつぱり信用出来ねえーッ！！』

『別に本名だらうが偽名だらうが良いだらうせ…… 問題は名前が

在るかどうかなんだからね』

クイスがバルデトを見て、ナイトメアーを見ながら言いつ。

『悪夢か。随分大層な名だな』
ナイトメアー

ディガーは鼻で笑いながら茶化す。

「良い名前じやん！ んじやあ～…………メアつて呼ぶわ」
少年は微笑みながら言いつ。

「メア…………？」

彼女は突然のフレンドリーさに困惑した。

「ん？ 気に入らなかつた？ ん～でもナイトメアーつて長いじや

「ん

彼女の困惑をあだ名が氣に入らないのだと勘違いするヤン。

「いや、別に…………何とでも呼んでもうつても…………」
頭を搔きながら彼女は苦笑した。

「んじやま、自己紹介も終わりましたし
ヤンの雰囲氣が変わる。」

その雰囲氣に慣れないナイトメアーは体を硬直させた。

「…………愚者共へ死と誓つ制裁と」

狼達の雰囲氣も一瞬で変わった。

センは空を見上げる。
「…………絶望への導きを」

【森】の本氣が始まる…………。

Meaning of life and death (後書き)

生死についてのアレは結構滅茶苦茶ですよね。
書いていて意味が良く解りませんでした。

次は前回の戦闘シーンの続きです。

それではでは・・・

Knight who burns with king of the f

お久しぶりです！！

そして、申し訳ありませんでした！！

他の小説ばかりを書いてまして…………ですが、再開ですーー！

この小説は毎週月曜日に更新しようかと思つています。

そうやつて期限を決めれば大丈夫だと思いまして…………。

本当に済みませんでした…………。

それと、投稿していた話を編集しました。

少し設定を追加した感じですかね。

Knight who burns with king of the f—

知つてゐるか？

狼はこんなにも速く走れるのだと。

知つてゐるか？

狼の牙はどんな物でも貫けるのだと。

知つてゐるか？

この【森】の狼は 黒い靄に包まれてゐるのだと。

黒い毛は暗闇に溶け込み、赤い眼はその暗闇でまるで火の玉の様に浮いてゐる。

歩く姿は、どんな生き物よりもおぞましい。

眼が合えば死を連想させ、自身の無力さと自身の命のあつけを実感する。

【森】を駆ける、言つなれば暗殺者。

蹂躪し、無音で駆け、そして標的の喉元に喰い付く。

恐ろしい。

あの牙が自身の喉元に突き刺さるのを想像する。

恐ろしい。

恐怖しか湧かない。

だが、かの狼達は言った。

『怖い？ それは誰しも抱く物だ。お前に限った事ではない』

その言葉は、人間が言えば何も感じないであろう。

だが、その言葉が獣の口から発せられた時、自身は思った。いや、

感じた。

これが、この【森】の狼達なのか、と。

著者 アルドール＝リーディ

『幻想種物語』第?章・『気高き狼達』一部抜粋。

戦場。それは間違いではない。

血飛沫が舞い、死体が転がつていればそこは戦場だ。

方や殺す側。方や殺される側。
それが揃えば血が舞う。

だが、今回の殺す側は少し違つ。
人間が一人しかいない。

方や謎の少年。方や賞金稼ぎの女。

そして大量の狼達。

その内の二頭。

黒い毛に赤い眼。

方や右側の牙が欠け。方や尻尾に鎖を巻き付けている。

この二頭が戦場と化したこの場を蹂躪していた。
黒い靄が体を包み、銃弾や刃がすり抜ける。

それはまるで幽霊の様に。水を切るかの如く。

そして、その黒い靄は物凄いスピードで兵士達の喉元に現れる。

一
ぐがああああああああああ

黒い靄が喉元から消えた瞬間、兵士が力無く崩れる。首もとは血で塗れている。

兵士達は戦慄した。

我々は
何と戦っている?

『クハツハツハツ！！ 所詮は屑共だ！！』

戸尾に鎌を巻いた
ハ川元トか高山かに笑しなかひ姿を見せる

黒い靄の中から頭部が現れ、徐々に頭部から腹部、前足、後ろ足、そして鎖を巻いた尻尾が現れる。

これが『不確かな狼』
ゴーストウルフ

そしてこの黒い靄こそが、『ゴースト』と名付けられた所以だ。

まるで、『幽霊』の様に実体が無い。

突然現れ、突然消え、そして気付いた時には終わっている。

だが、兵士達はその姿を見て、『幽靈』ではないモノを連想して

いた。

『死神』

『所詮は糞共だ……ん？ 数名消えているな……逃げたか？』
右側の牙だけ欠けた、ディガードが辺りを見渡す。

『んああ？ 大丈夫だろう。クイスが待機しているからな。逃げら
れはしねえよ』

バルデトは心底嬉しそうにまた一人兵士を噛み殺す。

余裕。それは会話を少しでも聞いただけで解る。
その反面、兵士達は既に満身創痍だった。

横で倒れる血塗れの兵士の死体を見る。
恐怖が煽られる。

自分も、こうなるのか？

この死体の様に、無残に殺されるのか？

その恐怖は既に足を地面に縫い合わせた。
ガタガタと震える両脚は行動を拒否する。

絶対的。絶望的。

『それもそうだな……では、我等はこの場に居る糞共を排除する
としよう』
ディガードの体を黒い靄が完全に包む。

『その意見には同意だ……大変な仕事になりそうだぜえ』
バルデトは言葉に反し、まるで笑みを浮かべるかの様に頬を吊り
上げ、黒い靄に完全に包まれる。

兵士達の命は終わりを告げようとしていた。

対峙。

紅蓮の鎧を纏い、緑と黒色の短剣を構え見据える騎士。

此方は何の変哲も無い短剣を構え、姿勢を低く構える少年。

異様。

それは騎士ではない。騎士が対峙する者がこの場では不釣り合いなのだ。

少年。

見た感じでも十代半ば。そんな少年が短剣を構え、あの『紅蓮騎士団』の一人を見据えている。

だが、『紅蓮騎士団』の騎士は油断していなかつた。

少年の動き。それを見て尚も余裕で居られる者は、それを上回る何かを持つた者か、唯の馬鹿か。

後者では無いにしろ、騎士に切り札とも言える物は既に切つていた。

構える短剣。

これこそがこの場での切り札。

『リミテッド・マジック
『有限魔法』

200年前、この『偉大なる大地』^{グランド・アース}に墮ちた隕石、『永久凍結』^{フリーズ}。
その隕石の欠片、『力の欠片』^{アトウレンクス・スポール}。

この『力の欠片』を物に埋め込むか、溶け込ませるかにより『未知魔法』^{ノウ・マジック} 同様の力を得る事が出来る。

騎士が構える短剣はそれだ。

『有限魔法』は騎士ならば誰でも持つてはいるが、それでもレアなのに変わりはない。

大抵の者は、相手が『有限魔法師』だと知ると逃げていくか奪いに来るかのどちらかだ。

だが、目の前の少年はその前者でも後者でもない。

構える姿、隙が無く圧倒的な威圧感を醸し出す。

騎士、レイナードはゆっくりと、短剣の刃先を少年に向かたまま横へ動く。

少年は動かず、目だけでその動きを追う。

「ここが戦場と言つのも感じさせない。

まるで周りの兵士や狼が一人の存在に気付いていないかの如く。

無音。

その無音を最初に打ち消したのは騎士、レイナードだった。

「フツツッ！！！」

短剣を上に掲げ、そして振り下ろす。

「斬れエエエエッッ！！！！！」

その叫びと共に、

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンツツツツ
ツ！！！！

短剣から風が発せられ、それがまるで斬撃の様に少年に向かって飛ぶ。

風の斬撃。

だが、少年は驚きもせずに自身の持つ短剣を突き出す。

何かが来る。

そうレイナードは思い、身を構える。が、

「团长ツツ！！！」

もう一人の騎士、フロアが叫ぶ。

レイナードはその言葉で気付く。

! ?

田の前に立っていた筈の少年が居ない事に。
飛ばした風の斬撃は少年が立つて居た筈の所を既に通過し、霧散
していた。

「遅い！」
「？」

心臓を掴まる。

汗が一瞬にして引くのが解る。

声が聞こえたのは真後ろ。

死
死
死

頭に浮かぶビジョン。レイナードは歯を噛んだ。

キンシッヂー！ー！ー！ー！

金属音。

短剣が宙を舞う。

「フッ！！」

舞う短剣は少年の短剣。

レイナードは少年の短剣を弾く事に成功した。その成功で、一気に気が緩んだ。

いや、その気の緩みは見ただけでは解らない。本人以外には解らない事だろう。

けれども、少年は兜の隙間から覗くレイナードの眼を見据えていた。

その落ち着き、冷静さは異常。

今までに、レイナードは短剣を少年の胸へ突き刺そうとしている。それなのに、その短剣を見ずに少年はレイナードを観察するかの如く見据える。

レイナードが雄叫びに似た声を出し、短剣を少年に突き刺そうと、いや、このまま行けば確実に突き刺さる。

そう、一歩も行けば。

「キング・デフィニション」 『王の定義』

静
物
Nº

いや、レイナードがそう感じているだけだ。

聞こえるのは、少年の言葉だけ。
まるでスローモーションの様に。

だが、少年の頃は鮮明に耳に残る。

「アルカナ・フォレスト」
神秘なる森

その言葉が、レイナードには不吉にしか聞こえなかつた。

まるで、今から自分が想定していない事が起こる様な。

まるで、今からこの少年に負ける様な。

短剣が少年の胸に突き刺され、とした瞬間、黒い靄が少年から発せられる。

「！？ なッ！？」

レイナードは眼を丸くした。

刺さる筈だつた短剣は、黒い靄が発生した事により少年の体を通り抜ける。

短剣の刃だけではなく、短剣を握る右手までもが少年の体を通り抜ける。

「此所で使うつもりは無かつたのだが、な」

少年は見た目に似合わない口調で軽く頬を吊り上げた。

レイナードはその挑発にも似た口調、そして言葉に叫んだ。

「舐めるなああああああああああああああああああああああツツツ！」

「！…！」

短剣を引き抜き、振り上げ、振り下ろそうとするがそれよりも速く少年の掌がレイナードの兜に当たる。

ドンッ！…！

「グツツツツ…！？」

振り上げた短剣はそのまま、レイナードはそのまま後ろへ飛ばされる。

飛ばされた勢いで地面に叩き付けられ、体を跳ね、地面を転がる。

「団長！？ も、貴様ああああああああああああああああああああああああああ
ツツツ！！！」

フロアが叫び、地面に突き刺さっていた片手剣を引き抜き、そのまま少年に向かつて駆けた。

走りながら片手剣を振り上げ、少年の頭上へ振り下ろす。
が、

「フツ！」

少年は振り下ろされた片手剣の刃の側面に掌を当て、へし折る。

「なつ！？」

フロアは碎け散る刃の破片を見ながら驚愕した。

そして、その僅かな時間がミスに繋がる。

「ハツ！」

少年の掌がフロアの胸に当たる。

鎧を着ているのだから、肉弾戦に描いて差ほどダメージは無い。そう高を括っていた。それが裏目に出了。

「がはツツツ！！！」

空気が口から漏れ出す。

少年の攻撃は鎧を物ともせず、フロアの体にダメージを与えた。

「ぐあああああああああああああああああああああツツツ！！！」

！」

叫び、後ろに吹き飛ばされ地面を転がる。

ガシャンッ！！！

地面に叩き付けられた衝撃で兜が吹き飛び、短い金色の髪が現れる。

「うひ……うひ……」

呻き、立ち上がりうとするが、体へダメージが思った以上に重く、脚に力が入らない。

少年はその姿を見ながら、ゆっくりとフロアへ向かって歩き出す。トドメを刺そうとしているのか。フロアは唇を噛み、必死に立ち上がるうとする。

が、動かない。

「くそ……が……」

喋る事も辛い。呼吸が困難の中、姿勢だけは強く、少年を睨み付ける。

だが、少年は動じずにフロアへ近づく。

終わった。

フロアはそう感じた。

が、

「近づくなあああああああああああああああああああああああああ
ツツツ！……！」

叫び声。

「…？」

少年は咄嗟に後ろへ飛ぶ。

その瞬間、少年が立つて居た場所に突風とも言える風が通り抜け
る。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツツツツ！――――――！

地面を抉り、木々を薙ぎ倒すその風。

フロアは笑みを浮かべた。

「団長！――！」

フロアの視線の先には、短剣の刃先を向け、肩で息をしながら凄
まじい形相で少年を睨むレイナード。

脱げた兜により、碧と蒼のオッドアイにウェーブのかかった金髪
が露わとなっている。

「……まだ、终わりじゃない、ぞ？」

久しぶりだったので、色々と掘み掘みです。

目指せ100話！

書く前に色々と計算と書いていますか、「何話程度まで行くかな?」と思つて計算したら、どう頑張つても100は超えてしまつ。

あれ?って思いました。

よくよく考えたらこの話も結構詰め込んだ話だつたなあ」と改めて思い出す。

因みに、この物語の主人公君にはハーレムを作つてもひつもりです!!

夢にまで見たハーレムです!!

ギャグをね、シリアルに変えない様に頑張らないと……。

それでは、この物語が終わるまでお付き合いで下されば幸いです。

短いです。

それと、グロイです。

まあ、文才が無いのでそのグロさが伝わっているかは解りませんが
.....。

.....あれ？ 何故目から液体が.....。

「ハア、ハア、ハア……」

「糞が……ま、まさか……本当に幻想種が存在……するなん

て」

「やつてられるか……あんな化け物と戦つたら……即……殺されちまつ……」

くすんだ鉄の鎧を身に纏う兵士。

この兵士達は逃げて来たのだ。

どんな戦場よりも血生臭く、圧倒的な力を有した敵から。

『スト・ウルフ』
『不確かな狼』が蹂躪するあの場から。

手に握る剣が唯の棒にしか見えなくなり、身に纏う鎧は唯の紙にしか思えなくなる。

『不確かな狼』達が振りまいた恐怖は、凄まじく強力で何を考えても死を連想させる。

その中で、逃げるにまで思考が至つたこの兵士達は中々の手練れなのだろう。

一般市民ならば、逃げるなんて思考にすら辿り着けない。

それ程の相手。

だが、それ程の相手、『不確かなる狼』だからこそ運が無かつたとしか言えない。

逃げる者を見す見す観逃す筈が無い。

『あら？ 何処にお出かけかしら？』

女性の声が響き渡る。

その声を聞き、必死に走っていた兵士達は足を止めた。いや、止めてしまった。

体が硬直する。聞こえた声。それは明らかに人の声ではなかつた。そう、まるで先程まで聞いていた声。

「！？ だ、誰だ！？」

一人の兵士が辺りを見渡しながら叫ぶ。

剣など先程の惨状に捨ててきた。

逃げる途中で襲われる。そんな事は思考の隅にすら無かつた。

兎に角あの惨状から逃げ出したい。死にたくない。
それだけしか考えられなかつた。

恐怖は人の思考を鈍くさせる。

唯、この兵士達は鈍くなる程度で済まなかつた。

絶望的な状況。

逃げる最中、一番に感じていけないのは恐怖だろう。

恐怖は人の思考だけではなく、体すらも呑み込む。そうなつてしまえば、内部分裂が始まる。

身内同士の殺し合い程、醜い物は無い。

恐怖は混乱を誘い、破滅を導く。

必要な者はそんな者を統率出来るリーダー的存在。

そんな存在も居ない。恐怖は既に全てを蝕む。

この逃げる兵士達に、この場から助かる策など在る訳がない。

「ど、何処だ！？　何処に居やがる！？」

叫ぶ。

叫ばなければ保てないからだ。

額から流れる汗。方や涙を流す者までも居る。

『何処？　さあ、何処に居るのかしらね。見つけられたら、こ褒美
でもあげようかしら？』

響く声は、兵士達を馬鹿にした様に楽しむかの様に、じわじわと
恐怖を煽る。

敵に姿を見せない事は心理戦に描いては有効だ。

その場合、自分は相手が見えていないといけない。
それに相手に切り札が無い場合が好ましい。

第一に、会話の所々で相手の行動を態々口にする。

『フフ、そっちに私は居ないわよ？』

それにより相手は焦り、易い挑発を始める。

第一に、そこで見せしめに一人仕留める。

アラタ

「…………？」

どうやつて殺したか悟られない様に。

一
う
か
「

サード

一人の兵士が首筋から血を噴き出し地面に倒れる

「ヒツ！・！・！」

兵士の一人芝

限界に達した者は直ぐさま逃げ出す。

脇目も振らず、背中をガチ空きに逃げ出す。

そして、逃げる者は即座に仕留める。

! ! ! ! !

逃げられない。そつ思わせる為だ。

この場は、既に声の主の独壇場だつた。

手中。掌で跳るだけ跳らざれる衰れな道化共。

兵士達は恐怖と言うマイクを施した道化なのだ。
生死の綱渡り。飛んだ先に誰も居ない空中ブランコ。死が待つ火
の輪潜り。

演目は声の主の匙加減一つだ。

『残りは三人。言い残す事は？　しておきたい事は？　たいのであれば、私が聞いてあげるわよ?』

心底楽しそうに尋ねる。

既に、兵士達に叫ぶ力など残っていない。

「いつそ……人思いに殺せ」

兵士が虚ろな笑みを浮かべる。

その言葉を聞き、声の主は一気にテンションを上げる。

嫌いなのよ』

殺せと言つた兵士の左腕が、肩から綺麗に吹き飛ぶ。

噛み切られたかの様に。

『何様なの？ 今のアンタ達には死ぬ権利すらないのよ？』

声は響き続ける。

『痛みを伴わず、恐怖から逃げるなど愚行。味わえ。それが、アンタ達が味わえる最後の痛み』

「うが…………ああ…………」
左肩を押さえ、呻く。

『人間と言つのは、勝手に自分達に何かを「殺す権利」があると思い込む。そして当たり前の様に「死ぬ権利」があると思い込む。……図に乗るなよ』

声の主は徐々に声に殺意を込める。

『アンタ達愚かな人間には『殺される現実』しか無いのよ。等価交換。散々無駄に殺して来たアンタ達人間が払い忘れた対価…………払いなさい』

「うう…………あが…………」

兵士は動かなくなり、呻き声だけ聞こえる。

まだ五体満足の一一人の兵士も逃げる事を忘れ呆然と立ちつくす。

『…………それに、私は生理的に人間が嫌いなのよ…………まあ、王は特別だけど』

一瞬和らいだ殺氣。
だが、

ブシユウウカウカウカウカウカウカウカウカウツツツ ! ! ! !

五体満足であつた一人の兵士の首筋からいきなり血が噴き出し、倒れる。

『……殺すのであれば殺される覚悟を持って。死を願うならば痛みを伴い死ね。死を恐れるならばその恐怖を抱いて死ね……』

卷之十一

遂には呻き声すら途絶えた。気絶しただけなのだが、放つて置いた時期に死ぬ。

『…………はあ。疲れるわね、本当に…………』

森の中から、白い狼が姿を現す。

『人間には転生と言う概念があると聞くわ。次にアンタ達が生を受ける時は、まともな人間になる事を切に願うわ。…………そうすれば、もしかしたら私達がアンタ達の隣に立てる日が来るかもしね』

白い狼、クイスは倒れ死ぬ兵士達見ながら言葉を発する。実に饒舌。聞き手が居ない会話は、響かず霧散し消える。

『…………まあ、生理的に人間は無理だけどね。王は特別だけど』
ゆっくりと、再度【森】の中へ姿を消す。

無残な死体を残し。

本当はもう少し長い筈だったのですが、それだと長くなるし、終わりが中途半端になる為、切りました。

まあ、これも十分中途半端ですけどね。

『不確かな狼』達は良い奴ではないですよ。

まあ、何故そこまで人間を毛嫌いするかは後々ですかね。

次回はメアです。

強気な女性をイメージしています。

では、では。

Concealed ability and insinuit(前書き)

今日は2話連投

狼達が蹂躪する中、兵士以外の人間、ナイトメアーは黒い鎌を振るつていた。

「『悪靈の惡夢』
ナイトメアー・オブ・ナイトメアー

手に持つ鎌は不規則に揺れ、その大きさを変えて兵士達を切り刻む。

「ぎゃあああああああああああああああ

」

一人、また一人。
素早く、力強く、恐ろしく。

鎌を振っている間、ナイトメアーは見ていた。

視線の先に居るのは真っ赤な鎧とこの場に不相応な少年。

……あの力は何だ?
見ていた。戦いながら見ていた。

瞬時に騎士の後ろに回り込み、少年の短剣が宙を舞う。胸を貫こうとする騎士の短剣。

そして、まるで『不確かな狼』の様に黒い靄に包まれる少年。

何故、人間の彼が『不確かな狼』の力を扱える？
それ以前にも、彼の身体能力は常軌逸していた。

センと、名乗っていたな……。
珍しい名前。

殺氣は一流のモノだった。
風格はまさしく……、

「王」

白い『不確かな狼』は彼の事を『王』と呼んでいた。
幻想種である彼等が、何故人間の彼を『王』と呼ぶのか。
頭に浮かぶ疑問は考えただけで解決する代物ではない。
だが、考えずにはいられない。

可笑し過ぎる。

あの力は『未知魔法』アンノウ・マジックか？

解らない事が多過ぎる。

私は、とんでもない者と出会ったのではないか？

厄災を呼ぶのか。

もしくは運命と言つ安易な言葉で片付けるか。

唯、ナイトメアーは少年、センの姿に見とれていた。
戦う姿は、優雅。

その細身からは想像出来ない程の力強さ。
鼓動が早まる。

戦いたい。だが、それ以上に何故か見てみたいと思つてしまふ。
もつと近くで。もつと長く。彼の強さに触れたい。

今まで、散々強い者には出会つてきた。
だが、心を震わせる者には出会つた事がなかつた。

「……矢張り、森には魔が住むのだろうな」
心底嬉しそうに、呟く。

心を惑わせる【森】に住まう魔。

まさか、彼女本人も人に心を掴まれるとは思つてもみなかつた。

そして、同じ瞳の色。髪の色。

この世界では、瞳も髪も真っ黒と言つのは珍しい。
ナイトメアー本人も、この瞳と髪で迫害された過去がある。

そんな、そんな自分と同じ瞳と髪をした色。
同じ。

それだけで、彼女は十分にセンに魅了されていた。

「余所見か？ 戰闘狂！」
不意に、聞き覚えのある叫び声が響く。

センから視線を外し、その声の主を見る。

「何だ、生きていたのか？」

馬鹿にした様な目。

声の主はこの部隊の部隊長。

「お前を鬻るまで死ねないからな」

笑みも浮かべず、剣を肩で背負つ。

「残念な事に、私は私以外の誰かが私の体に触れるのが嫌なんだ。それに、私はお前が凄まじく嫌いだ。速いところ命を散らして欲しいな」

鎌を向ける。

「んああ？ 何だ、もしかしてお前まだ処女か？ お前みたいな奴は既に体で金を取っているかと思ったが…… それじゃあ、その大層な物も宝の持ち腐れだろ？」

隊長は頬を吊り上げ、ナイトメアーの胸を指す。

真っ黒な服とは対照的に、白い肌。露出する胸元。男なら目が行ってしまう程の豊満な胸。

「私の体に誰かの手や舌が這うのを想像しただけで、悪寒が走る。そんな事をしてまで金を欲してないからな」

「ありや、そうかい。俺ので穴と言つ穴を慰め様の玩具としてやうと思つたんだがな……まあ、無理矢理つて言つのもそそられる、か」

隊長は生やした顎の無精髭を擦りながら下種な笑みを浮かべる。

侮辱。完全に女を性処理機としか見ていない様な目。

自身に誇りのある女性ならば、憤怒するだろう。

だが、ナイトメアーは涼しい顔で笑みを浮かべる。

「フツ、挑発して突進してくるのを待っているのか？　それは残念な事に無駄だ」

「んああ？」

隊長は詰まらなそうに肩に背負っていた剣を構える。

「残念だ。お前の力は不規則な動きだから、怒らせても単調にじゅうり思つていたんだがな」

「お前の旦、不自然なんだよ……演技だつて丸わかりだ」

「…………これでも演技には自信があつたんだが…………まあ、良いか」
男の雰囲気が変わる。

その雰囲気を感じ、ナイトメアーは鎌を構える。

「伊達に…………隊長ではないらしいな」「笑みを浮かべる。

目の前に立つ男は、確実に強い者に分類されるだろう。
血が付いた剣。と、言つ事はこの場を蹂躪する狼を切り倒したと言つ事だ。

最初は短気な阿呆かと思ったが、どうやら人を騙すのが好きらしい。

「ああ、それとだ。これは俺のプライドの為に言わせてもらひ

男が片目を瞑り、笑みを浮かべる。

「……俺は従順な子が好きなんだよ」

「一生私はお前に尻尾は振らないぞ」

「ハハツ！ 俺もお前を乗りこなせると思つてねえ、よツツ！ ……一気に詰め寄る。

刃先がギリギリ地面に付かない程度に下げ、そして走る動きに合わせて剣を振り上げる。

「お前が私に乗る姿を想像しただけで、吐き気がするな振り上げられた剣を、バックステップで躱す。

「それに俺はスレンダーな女が好みなんだよツツ！ ……ナイトメアーの眼球を狙い、剣を突き出す。

「人の胸をガン見していたのは誰だ？」
首だけを動かし、躱す。

「ハハツ！ 演技だよ演技！！ 今回はエロい馬鹿な男を演じたんだよ！」

距離を取ろうとするナイトメアーに、直ぐさま近づき剣を振る。

「後からだつたら、幾らでも言えるだろ？」
剣を躱しながら、ナイトメアーは内心舌打ちをしていた。

距離が取れない。

鎌と言う武器はこう近づかれてはその威力を發揮出来ない。

間合い。それは小回りの利かない武器に取つて重要な事。

この男は解つてゐる。

その為、距離を開けずに攻撃を仕掛けて来る。

随分と、最初の印象からかけ離れて行く男だ。

「それもそつだな！！ んじゃあ、信じなくとも良いやせーーー。」
叫びながら、避けづらい箇所を狙い剣を振るひ。

戦い慣れしている。

「お前…………その部隊長と云ひつのも偽りだな」「田を細める。

男の動きは、部隊長と言つても一端の兵士が成せる動きではない。
正確であり、攻撃の中に含まれるフュイクは兵士のそれを凌駕して
いる。

「んああ？…………わあ、びつだらり、なツツ………」
突く。振るう。

その攻撃はナイトメアーを苛立たせた。

内心舐めていた。

最初の印象は阿呆。次に中々出来る男。
だが、それも改めないと駄目らしい。

「…………認めるべ。お前は、十分に強者だ」

「嬉しいねえ！…」

首を狙い凄まじい速さで剣を振るひ。

「だからこそ、本気を出す」

その言葉は、不吉そのものだった。

隊長は直感で感じた。

ヤバイ、と。

だが、振るつた剣を止める事など不可能。
止めれば、隙が生まれる。自分から殺してくれと言つているもの
だ。

けれども、離れ無いとヤバイ。

「…………『影踏』『シャドーステップ』」

隊長の感じた直感は、見事に的中する。

ナイトメアーがそう呟いた瞬間、剣が止まる。
いや、隊長の動きそのものが止まる。

「なつ！？」

予想外過ぎる。

何故、動けない！？

後数？。剣が首を刎ねるまで、たったそれだけの距離。
それが、何かの力により止められた。

隊長は顔を歪めた。

「貴様…………その鎌以外に『未知魔法』を！…？」

自分の動きを止めた方法など、考えなくとも解る。

十分過ぎる隠し玉。

動きを止めるだと? 反則過ぎるだろ! - !

ナイトメアーは隊長の問いに答えず、鎌を宙に放つた。

「なつ! ?」

いきなりの行動に驚いたが彼女が発した言葉が耳に届く。

「『サウザンド・オブ・ナイトメアー』
『幾千もの悪夢』」

直ぐさま後ろに跳んだ。

ナイトメアーが後ろに跳んだ瞬間に、隊長の剣は空気を斬った。

「! ? 動け……! ! !」

動けた事に驚いたが、それ所ではないのを思い出す。

瞬時に、その場から離れようとするが、遅過ぎる。

宙に放られた黒い鎌は、破裂しその破片は黒い刃と化して飛び散る。

「畜生がツツ! ! ! !」

逃げられないのならば、隊長は頭部を腕で隠した。

ブシュウ! ブシュウ! ブシュウウウウウウウウウツ
ツツ! ! ! !

「ぐがあああああああああああああああああああああツツツ! ! !

! ! !

黒い刃は、隊長の腕、体に突き刺さる。
血が飛び、痛みが襲いつ。

幾つもの刃を体に受け、血を流しながらも隊長はその場に膝を突く事はしなかつた。

肩で息をし、頭部

「畜生が！」

何とか済いた
たが 猥か紹み過ぎた

「フツ！」

腕を下けた瞬間、目の前には黒い鎌が迫ってきていた。

何故、油断をした！！

黒い鎌は、隊長の左目を縦に斬りつけた。

! ! !

先程とはまったく比にならない痛み。

左目を押さえ、膝を突く。

「クソ……が……クソが……ドボドボと流れる血。」

「……凌いだのは流石。だが、その後が甘いぞ？」

隊長の田の前で、鎌を構える。

「クソ女が……」

見える右目で彼女を睨み付ける。

油断した自分への苛立ち、そして田の前に立つ女への苛立ち。

悠然と立つ姿は、何よりも腹立たしい。

何故お前は無傷なのだ、と。

「巫山戯やがつて……殺ス……テメエは……殺ス」

憤怒。田に浮かぶは殺意。

ナイトメアーは鎌を振り上げた。
何かする前に殺す。

相手の出方を見る場面でもない。
確実に、仕留める。

だが、次に隊長が言った言葉は耳を疑つた。

「……ハツ！ 今回は割に合わない仕事だつたぜ……
いきなり殺意が消え去る。

「何？」

眉を細めた。

仕事？ 何を言つて 、

「左目の代償は……いざれだ」

ボトツ 。

何かが男の目の中に落ちる。

「！？ 閃光だ 」

ナイトメアは鎌を振り下ろす速度を速めよつとしながら、それより先に眩い光が破裂した。

「クツー！」

この場が、昼以上の明るさに包まれる。

田を開けていられず、腕で田を覆う。周りからも驚く声が上がる。

ナイトメアは慌てた。

この隙は、仕留めるのに格好過ぎる。

「ハハツ！ 仕留めはしねえよ。それは俺の流儀に反する…………だから、持ち越しだ」

不意に聞こえた隊長の声。

その言葉は、余りにもナイトメアを馬鹿にしていた。
流儀に、反するだと？

「…………クソ野郎がツツー！」

持ち越しだと？ 確実に、私を殺す事が出来るのに……流儀に反するだと？

優勢だった。だが、だつただけだ。

完全に、生かされた。

見えない目。だが、確実に怒りが宿っているだろう。

「クソがツツ……！」

最大の侮辱。

生きる事に執着する彼女でも、これは余りにも腹立たしい。

生きている事に喜びを感じるよりも、あの男への怒りが勝る。

「クソが……………次は……………殺す！！」

行き場の無い怒りを、そのまま吐き捨てた。

この時、この場で彼女の標的が決まった。

まさか、あの隊長さんが！？

なんて言つ感じの回ですが、ハッキリ言います。

私も予想外でした！！

まさか、隊長さんがメアと互角に戦える程の実力者だとは……。

今日は2話連投。

「はああああああああああああああああああああああああああああツツツ
！――！」

『紅蓮騎士団』レイナードは叫び、短剣を振り下ろした。

黒と緑のツートンカラーの短剣。
『リミテッド・マジック
有限魔法』と呼ばれる消耗品。

その名の通り、『有限魔法』は持つて一年程度しか使えない。

『アトワレンクス・スポール
力の欠片』は力を有してはいるが、それは力を宿しているだけで、力を蓄える能力は無い。

その為、使えば使う程宿っている力は消耗し、全てを使い切れば唯一の物と化す。

だが、レイナードは配分などそんな事は全く気にせずに短剣を振るい、風を起こす。

少し語弊があつた。

気にしないのではない。気にする余裕がないのだ。

力を抜けば死ぬ。

それは既に刻み込まれた。

配分を考え戦うなど、この状況でそんな器用な事は到底不可能。自身の力不足と、相手との力量差。

短剣を振るいながらレイナードは唇を噛んだ。

苛立。恐怖。憤慨。嫉妒。悲哀。

河文

「何故当たらないツツツ――・・・・・」

思わず叫ぶ。

振るう短剣。発せられる不可視の刃すら、目の前の敵、少年に掠りもしない。

振り上げ、振り下ろし、突き、突き、突き、突く。

だが、全ての攻撃は躊躇する。『不確定狼』^{ゴースト・ウルフ}同様に黒い靄を纏消す。

レイナードは確実に消耗していた。

心身共に、そして手に握る『有限魔法』と共に。

削られていく誇り。
プライド

私は今、誰と戦っているのだ？

貴様は…………何者だあああああああああああああああああああああツツ！

名も知らない相手に圧倒され、剩え、手加減されている。

「私を……舐めるなッッ…………」

「振るう速度が速まる。早く鋭さが増す。

だが、

「……無意味」

唯その一言。その一言で全てが霧散する。

余りの力量差。

一瞬。いや、確実にレイナードの脳裏に自身の死体が浮かぶ。

勝つてしまつ。怒りよりも、恐怖が勝つてしまつ。

「……これで終わりか？」

「……なんだ……その言い方は……私は……お前を愉しませる……玩具では……ないッッッ！……！」

叫ぶ。だが、疲れ果てた心身にはそれが精一杯だった。

命乞い？

まだ、私は死んでいない。

「……お前などに……私の終わりを決めさせてなるものかッッ！」

その姿を見ながら、少年・センは目を少し見開いた。
まだ途絶えないか、と。

戦わずに制するには、圧倒的な戦力を見せるか相手の何かを奪う

事に限る。

センは切り札と言える物は既に切つていい。

その上で、態と攻撃をしないと言ひ相手の神経を逆撫でする様な行為に出た。

狙いは相手の消耗そして自滅。

だが、まだ途切れない。

目の前で、憤怒を宿す瞳は消えていない。

恐怖はまだ残っているだろ。う。
プライドはズタズタにしだらう。

それでも、まだ立つか。

「…………惜しいなあ」

思わず、口調を戻してしまう。

『王』ではなく、『少年』の口調。

「??」

この状況でも、レイナードにその違和感は伝わった。

いきなり和らいだ雰囲気。突き刺す様に痛々しかった眼は消え去つた。

益々解らなくなる。

私は、誰と戦っているのだ?

「少し、違うよなあ」

腕を組み、首を傾げながら考え込む。

「…………何なんだ」

思わずレイナードも口にしてしまつ。

拍子抜け、と訳ではないが。

明らかに何かが抜けた。

「…………よし、まずは血口紹介から始めようか。」

「…………は？」

「いや、血口紹介」

「な、何を言つて…………」

何なんだ？ 一体何が？
思わず自問自答を始める。

田の前に立つ少年は、先程まで私を殺そうとしていただろ？
私も少年を殺そうとしていた筈だが？

血口紹介？ 誰と誰が？

「此所は俺から名乗つた方が良いのか？」
センは首を傾げる。

「…………何なんだ」
思わずツッコんでしまつた。

「ん……そっちは名乗らないのに俺が名乗るのも不公平だよな。
だから、次回かな」

少年は笑みを浮かべた。

純粹無垢な笑み。

一瞬この場が戦場と言つの忘れ、少し見とれてしまった。

だが、直ぐにレイナードは少年の言葉の可笑しさに気がつく。

「…………次回だと？」

眉を細めた。

「そつ！ 次回」

センは腰に手を当てながら辺りを見渡す。

「うやつて話している最中でも、狼と兵士の命の奪い合いは行われている。

無防備のセンに向かって走って来る兵士も居るが、狼達に食い千切られ倒れ伏していく。

「後何分かすれば、此所に居る兵士は全滅する。これは絶対だ」
センは先程までの雰囲気ではなく、少年の雰囲気で話を進める。

レイナードはその事について何も言わず、セン同様に周りを見渡す。

「…………

そこで気付く。
やつと気付く。

狼達の殺氣。

牙は兵士達に？ いているが、殺氣だけはレイナードに向いている。

『下手な事をすれば殺す』

殺氣は語つてゐる。

レイナーデは自身の甘さに顔を歪めた。

自らの敵に気を取られていた事。
相手の力量を見抜けなかつた事。

そして、敵に恐怖してしまつてゐる事。

既に檻の中。

猶如在海外有國有林

「の、目の前に立つ少年が狼達に「殺せ」と、一言命令すれば私の命など簡単に終わりを迎えるだろう。

抜かつていた。

何故、一対一にしてしまったのだと。

全ては自身の「勝てる」「負けない」と言つ、傲り。

「……………」

兵士がまた一人首を食い千切られた。

奥歯を噛み締める。

ゆつくりと周りの惨劇から視線を外し、センを見据える。

田の前に立つセンは、真っ直ぐにレイナードを見つめている。

レイナードは直視出来ず、俯く。

「…………レイナード…………だ」

声を絞り出す。

「ん？」

「…………私の名前だ…………レイナード＝アヒラ…………お前の名は
？」

名乗る事は、場によつて神聖な儀式だ。

相手への礼儀。流儀。

だが、この場に措いて名乗ると云つ事は、センの云つ「次回」を
甘んじると云う事だ。

「俺の名前はセンだ」

余りにも悔しそぎる。
奪われるだけ奪われ、逃がされる?

無力を絶対的な力量差で見せつけられ、感じさせられた。
殺せる筈なのに、殺さずに……「次回」だと?

沸々と、既に沸ききつた筈の感情が湧き出る。
それを必死に抑える。

此所で、此所で晒してしまえば…………一瞬で終わってしまう。

それでもツ――！

レイナードの口から、赤い血が流れ出る。

「…………時として、その誇りは未来を占撫フライアしにするよ?」

レイナードの様子を見ながら、センはゆっくりと口を開いた。

「…………黙れ…………もう、私に話し掛けんなッ!…」

怒鳴る。

その瞬間、辺りが光に包まれた。

「!…?」

「なっ!…?」

センとレイナードは破裂したかの様な光に目を瞑る。

その光の中、左目だけ瞑り右目を開けた状態でレイナードは立っていた。

碧に光るその右目。

その右目だけが光の中の世界を覗いていた。

「……………」

だが、その様な状況でもレイナードは驚きもせず、目の前に立つ少年を睨む。

この状況、視界が潰れたこの状況。

今ならば……仕留められる。

何がどうなり、光に満たされたかは解らない。

けれども、そんな事はどうでも良い。

今なら。今なら、殺せる。

手に持つ短剣をセンに向ける。

「…………」

思わず、頬を吊り上げた。

所詮は……子供。

緊急事態に対応出来ない……子供。

「」の任務は……完遂だ。

レイナードが小さく口を開き、「貫け」と呟いた時、背筋に寒気が走る。

「……？」

唐突過ぎる、濃厚過ぎる 殺氣。

片目だけ、碧色の瞳だけがその姿を焼き付ける。

見えない筈だろ！？

それなのに、何故、何故、何故！？

「何故ツ…………貴様は私を覗いてるツ」

レイナードは忌々しそうに吐き捨てた。

田の前に立つ者、即ちセンは見えない筈の光に包まれた世界で、
田を閉じながらレイナードを覗いていた。

レイナードの居る方向を見ていただけなのか、確実に捕らえているのかは解らない。

だが、レイナードはその後者だと感じ取っていた。

「」の殺氣は……確実な物だと。

突き出していた短剣をゆっくりと下げる。

先程まで沸きかけていた感情は、余りにも唐突に熱が引く。

それと同時に、じわりじわりと背筋の汗が引いていく。

「……仕留める事は不可能、か」

甘過ぎた。

レイナードは直ぐさま思考を切り換えた。

「撤退ッッ！」

声を張り上げ、走り出す。

この声を聞き、何人逃げ延びる事が出来るか。
もしかしたら、全滅しているかも知れない。

「フロア！！」

蹲つっていた部下である『紅蓮騎士団』の少女に駆け寄り、腕を持ち立たせる。

「す、すいません……」

光で見えない為、目を閉じながら頭を下げる。

「謝るのは後だ。今は……」

言葉を詰まらせる。

「Jの後に血の言葉に躊躇しているのだ。
言葉が……「逃げる」と血の言葉が。

『…………時として、その誇りは未来を^{プライド}無にしてゐるよ。』

「つッ…………逃げるぞッ……」

「は、はーッ」

フロアの腕を自分の肩に回し、駆け出す。
逃げ延びる可能性は在るのか。

考えてもみるが、そんな事よりも思考を支配するのは怒りと少年
の対策だった。

Jの状況で考える事では無かつた。だが、考えずJにいられなかつ
た。

「Jの私に……「逃げ」を行わせたのだ……次は……抜から
ない」

今Jの時、名前を聞いて良かつたとレイナードは思つていた。

「…………私の誇りは…………安くはないぞ」

強敵が現れ、興奮するなどと言つて戦闘狂ではない。
負け、次に生かそつなど戦つ前に考える者など居ない。

「勝てる」そう胸に刻んでいるのだ。

だが実際は勝てず、任務も失敗。

城に帰り、どんな小言を言われるか。どんな罰が執行されるか。
頭に浮かぶその様な考えは、直ぐさま消え浮かぶのは矢張りセン
と名乗つたあの少年の事だけ。

どれ程感情に嘘を言おうと、矢張り 惨めだ。

レイナードの眼。

ハツキリ言います！予想外です！！

やつちまつた……。

この小説は視点が結構変わるって言つか、心理描[写]がいきなり変わるので結構読みづらい。

書いた本人がそう思う。

次回はまあ、説明的な回です。

The defeat is not an end etc (前書き)

凄く短いです。

ここ以外で切る所がなく。それでも中途半端ですかね。

『なんともまあ……数人逃がしちゃつたみたいだねえ』
白い『不確定狼』^{ゴースト・ウルフ}、クイスは呆れた様に言いながら惨状に現れ
た。

『ケツ！ あの人間がミスしたんだよッ！！』

尻尾に鎖を巻いた『不確定狼』、バルデトは未だに閃光弾による影響で目が見えないのか、目を瞑つたまんま叫ぶ。

『……どうやら、センもミスをした様だな……まあ、いつもの悪い癖だろう』

右側の牙が欠けた『不確定狼』、ディガーハビットやら田は見えているらしく、センを見つめている。

『んああ？ またかよッ！！ 森焼き払おうとしようとする奴等だぞ

！？ その中に氣に入る奴が居たつて言うのか！？
バルデトは苛つきを隠しもせず、兎に角叫んでいる。

『俺が知るか……まあ、何だ。何か見えるもんがあつたんだろうさ』

ディガーはバルデトを軽くあしらい、センの元へ向かつて歩き出す。

『ケツ！ 良く解らないねえ。人間はチキンだけで十分だつての！』

未だに目が開けないのか、目を瞑つたまんま歩き出す。

『はあ～…………アンタ、少し静かにしさないよ』

『なつ！？ クイス！ 前も俺が五月蠅いつて言つのかよ！？』

『ええ。私達の耳の良さを呪つてしまつ程に、ね』
軽く毒を吐きながらクイスはディガーを追つ様に歩き出す。

『嘘だろ！？ おいおい～～ 嘘を吐くのはあの糞猿だけで十分だぜ！～～』

『叫ぶの止めなさいよ』

毒まで吐いたのに叫び続けるバルデトに呆れる。

『あの馬鹿は目が見えなくとも馬鹿か』
小声で毒を吐きつつ、ディガーはセンの横で立ち止まる。

『…………あの赤い鎧、少しほ戦えた様だな』

「今日は俺の方が有利だったし、向こうが準備万端だったら、解らないだろつけど」

『それは本音か？ それとも謙遜か？』

「本音……でもまあ、どんな相手でも負ける気はしないけどね」
センは笑みを浮かべティガーを見下ろした。

『フンッ！ 易々と負けて貰つては困る。…………最低でも「最も強い者」を名乗れるまでは負けるなよ？』

『最強止まりで良いの？ てっきり、無敵になれぐらこいつと思つたけど？』

『舐めるなよ？ 基礎を教えたのは誰だ？』
口角を吊り上げる。

その表情を見て、センは小さく溜息を吐いた。

「はいはい。弟子は師匠には勝てませんよ」

『あら？ でも、弟子は師を超えるつて相場は決まっているわよ？』
話を聞いていたのか、クイスが笑みを浮かべながらセンとティガーに近づく。

『何を言つている？ 俺がセンに負ける訳がない』
断言。

『…………余りハツキリと言わないでよ。落ち込む』
再度溜息を吐きながら、センは視線をティガー達から変え、違う方向を見る。

そこには、両膝を付きながら悔しがる女性。

『あれは相手が悪かつたな』
センの視線で気付いたのか、ティガーがそう述べる。

「強い相手だつたの?」

『お前が戦つた赤い鎧以上…………そう言えば良いか?』

「…………そんなんに?」

『まあ、あの男が『有限魔法』^{リミテッド・マジック}を持つていなかつたし、魔力も感じなかつた…………だが、それでも此所から逃げる事が出来た』

ナイトメアーは『未知魔法』^{アンノウ・マジック}を駆使し戦つていた。
だが、あの兵士は自身の腕だけでこの場から逃げた。

それは圧倒的な差と言つても良い。

弱者と強者が戦い、強者が手を抜かないかアクシデントが無い限り、弱者が逃げる事など出来ない。

強者から連れられる者は、同じ強者かそれ以上の最強だろう。

ナイトメアーは手を抜いてはいなかつた。
つまりは、あの男は同等か、それ以上。

「…………大陸つてやつぱ広いよね
笑みを零す。

『…………まあ。俺等とも互角に戦う人間が存在しないなど決める事など出来はしない。それがこの世だ……あの女も自分の世界の狭さに気が付いただろ？』

「だから手助けしなかつたの？」

『一対一の戦いに割り込むのは、無粋だらう…………まあ、負けたら代わりに俺が食い千切らうと思つていたが、まさか閃光弾を使われるとは思わなくてな』

ある意味人間臭い考え方もある。

『逃がしたら元も子も無いけどね』

『だから言つただろ！ 逃がすつもりなど毛頭無かったと…』
クイクの言葉に怒鳴るティガーダグ、

『何の為の鼻だい？ 考え過ぎで獣の本能を忘れたのかしら？』

『ぐつ……』

反論出来ず。

一二頭がそんな会話をしている間に、センはゆっくりとナイトメアーに近づいていた。

近づきながら、センはひつひつ言葉を掛けようか考えていた。

ぶつちやけてしまつと、センに今のナイトメアーの様な経験が無い。

負けた事がない。戦いの後に後悔をした事がないのだ。

どんな相手でも、どんな状況でも、その時出来る事をやる。後々に、「ああすれば良かった」など考えた事がない。

その為、慰めなどと並んで言葉は浮かばない。

だが、慰めを並つもつはない。

自分が言われて嬉しくない言葉だからだ。

負けたけれども、生きていると言えば良いのか。

次は勝てる、確信も無い言葉を掛ければ良いのか。

追い打ちをかける様に罵倒すれば良いのか。

言葉は重い。

それを解っているからこそ、いつの場では選ばなくてはならない。

「……メア」

ナイトメアーの後ろに立ち、名を呼ぶ。

返事は返つてほかない。

「……相手は強かつた？」

「……ああ、強かつたな」

「……その強さが天辺かな？」

センはゆっくりと歩み、ナイトメアーの横に立つ。

「……出来たのは新たな標的……儲けだね。楽しみが増えた」

センの口からその言葉。

思わずナイトメアーはセンを見てしまった。

一瞬、滲み出たのは『王』でも『少年』でもない、異質さ。

それはまるで、

「…………ふふつ…………私みたいな事を言つんだな」

同じ。ナイトメアーと同じ。

『戦闘狂』の言葉。

「天辺を決める権利は己ではなく他にある。他がその者を無敵と呼ぶのならば、その者は無敵。他がその者を弱者と呼ぶならば、弱者。だが、それを覆せるのは他ではなく己のみ」

声質は、既に『王』のモノであった。

その変わりように、ナイトメアーは苦笑する。

「…………その通りだな…………標的が出来た。自分の甘さが解った。そして、挑戦者と言う立場になれた。今回は随分儲けが多い。こんなにも、殺したい奴が出来たのだから」
深い笑みを浮かべる。

勝つっていたなら勝つていた。それだけだ。
この世界に描いて、死なずの敗北は貴重。

刃を突き付けるチャンスを。罵声を浴びせるチャンスを。追い詰めるチャンスを。
殺すチャンスを。

まだ、終わりではない。

『戦闘狂』の辞書に、「負けて終わり」など無い。

生きていれば戦う。

死ねば終わる。

死ななければ、終わらない。

「んじゃ、もつと自分の位置を把握する?」

「ん?」
差し伸べられた手を握り立ち上がりながらナイトメアは首を傾げる。

センは満面の笑みを浮かべる。
だが、それは胸ときめく様なモノではない。

もつと、邪悪な感じのする笑み。

「招待するよ………【森】へ」

後にナイトメアは語る。

「あの時、頷かなければ良かつた」と。

どいつも。龍門です。

今回、短いです。

実は前話でこの話も含まれていたのですが、「話数稼ぎの為に次だな」とかセコイ事を考えてしまい。
結果蓋を開けてみればこれですよ。

本当はもっとメアは落ち込み、センが優しい言葉をかけていたのですが、
それは違うと思っていまして、結果呆気なく立ち直つたみたいな。

ぶつちやけメアは差ほど落ち込んでいません。

一回一回の戦闘に対して彼女自身それ程感情移入する暇も必要性も
感じないからです。

一応『賞金稼ぎ』なんで、戦う事が仕事ですので。
勝つても次!みたいな感じです。

ですが、今回は屈辱的な負け方をしたので少し落ち込んだみたいな
感じです。

センは戦闘狂です。

戦う事は本能だと思つてるので、抵抗がありません。

もっと掘り下げれ色々書けたのですが、書きすぎるといふ感じにな
ってしまうので。

「」めんない。

次回は長いです。
……かもです。

それでは
……。

スイマセンでした！

風邪です。

インフルエンザではなかったのですが、
高熱・頭痛・腹痛・気急さ・バイト・バイト・バイト・「えつ?
来てくれ? 僕今日休み……あつ、はい。大丈夫です」と、NO
と言えない日本人。
てか、私がチキンなだけですね。

スイマセンでした。

それと、今回そんな長くないです。

重ねてスイマセン。

兵士達の死体が転がる中、三頭の『不^{ゴースト・ウルフ}確かな狼』が佇んで居た。

右側の牙が欠けているディガー。

尻尾に鎖を巻き付けているバルデト。
そして白い『不確かな狼』、クイス。

三頭は遠目に少年、センと真っ黒に身を包んだ賞金稼ぎ、ナイト
メアーを見ていた。

『……ケツ！ 所詮あの女も能なしだろ？ やつして王はあんな女を？ しかも人間つて来たもんだ』
隠しもせずにバルデトが吐き捨てる。

言葉の節々から人間への嫌悪感を滲ませる。
昔何かあったのか。そう容易に想像出来る程に。

『『ロスト・マジック
失われた魔法』を扱える人間だ。稀少価値はあるだろ？』

『その通りね。あの出来事から200年。随分と『失われた魔法』を扱える者が減った。それはこの森も同じ』

ディガードの言葉にクイスが補足の様に付け足す。

希少価値。現段階ではナイトメアーにはそれしか価値が無い。

それが【森】の騎士『不確かな狼』の総意。
元々相容れない存在。

方や狩人。方や獲物だ。

食物連鎖を無視した人間の行動はそれ以外の種族に取つては耐え難い。

生きるか死ぬかを彷徨う獣達の住処を、人間は土足で入り込む。

所詮人間は人間。

それは今も昔も変わらない獣達の総意だ。

希少価値以外で人間の価値を見いだせない。

『そうだろうけどよ…………既に王を入れても森に三人も居るんだぞ？　これ以上増えたら人間臭くて堪らねえよ』

『その発言は王にも言つているのかしら？』
バルデトの発言にクイスがもの凄い黒い笑みを浮かべながら尋ねる。

『んな訳ねえだろ！？　王は特別だ。だけどよ、それでも少し多過ぎるだろ？』

クイスの問いには直ぐさま反論したものの、矢張り譲れないらし

い。

『そんなの私だって同じよ？　でも、王の王は確かよ。肩とそういうやないの位は見抜ける』

『…………まあ、その人間が使えるかどうかは兎も角、肩ではないなディガーラクイスの言葉を肯定する。

『使えない意味ねえだろ？』

『使える様に調教すれば良いじゃない』

『…………お前の発言は時々恐ろしいな』

三頭が話している最中、セントナイトメアーの話が終わつたのか、互いに笑つている。

その様子を見ながらバルデトが大きく溜息を吐いた。

『どうやら、あの女王に取つてはお気に入りらしいな』

『そうみたいね。でもまあ、まだ完璧に信用した訳ではないでしょうし、大丈夫よ』

『監視も兼ねて様子見た。下手な事をしようとするれば、直ぐさま食い千切る』

その言葉にクイスとバルデトが頷く。

『それじゃ、私は此所の死体を消す事にするわ。先に行つてて地面に転がる兵士の死体を眺め、顔を若干歪める。

『解つた』

『んじゃ、行いづか』

クイスの言葉にティガードバルデトが頷き、クイスを置いて二頭はセンへ歩いて行く。

『……事故に見せかけて殺るのは駄目か?』

小声でティガードに尋ねる。

『阿呆。下手に殺してみる。センはお前を殺しにかかるぞ? 殺るのならば、センが納得するシチュエーションにならなければならぬ』

い
鼻で笑う。

『そんな事は解つてんだよ! ? 唯聞いてみただけじゃねえかツツ
!!!』

『馬鹿にすんじゃねえよ蟻を! !』

『……その発言が阿呆なんだ』

バルデトに呆れながらティガードは大きく溜息を吐く。

「溜息? 幸せが逃げるぞ?」

センが腰に手を当てながら微笑む。

『コイツが消えない限り俺に幸せはない』

横目でバルデトを見ながら言つが、バルデトはナイトメアーを睨

んでいる為、ディガーノの視線に気付いていない。

その姿を見ながら、再度溜息を吐く。

「…………何よ？」

バルデトの睨みに対しナイトメアが眉を細めながら尋ねる。が、バルデトは何も答えずに睨み続ける。

その姿を見ながらセンが言つ。

「バルデトと目を合わせない方が良いよ？」

「それはどう言つ意味？」

バルデトから視線を外し、横のセンを見る。

「バルデトの目は生き物を壊すからね」
センはそう答えるが、ナイトメアには全く意味が解らない。

首を傾げもう一度バルデトを見る。

すると、バルデトはニヤリと口角を上げる。

『一瞬で貴様を肉塊か廃人に変えられるぞ？』

その言葉の意味は解る。が、方法は全然解らない。
だが、解り易く説明しないと言つ事は私に教える気が無いと言つ意味。

現段階では、まだ私は信じて貰つてはいないと言つ事。

……上等。

ナイトメアは心の中で笑みを浮かべた。

彼女自身もこの場に居る少年と黙、そして【森】に居るであれど

生き物と仲良じ「」をするつもりは無い。

「これぐらい警戒して貰わなければ、彼女自身のモチベーションが上がらない。」

取つて喰う。それぐらいの勢いを彼女は心に押し込んでいる。

「…………私を肉塊に変える事が出来るそれは、さつき君が使つてい力と関係しているのか？」

教えてはくれないだろ？ そう思いながらも情報を手に入れようと尋ねる。

「ん？ さつき？ ……ああ、どうだひつね。近いようで遠い」

首を傾げながら曖昧に答える。

矢張り、まだ味方未満、か。

改めて自身の立ち位置を確認。

『そんなに俺等の事が知りたいのか？』

ディガーハナイトメアーの考えを読む如く、笑みを浮かべながら尋ねる。

「そりや、ね。敵か味方が解らない以上、相手の情報は大いに越した事はない」

『それは俺等も同意見だ。…………貴様が一種類の『失われた魔法』を扱える事も。俺等に取つて重要な情報。現段階では一步俺等が飛び抜けているかな？』

「…………チツ」

ディガーの言葉に軽く舌打ちをする。

あの場、隊長と戦つたあの場。
ナイトメアーは戦いしか見えていなかつた。

その為能力を惜しみ無く使つた。

その結果、手札を見せてしまつた。

『まさか一つも使えるとは思わなかつたぞ？　まだ持つてゐるのか
？　それとも、アレがお前の切り札か？』

「どうだらうな。もしかしたら、お前を一瞬で死体に変える事の出
来る切り札が残つてゐるかも、な」
笑みを浮かべ、ディガーベを見る。

『ハハツ！　そつであつて欲しいな？　貴様を殺す時、手応えがな
ければ面白くない』
心底楽しそうにディガーベが笑う。

それを尻目に、センは驚いた顔でナイトメアーに尋ねる。
「一つも使えるのー？　凄いね。森の中でもそつは居ないよ

『ケツ！　俺等には『失われた魔法』を扱えなくともそれ以上の力
があるんだよ。一一つや三つある程度で、俺等がじぶる訳ねえ』

バルデトの発言で、ディガーベが顔を歪める。

その反面、ナイトメアー心底嬉しそうな顔を浮かべる。

「ほおう。お前等の力はどうやら私のとは違つみたいだな。てつ
りお前等のも『未知魔法』の一種だと考えていたのだが？」
一矢二矢しながらバルデトを見る。

ナイトメアーを見ながらバルテトは口角を上げる。

『クハハッ！！ 傑作だな！ お前如きの中途半端な力と俺等の力を同等に捉えているなんて…… 本当にけつ 痛ッ！ 何しやがる！？』

高らかに笑いながら自慢げに話すバルテトの額にティガーが蹴りを喰わした。

『阿呆め。お前は喋るな』

『なつ！？ 別にこれぐらいは良いだろうが！…』

『情報にこれぐらいもクソもあるか。出して良い情報と駄目な情報ぐらい考えて喋れ』

バルテトを横目にティガーは溜息を吐いた。

「お喋りな狼さんで助かったよ」
挑発しながらナイトメアーは笑みを浮かべる。

『テメエ！… マジで肉塊にしちまつた！…』
吠えるバルテト。

「ところで、さっきから『失われた魔法』って言っているけど、それは何？」

『テメエ！ 僕を無視すんじゃねえ！…』

バルテトの叫びを無視し、ナイトメアーはセントティガーに尋ねる。

『貴様の力の事だ』

「力つて、『未知魔法』の事?」

「俺等森に住まう者は『未知魔法』の事を『失われた魔法』って呼んでいるんだよ」

『俺等に取つては未知ではないからな。使える者が少なくなつたと言つ事で『失われた魔法』と呼んでいる』

センとディガーが説明する。

「成る程ね。私からしても未知つて言われるよりそっちの方が響きは良いな」

適応能力が高いのかどうなのか。ナイトメアーは腕を組みながら二、三度頷く。

「ハツキリ言って、森とその外では色々と違う所があるから。気を付けた方が良いよ」

ナイトメアーを横から見ながらセンは笑みを浮かべている。

「違う所?」

『油断したら喰われるんだよ』

「…………それは森で流行つてるギャグか何か?」

ディガーの満面の笑みを向けられ、引き攣りながら尋ねる。

「氣を付けてね。余所者つてだけで皆敵意剥き出しだから」
遠回しに「Yess!」と答える。

「私も油断したら殺される様な世界で生きてきたが……獣が言つたら洒落にならないな」

少し……いや、既にかなり後悔しながらナイトメアーは深い溜息を吐く。

そんなナイトメアーを尻目に、セントバルテトはさわと歩き出し森の中へ向かって居る。

その後をティガーが追う様に歩き出す。が、ナイトメアーは気が引けているのか、その後ろ姿を見ながら表情を引き攣らせていた。それに気付いたティガーが立ち止まり振り返る。

『…………怖じ氣付いたのか？ 女』

見え見えの挑発。そして未だに満面の笑みを浮かべている。「そんな訳ないだろ。獸の一匹や一匹。毛を剥ぎ取つてやる」直ぐさま表情を凜々しく変え、歩き出す。

『氣を付けるよ。俺等『不確かな狼』は不味くて人間の肉など食べないが、好物が人間の肉つて言つ奴も住んでるからな。隙を見せた瞬間に食道通つて胃液の風呂へダイブだ』

満面の笑みで脅し続ける。

「…………狼つて奴は…………醜悪な笑みをそんな露骨に出せるものなのか？」

ティガーの横を通り過ぎながら尋ねる。

『笑つてたか？ ビツヤウ貴様の朽ち果てた姿を想像して笑みが零れたらしい』

「『不確かな狼』は妄想癖が強いらしい。私は薬を持つていの

だが、……………獸にも人間の薬が効くのかな？」

『森での最良の薬は若い女の生き血だよ……貴様からどれ程取れるか』

「狼の肉は固いが保存が利いて旅人には必需品なんだ。お前を捌けば小遣い程度の金が私の懐に入るな」

一人と一頭は立ち止まり、互いに睨み合う。

「…………女、その短い愚かな時を此所で終わらせたいらしいな。もつと早く頼めば貴様の首筋に綺麗な赤い花を咲かしてやつたものを『

互いに青筋を浮かべ、笑みを浮かべ、挑発しあう。

「『殺るか？』」「

どうして此所まで馬が合わないのか。
レベルが低い。

「おおーい！ 何してるのー？ 置いて行くよー。」

叫んでいる。 気付けばかなり離れていた。 センが背伸びをしながら手を振つて

卷之三

ナイトメアーとティガーはセンを無言で見つめ、そして再度睨み合つ。

『……氣を付けるよ。此所は俺等のホームだ』

「自分のホームだからと云つて油断したり『悪魔』を見るだ？』

青筋を互いに浮かべながら歩き出す。

「『チシー』」

互いに舌打ちをする。

「『んああ？』」

互いに歩きながら睨み合ひ。

その姿を遠田から見ながらセンは咳く。

「仲良いね。あの二人」

『ケツ！ 人間如きと仲良じ』とかよ。 アイツも墮ちたな』
仲は良くないし、どうかと言つと今にも殺し合ひを始める仲。

声が聞こえない為、仲良く見つめ合ひて話している様に見える。
……声、聞こえなくとも解るんだじゃ？

そんな険悪な仲の一人と一頭。
そんな抜けている一人と一頭。

「…………はあ。これからお前みたいな獣と大量に会うのか
露骨に嫌そつた溜息を吐く。

『フンッ！ 好き』のんで会わせる訳では ん？ 始まつたか』
毒を吐きつとした時、ティガーは足下を見て歩く速度を速める。

「始まつた？ 何がだ？」

その後を追いながら尋ねる。

『教えるか。…………此所に残つても良いぞ？』
何か思いついたのか、笑みを浮かべる。

「…………その露骨な笑みは私を世界からお別れさせるモノじゃない
か？』

眉を細め、走りながら下を見る。

「…………この白い靄は何だ？」

思わず口に出して尋ねてしまつた。

下。つまりは地面。

兵士の死体と血で塗れた地面を這う様に白い靄が広がつてゐる。

「…………これは」

速度を緩め、その靄に触れようとした時、

「触れるな！ 走れ！」

センがそれを止める様に叫んだ。

「…………」

驚き、センを見て再度靄を見ながら速度を上げる。

『チッ！ 觸れていれば良いものを』

悔しがるティガーを見ながら益々意味が解らず首を傾げる。

「その疑問は後で教えてあげるから、行くよっ」

苦笑しながらセンが【森】の奥へ飛び込む。

『……触れちまえ。ハイになれるぞ?』

バルデトが吐き捨てる様に言い、センの後を追いつゝ【森】へ飛び込む。

『バルデトの言つ通りだ。自然の一部となれるぞ?』
笑みを浮かべたままティガーも【森】へ飛び込む。

その姿を見ながらナイトメアーは後ろを振り返った。

「ハイだの一部だの、何が言い……た、い……んだ?」
振り返り、その光景に絶句した。

地面を這う様に広がる白い靄。

その靄は転がる兵士の死体を包み込んでいた。そして、包まれた死体は纏う鎧、肉、骨すらも灰の様な粉に変わり、風に飛ばされ消えた。

「……ハイって灰か……一部つて言つのは……肥料つて事か」
冷静に考えているが、内心焦っていた。

この白い靄は触れたモノを悉く灰に変えていく。
溶けているのではない。白骨化とかその様なモノでもない。
触れた瞬間に灰と化している。

触れた対象を灰に変える力?
余りにも卑怯過ぎるだろ。

「……これが『失われた魔法』…………それとも、それとは違う力

「……」

まだ、【森】の奥にすら足を踏み入れていないのだぞ?

入り口でこれ程か。

「……今日は……驚く日だな」

内心焦りながら、それでも何処か楽しみながら、ナイトメアーはセン達の後を追う様に【森】へ飛び込んだ。

まずは、あの白い闇の説明をどうしても聞きたい。自然と浮かぶ笑みを堪えながら、闇に溶け込んだ。

今一番書きやすい作品。

そして、一番練られている作品。

主人公の視点が著しく無い作品。

ヒロインは彼女なのか？未だに解らない作者。

阿呆め、この作品はハーレムなのだ！

…………えつ？ 獣と人のですか！？
違います。きつと…………きつと！—！

早く人間の女性キャラを出したい作者。

それでは、それでくは。

Do teach? Do not teach? Real intention

お久しぶりなのかどうなのか。

予告投稿……まあ、あれです。この日に投稿しますよを解除しました。

理由としましてはこの作品が一番今書けるからです。

なので、小まめにでも投稿しようかなって。

今まで放置していたからそうしようかなって。

……まあ、はい。未だ大きく進みはしないですがね。
はい。

【森】の中。奥深く。光が届かないまでに。

【森】、それは余りにも大きい括りだ。
辺りを見渡せば、少なくとも森は存在するだろ？

お母さんにお使いを頼まれた赤いズキンを被つた少女が少し歩いただけで入り込む森があれば、砂漠の様に歩けど歩けど辿り着けない森も存在する。

此所の【森】もその様な森と同じ括りなのか?
答えは否。

【森】、俗称は『エターナル・トイ・ガーデン』。

今では呼ばれる事すら無くなつた昔の呼び名。
呼ばれた理由も意味も解らず廃れて消えた呼び名。

唯の森ならば、その様な大層な名で呼ばれる事もないだろ？
名が付くと言つ事は、それなりの意味があると言つ事だ。

意味が無いモノに名を付ける意味は無い。

「それ」・「あれ」・「これ」それだけで十分。

【森】、今ではそう呼ばれる普通とは違つ【森】。

だが、知らないのは「外」の生き物だけだろう。
この奥深く、光も届かないまでに暗い【森】。その【森】に住ま
う生き物達は特別な名で呼びはしないが、「中」では区域を分けて
いる。

まず、【森】は五つの区域に分けられている。

一つ、『中央』
『^{グラハム・ソニー}森林神樹』聳える【森】の中心。

二つ、『西』
『^{スノーカイガ}白銀の虎』が監視する『神聖国メニキュラ』側。

三つ、『東』
『^{ラクス・スピリット}湖の精靈』が癒す『ガランド大帝国』と『ゴードティア共和国』
側。

四つ、『北』
『無法』が蹂躪する『ゴードティア共和国』側。

五つ、『南』
『不確かな狼』が駆ける『ガランド大帝国』側。

『西』『東』『北』『南』そして『中央』。

これが【森】の大雑把な区域。

【森】の中に住まう生き物は皆が皆協力態勢な訳ではない。田を合わせれば、声を聞けば、臭いを嗅げば、気配を感じれば、直ぐさま殺し合いを始めようとする血の多い物だらけだ。

その為、区域分けと言つ繩張り争いを起させない為の配慮。そして外敵・人間へのスマーズな対処。それが主な理由で【森】は五つに分けられている。

『不確かな狼』と『王』が蹂躪した『南』・『ガランド大帝国』側、人間の【森】への侵入行為と【森】への放火行為は凄まじい速さで【森】を伝播した。

誰がどうやってと首を傾げたく成る程に早く。

それを聞き、『西』を監視する巨躯な白い虎は少し心配し。

『東』を癒すお喋りな精靈は気にせず湖の上で夢の中に入り込み。

『北』を蹂躪する一癖も二癖もある幻想種共は『不確かな狼』の失態を、腹を抱えて笑い。

『中央』で『王』達の帰りを待つ臆病者とエルフは人間の貪欲さと無計画さに溜息混じりの苦笑を浮かべていた。

【森】は協調性の無い最強と無敵が集まり出来た一種の集落。

唯、願わくばミスか何かで命を落としてその区域を貰い受けようと考えるゴロツキも居れば、皆が手を取り合えば取りあえずは大丈夫と考える楽天家も居れば、どうでも良い。今が幸せであればと言う急け者も居る。

バラエティー豊かな個性派が揃つこの【森】。

『ギャハハハハハツツ！！ 火を放たれたって！？ 笑える！ あの糞狼共の悔しがった表情が目に浮かぶ！ 浮かびすぎて腹がよじれる！！ クククツッ！！ ギヤハハハハハツツツ！！！！』 けつたいな色使いのお面を頭に付け、青い宝石があしらわれたネックレスを首から下げ、手首にも不釣り合いなアクセサリーを嵌める猿。

『嘘吐きの猿』^{ライ・モンキー}。嘘しか言わないとまで言われる幻想種。

『嘘吐きの猿』は腹を抱え、器用に枝の上で転がり回っていた。

その笑い声は大層耳に響く。

何を笑っているのか。勿論『不確かな狼』達の失態。

『嘘吐きの猿』が担当するのは『北』。

『無法』と呼ばれる協調性の無い幻想種の一匹だ。

この猿は他の物のミスが大層嬉しいらしい。

不幸が好物。そう言われても「ああ」と納得してしまった。う。

『ギャハハハハハツツ！！！ 涙が……一生分の涙が流れ出ちまう……』
息を切らしながら笑う猿。

「……全然帰らないと思つたら、帰つて來た彼等を笑う為に残つていたんですか」

猿の下、木の根に腰を下ろす白いローブを纏い、白い長い髪。尖

つた耳。目が青く光るエルフ。

エルフは猿の甲高い笑い声に苦笑しながら猿を見上げて溜息を吐いた。

『エルフ』。人外と呼ばれる幻想種。

「ディガーさん達きっとライモンさんを見た瞬間に口を大きく開けて駆け出しますよ？」

エルフの横に座る金髪タレ田の見ただけで腑抜けさと臆病さが滲み出る人間。

【森】の生き物が心底嫌う人間。

「ハつ当たりでチキンが食べられるかもりませんね」

エルフは満面の笑みで横に座る人間を見る。

「ええ……ぼ、僕、食べられるんですか！？ 嘘…………ですよね？ ですよね！？」

「もうそろそろ帰つてくると思うのですが、些か遅い気もしないでもないですね……調味料でも探ししているのでしょうか？」

「無視ですか！？ と言つた調味料って何ですか！？ 誰に使うんですか！？ 僕ですか！？ 僕なんですかあ！？」

涙を流し、頼りない腑抜けた声を出しながらエルフの腕にしがみつく人間。

『もう…………もう本当に……ギャハハハハハツツ！！！ 傑作だ！ 本当に傑作だ！ ギヤハハハハツツ！！！』

未だに転げ笑っている猿。

「遅いですね……先に準備して出汁でも取つてますか？」
笑みを絶やさずに黒過ぎるエルフ。

「それを僕に尋ねるんですか！？ 僕はどう答えれば良いんですか
！？」

涙を流しに流している腑抜け代表の様な人間。

……状況は誰にも収集出来ない程にカオスだった。

「五つにねえ。獸は自由気まだと思っていたのだが」

【森】の中、枝や岩を器用に避けながらセンとナイトメアー、そして『不確かなる狼』のディガーとバルデトは駆けていた。

「そうやって分けないと種族別の争いが始まるからね。皆が皆「同じ幻想種だから」と手を差し出す様な奴じやないんだよ」

【森】を駆ける中、ナイトメアーはセン達から【森】の基本的な事を教えていた。

五つに区域分けされた【森】。

それを聞いて思ったのは「大差人と変わらない」と言う事。唯の獣ならば、本能に身を任せ動くであろう。

けれども、幻想種と言う生き物は人と同等かそれ以上の理性を手に入れてしまった生き物だ。

中には無知な生き物もいるだろうが、今現在までにナイトメアーが会った幻想種は高い人と変わらない知能を有している。

その為に起きた種族別の争い。己と他の争い。人間同様。己の縄張りを広げようとする行為。

これを今言えば、確実に狼達は私を殺すのだろうな。などと考へ、言葉は考へるだけに止めていた。

『まあ、多すぎる種族を一つに纏めるのは最良ではない。種族別に分けるのは当然と言えば当然の行為だ』

『そんでも馬鹿な奴等は暴れ出すけどな。知能を持ったが為に悪知恵が働くんだ』

ディガーの言葉の後にバルデトが付け足す様に吐き捨てる。

「まあ、メアが『北』とかに行かなくて良かつたと思つよ」センが笑みを浮かべる。

「『北』って言つのは『無法』って言つ幻想種の担当区域だったか

? そんなに血氣盛んなのか?』

『中には会話が出来る奴も居るが、殆どの奴が「自分が一番」だと張る奴等ばかりだ。不用意にその区域に足を踏み入れれば、目も当てられない死しか待つていい』

センの代わりにディガードが答える。

それを聞き、ナイトメアは表情を引き攣らせた。
会話が出来るか出来ないか。基準がそこなのか、と。

理性を手に入れたからと言い、その理性を活用する物は少ない。
手に入れたかったモノではないからだ。

人は優れた理性を手に入れたが為に、本能が廃れた。
獣は優れた本能を有する余り、理性が消え去った。

本能を廃れさせる理性を、獣が欲するか否か。
答えは決まっている。

童話の獣の様に、「人の言葉が話せたら」や「人と恋が出来れば」などとおめでたい考えを持つ獣は一握りだ。

人は餌。もしくは狩人。

変わらない決まりだ。

だが、『無法』共はそれ以上に狂っていた。

敵イコール人と言う方程式ならば、獣同士がこうも怪訝し合ひう事はない。

『無法』共の方程式が、敵=自分以外だからこの様になつてているのだ。

獸ならではの傲り。

それが互いの共存を邪魔している。

「先に言つておくね、『終焉の獣』・『破壊し回る怪物』・『ゴニコーン』・『覚醒する光』・『殺戮の骸骨』にだけは気を付けてね。……『イツ等だけは俺でもディガーラ達でも止められない』ナイトメアーが思考に没頭している時、センが神妙な顔付きで忠告した。

「名を言われても私にはさっぱりなんだが。辛うじて『ゴニコーン』は解る。だが、他はさっぱりだ。……まあ、中には物騒な名を持つている物もいるがな」自分で言つておきながら、余りの無知さに苦笑する。

『知らないと解つていて態と詳しい説明を入れてないのだ』

「ほお～。あわよくば、私を殺せればと言つ事か？」
ディガーの言葉に青筋を浮かべながら尋ねる。

『阿呆が。『イツ等の事を知つている人間は片指にも満たない数だぞ？ 逆にお前が知つている方が驚きだ』

「それならば名を言つても尚無駄だろ？ 名を知つていようが見た目が解らなければ意味が無いだろ？』

『ケツ！ これだから無知な人間は』

先程まで黙っていたバルデトが馬鹿にする様に鼻で笑う。

「…………どう言つ意味だそれは？」

流石の彼女も怒りを現す。

「バルデトの事は気にしないで。暫くああだから。それと、名前だけでも知つておいた方が良いよ? 100%。断言出来る。知つておいた方が身を守れる」

バルデトの言動に苦笑しながらも、ナイトメアーを見る目は至って真面目だ。

その目に思わず生睡を呑む。

「…………そいつ等は、強いのか? そう言つ意味での警戒なのか?」

『違う。強い強くないの問題ではない。問題はお前が人間であり、奴等が『無法』にも溢れた渾共だからだ』

ディガーの声には先程までの巫山戯は無い。

これは本当の忠告・警告。

「自意識が余りにも強過ぎて何にも染まれない奴等なんだ。下手に襲つたりはしない。話せば解る奴も居る。だけど、それでもやつぱり溝がある。下手に足を上げれば噛み切られる。下手に指を動かせば捻り取られる。下手に口を動かせば頭」と斬り取られる。だからこそ、名だけでも知つておく必要がある。向こうは必ず自身の名を口にする。自己顯示欲が強い奴等だからね。自分の名イコール強さなんだよ」

最後の方には苦笑混じりに説明した。

「姿を説明した方が早いんじゃないかな?」

『説明出来ない』

ナイトメアーの問いを一蹴する。

センが言えれば違うのかもしれないが、ディガーガ言つた事により
ナイトメアーは額に青筋を浮かべる。

「それは何故? と、尋ねても?」

『お前の怒りは最もだが、誠に残念な事にこれが縛りであり、俺等
の掟だ』

顔を見ずにディガーアは淡々と理由を述べていく。

「掟?」

『そうだ……森は秘匿で在るからこそ、謎を孕み神秘的である。
それ即ち森だけに関わらずその森に住まう物も同一。森に住まう物
は森に住まう物を特定断定出来る情報を流す事を禁ずる』……こ
れが俺等の掟の一つ。森に住まう物の掟だ』

ディガーアは此所でナイトメアーの顔を見る。その表情には何も宿
つていない。

先程までの露骨な笑みは消え、喜怒哀楽どれも当てはまらない表
情を浮かべる。

「……成る程な。本当に此所の獣は自由じゃないな」

「……人間みたいだ。再度浮かんだ言葉を呑み込んだ。

神妙な面持ちになるナイトメアーを見たセンは、笑みを浮かべる。
「だからさ! ディガーアが色々秘密にするのはそれが理由なんだよ
! さつきの白い靄も、バルデトが言つた『失われた魔法』以外の
力も、そして俺の力も。森の情報は森に住まう物、もしくは『森神
樹』^{ツリー}の加護を受けたモノだけにしか言えないんだよ」

「…………ほう。そうだったのか。意地悪いだけではないのか」

センの言葉を聞き、ナイトメアの表情は笑みと言ひ呟きもニヤニヤだつた。

『阿呆め。あが本音以外のなんだと言つのだ。貴様は随分おめでたい頭らしい』

照れ隠しなのかどうなのか。見た感じだと完全な本音だ。

そして残念な事にナイトメアはディガーの発言を、照れ隠しか否かを考える前に断定。

『言つてくれるな…………保存食。今からでも遅くはない。捌くか?』

『貴様も此所では保存食同然だ。喰うか喰われるかなどせずとも、直ぐさま涎を垂れ流した奴等が貴様の背後に立つだらうぞ』

「森の中でないと威張れないと言うのも案外可哀想なものだな。外に出て町の出店でも覗いてみる。お前の肉が大量に干されているぞ? おつと失礼。お前のではなかつたな」

『…………殺るか?』

先程も同じやり取りをしなかつたか?

そしてそのやり取りを聞いているバルデトは今にもナイトメアに飛びつきそうな形相を浮かべ、センは必死に笑いを堪えていた。確信犯なのかもしれない。

「ククツ…………まあまあ落ち着いて、落ち着いて。互いに挑発し合

つてちや、縮まるモノも縮まらないよ?」

笑いを堪えながら止めるセンだが、矢張り説得力に欠ける。

『……フンッ！まあ、仕方が無い。今はお前を死体に変えるのを我慢しようじゃないか。汚い体のまま死ぬのは少し可哀想だからな』

「……此方も仕方が無い。小遣い稼ぎは今の所は諦めよう。下手に森を血で汚すのは良くないからな」

引き下がる。が、何故にいつも一晩一晩ここなのだろうか。

『……ほう、もつ森の事を気に掛ける心を備えていたか。感心だな』

「お前じゃ、私の事を気に掛けてくれるなんて。不気味な程に吃驚

互いに青筋を浮かべながら辛つじて引き攣る程度で収まっている表情を收めようと/orする。

その姿を見ながらセンは腹を抱えていた……楽しんでいませんか？

「ふう～……いやあ、中々。仲が良いと書つかなんと書つか！」
清々しい年相応の笑みを浮かべながら禁句になつてこむ「仲が良い」と書つ言葉を発する。

その言葉に矢張り反応し、センに何かもの申そつとしたナイトメアーとディガーだが、センの笑みを見て悟つた。

……「マイツ、本氣だ。

じ。

誠に残念な事だが、センは本当にナイトメアーとトイガーナの仲が良いと勘違いしているのだ。

この言い合ひも一人と一頭の仲の良い小競り合いだと笑つてゐるのも、言い合ひが唯々面白いだけ。

天然なのか。それとも狙つているのか。
後者は残念な事に薄い。

「『…………はあ～』」

揃つて溜息を吐くが、既に睨み合ひ氣力を削られてしまった。

「ん？」

首を傾げる。

その姿が益々氣力を削いでいく。

阿呆らしい。

思わずそう思つてしまつ程に場の空気を変えてくれた。

『…………ケツ！』

唯、一頭だけ未だにナイトメアーを見んでは顔を歪めているが。

『…………もう少しで『中央』だ……お嬢女』

トイガーナナイトメアーを見た、と言つより睨んだ。

「何だ？ 続きなら今度だぞ？ 今はそんな気分ではない」
苦笑しながら首を横に振る。

『そんなもん俺もする気は毛頭ない…………真面目な忠告だ』

態と「眞面目」と言つて葉を使う。

それを聞き、ナイトメアーは苦笑すらも表情から消した。

『今から『中央』だ。先程名を上げた奴等は基本居ない。『中央』に居る奴等もいきなり襲つて来る事はないだろう。少なくとも貴様とセンが共に居る限り、一応の体裁で接していく。だが、勝手な言動には気を付けろよ？ センでも弁解出来ない程に醜態を晒せば、今日が貴様の命日だ。解ったか？』

少し甘く見られ過ぎではないか？

子供でも在るまいし。そこまで言われなくとも解っているつもりだ。

「…………解つてている」

若干頬を膨らませながらそっぽを向く。

『本当に解つてんのかねえ。オツムが弱すぎて凡ミスなんてメチャ笑える事はしてくれるなよ？』

笑みを浮かべ馬鹿にするバルテト。

何か言つてやろうかと、考えたが、
「心配無用と、だけ言つておく」
凛々しい余裕の笑みを見せる。

彼女のその笑みは、所謂仕事用と言われるモノだ。舐められない為の。

その笑みは彼女の表情に合い過ぎていた。
見る者が見れば、胸がキュンとしてしまつ程に。同性すら惚れさせてしまつ程の笑み。

醸し出される雰囲気はまさに何処のお嬢様な程。

妖艶。そう言えるまでの雰囲気。

センはその笑みを横から見ながら静かに小さく笑みを浮かべた。
無垢な少年の笑みを含み、尚かつ『王』としての威厳を含んだ笑
み。

その笑みに気付いたのはディガーノミ。

ディガーノミはセンの笑みを見ながら、思わず目を見開いた。

そこまで、そこまでこの女を買つていいのか、と。

『失われた魔法』だけではない。センはそれ以上の何かをこの女
に期待しているのか？

……現段階では、そこまでの期待をディガーノミは出来なかつた。
危険分子。センの興味が逸れれば、直ぐさま殺してやるつ。

そう考えていた。

だが、何だかんだで既に『中央』にまで連れてきてしまった。
この後どうする？『森神樹』に拒否されればそこで終わる。

だが、加護を受けたらどうする？
仲間として受け入れるか？

答えは否だ。

チキンやアイツの様に、センに恩を受けた訳ではない。
いつでもこの女は我等に掌を返す事が出来る。
情報を流す事も容易ではないが可能。

ならば、どうする。

……センのその思いは、何処から来ているのだ？

解らない…………いや、解らなくて良い。

未だこの女を知らない内に、センの考えを理解しては駄目だ。共感しては駄目だ。

この女は危険分子。

完全な安心が出来るまで、信用するに値するまで。

私はセンとは真逆の考え方抱かなくてはいけない。
他の奴等に危害が及ばない為に、森の為に。

何より、センの為に。

「…………さて、行こうか」「
一步。センは前に出た。

この出逢い。そしてナイトメアーを連れてきた事。
全てが裏目に出来るのか。それとも、奇跡とも呼べるそれになるのか。

未だにそれは表に出ず、各自の考えは奥底に沈み、謎を孕み神秘的な【森】は、歓迎か拒否か、静かに風に揺れた。

説明を入れていきます！

唐突に、颯爽に？

この作品は説明を入れないと全く世界感が掴めないと言つ作品です。モダン系の作品ならば、舞台が現代とかなので解りやすいのですが、ファンタジーはまずその世界がどんな世界かを説明しないと黙目ですよね。

残念な事にこの作品はその説明が不十分！
「森つて何？だから？」そう思つと思ひます。

なので、小まめに説明を入れていきます。
ぶっちゃけ『有限魔法』の説明も不十分。

何処かで説明します。はい。

それでは、それでは……。

P・S・

マガジン連載のあの漫画で
『ロストマジック』
『失われた魔法』って出たね。

パクつてはいないよ。よく使われる言葉だし。
まあ、こつちは使つてるから失われてないんだけどね！！
…………その説明も入れますよ。

Who are you? (前書き)

お久しぶり?

いつも龍門です。

断らないから使い勝手が良いのか?
バイトが凄まじい感じ。

俺のシフトだけ空白が少ない。

胃に穴が空きそうな程、接客・接客・接客・接客・愛想笑い・接客・接客、
の無限ループ。

ストレスと無縁だったあの頃.....。
襲い来る腹痛と胸焼け。

矢張りあそここのタイ焼きは甘すぎる.....。

【森】『南』・『ガランド大帝国』側、『黄昏の砂丘』

【森】を囲む様に形勢される『黄昏の砂丘』と呼ばれる砂丘。200年前に墮ちた『永久凍結^{フリーズ}』により出来上がったと文献には書かれている。が、現在の学者の調査によると、「隕石落下により出来上がったモノではない」と言われてはいるが、それを証明する事は出来ずに『不可思議な現象』と上げられる現象の一つ。

【森】・『黄昏の砂丘』・『ガランド大帝国』は差程離れていなく、『ガランド大帝国』の『帝都ラムスボルグ』から『黄昏の砂丘』に着くまで2日。『黄昏の砂丘』から【森】までは2時間も掛からない。

砂丘に月が昇っている。

見通しの良い景色。映るのは月光に反射した砂の輝き。
風は吹かず、静寂が場を支配する。

そんな中、砂に足跡を付けながら歩く数名の兵士。全員合わせても五名。

その内、真っ赤な鎧を纏う者が一人。残りはぐすんだ銀色の鎧を纏っている。

全員が全員体の何処かしらに傷を負っている。

一言も発せずに、口から零れるのは疲労から来る荒い呼吸。

そんな中、赤い鎧を纏つた『紅蓮騎士団』団長、レイナード＝アヒリアは口を開いた。

「此所で暫く休憩を取る。各自もう一度自身の怪我を」

その言葉を聞き、ぐすんだ銀色の鎧を纏つた兵士一人が糸が切れた人形の様に地面に座り込む。

表情に安堵は無い。

未だ顔は青白く、ガタガタと歯を振るわせている。

『ゴースト・ウルフ』^{ゴースト・ウルフ}に刻まれた恐怖。

余りにも根は深く、【森】から離れた今でも何時襲われるかと言う恐怖に苛まれる。

手を伸ばせば届く距離。至近距離で死んで行く仲間。

首筋から噴き出る鮮血。

鮮明する程に脳裏に焼き付いている。

悲痛の叫び。死にたくない一身の叫び。助けを求める叫び。

此所に居る者はそれを無視し、そして屈辱と敗北、恐怖を『えら
れ逃げた者達だ。』

「死にたくない……死にたくない……死にたくない……死にたくない」

座り込む兵士の一人が自分の体を抱きながら震え出す。

「…………

もう一人の兵士は虚ろな目で唯々砂を見つめている。

二人とも大きな怪我は見あたらないが、精神には大き過ぎる傷を負っている。

その様子を見て、余りにも不憫過ぎ田を逸らす『紅蓮騎士団』団員フロア＝ミスカラ。

彼女も大きな傷は無い。

正体不明の少年により『えられた怪我は致命傷ではなく、時間と共に癒えるモノ。

多少の息苦しさはあるが、動く事に支障は無い。

「…………たつた…………たつた五人」

フロアは思わず漏らす。

この砂丘を越え【森】に向かつた時は何人居た？

……157名。些か今回の作戦には多すぎる人数。それ程の数を投入し、生き残ったのはたつたの五名。

その内一人は『紅蓮騎士団』だ。この作戦の正規メンバーではない。

「…………あれが…………森…………『不確かな狼』…………幻想種」

自身の世界の狭さ？そんな範疇の話ではない。

あれは、人が戦うべき相手ではない。

『有限魔法』とも『未知魔法』とも取れない謎の力。

姿が消える？突然現れる？

どうやって戦えと？どうやって勝てと？

国は……あんな化け物と戦う気なのか？

フロアは相手の強さに恐怖していた。

簡単に遂行出来る作戦。そう、言われた筈なのに。

「…………あんなの…………敵う訳…………ない」

思わずそう漏らしてしまった。

弱音が聞かれててしまう。そんな事は気にもとめずには。

「フロア。余りそう言う事を口にするな」
レイナードは腰に手を当てながら注意する。

が、フロアには届かない。

彼女もまた心に傷を刻まれているのだ。

人と言う者は圧倒的な力に弱い。
ねじ伏せられる恐怖。抗えない恐怖。
人はそれを肥大させ抱え込む。

自滅が得意な生き物は人ぐらいだろう。

「…………ふう」

フロアから視線を外しながら息を吐く。

此所で慰めても大差意味を成さない。

それに、レイナード自身も実際は慰める余裕など無いのだ。

『紅蓮騎士団』の団長と言つ体裁がある。

それを張つているだけであつて、平気な訳ではない。

唯、彼女は恐怖以外に屈辱を刻まれている。

逃がされた。殺さずに。相手の気分で。

それが堪らなく苛つかせる。その苛つきのお陰か、崩れずに張つていられる。

その苛つきは吐き出したい、叫びたい程に大きい。

が、堪えろ。抑えろ。

唇を噛む。

此所で露わにして良い感情ではない。

噛んだ唇から鈍い痛みが走る。

【森】でも同じ所を噛んでいた為か、血の固まりが傷口に付いて

いる。

「……我慢強いな。以外にも」
思わず苦笑してしまう。

もう一度フロアや兵士達に田をやる。
胸に痛む光景。

人の死には慣れている。

そう言えは出来るが、矢張りそれは嘘だ。

我慢する事は出来るの間違い。

叫び逃げだそうと思ったのは軍に所属して間も無い頃。顧みず救い出そうと無茶をしたのは部隊に所属した頃。自分のミスで仲間を死なせてしまったのは騎士団に入った時。

随分私は染まつたな…………。

浮き出る記憶は余りにも血生臭い。

氣高く、誇り高い人間に。

そう思い志願した軍。

残念な事に今の私には程遠い。

覚悟……は、決めたつもりだったが。矢張り慣れない。

「…………ん？」

ふと、一人居ない事に気付く。

確か、今回の作戦を指揮した部隊長が生き残っていた筈だ。その彼が何処にも居ない。

恐怖の余り何処かに行つたのか？
砂の地面に目をやる。

足跡。その一つ。部隊長のモノであろう足跡が此所から離れていた。

「矢張り…………恐怖に耐えられなく」
その足跡を目で追いながら歩き出す。

部隊長。多分あの男も幾度もの戦いを生き抜いた筈だ。

だが、今回の任務は余りにも過酷過ぎた。

一方的な虐殺は私自身も初めてだった。

あの男も、きっと初めてだったのだろう。

少し大きな砂の瘤を登る。

そして下を見ると、一人の兵士、部隊長が座っていた。

見つけた。

だが、心身共に疲労した彼女に完璧な体裁を保つ事は出来ない。舐められない為にも大きく息を吸い、表情をいつも彼女、『紅蓮騎士団』団長の表情にする。

そして座る部隊長に近づく。

「……此所で何をしている?」

声はいつもの彼女だ。

「ん? ……これは、これは。騎士団長様ではないですか。私に何か?」

部隊長は皮肉な口調で振り返る。

左目を布で覆っている。

先程の戦いで傷を負わされたのか。

「姿が見えなかつたからな。勝手な行動は慎んでもらいたく

「申し訳ありませんでしたな。幾分私も頭が回らず、勝手な行動をしてしまった」

無表情のまま、口だけ吊り上げ笑みを作りつつある。

不意に、レイナードは感じ取った。

僅かだが、引っかかる違和感を。

「…………隨分…………元気だな？」

その言葉は不適切な言葉であった。

元気な訳がない。そう自分自身も思つていながら、その言葉が口から出た。

「元気？ そんな訳在る筈がないじゃないですか。死にかけ、部隊の兵士達を殆ど死なせてしまつたのですよ？」

レイナードは先程までの張つた姿ではなく、いつもの雰囲気を醸し出す。

「…………その傷、狼共にやられた傷ではないな？ 誰と戦つた？」

「聴取ですか？ 今は勘弁してくれませんか？」

ゆつくりと立ち上がる。

部隊長の鎧は所々に刃物で開けられた様な穴が空いている。

「まあ、見当は付く…………『黒き鎌使い』、あの賞金稼ぎと戦つたのだろう？」「うう~」

狼の牙による傷は、腐るほど見た。だが、同じではない。

部隊長は黙つたまま、レイナードを見つめている。

「あの閃光弾。あれは貴様がやつたのだろう？ 狼共が使う必要性があの場ではない。『黒き鎌使い』も、そんな物を持っている様に見えなかつた」

「…………他には？」

それは突然。部隊長の雰囲気が変わる。

先程までは心身共に疲労した雰囲気を醸し出していた。だが、今の彼には余裕さえ感じられる。

それを感じ取り、レイナードは若干眉を細める。

「……作戦内容。森に火を放つと言つ今回の任務に大きく外れた作戦。今回は森に住まう物の調査が主だつ」

「『黒き鎌使い』の処分も、だろ?」

被せる様に部隊長が発する。

その発言に更に眉を細ませる。

「……何故、貴様がそれを知つてゐるかは置いておく。その任務は私達に与えられたものだ。貴様等部隊には関係の無い話。話を戻すが、火を放つと言う行為は炎り出す為なのかもしれないが、それは余りにも愚策。最初は唯々貴様が無能で阿呆なだけだと思つていたが、どうやらそれは認識の誤りだつたらしい」

一度そこで切る。

「……いや、炎り出すと言つ事、自体は間違いではないな? ……

問題は、何を炎り出したかったのか、だ

そこでレイナードは腰に下げる『ヒリトック・マジック有限魔法』の短剣の柄を握る。

「答える。貴様は……何者だ?」

「いきなり「何者だ?」か、随分飛ばしたな……まあ、守秘義務があるからな。色々と言えないが、そこら辺の穴を突き、言える事が一つや二つはある」

部隊長は口角を吊り上げる。

「……答えて貰おつか」

「ハハッ！怖い、怖い…………先程までは体裁を保とうとしていたのに、今は素だな。流石と言つべきか、な？」『紅蓮騎士団』の団長としては些か若過ぎるし、色々とまだ足りない部分が在ると思う。『いやはや…………中々、と俺の中の評価を上げておくとしよう』

手を広げたりと、大きなアクションを取りながら態とらしく言葉を並べていく。

が、その言葉はレイナードを刺激するモノばかりだった。

「…………そう言つ評価は言われ慣れてはいるが、矢張り面と向かつて言われるのは何度経験しても嫌なものだな。しかも、色々と見抜かれていたときた。これは余りにも私が滑稽ではないか？」笑みを浮かべるが、その笑みは怒りから来るものだ。

「そこまで馬鹿にしたつもりは無い。素直に評価を上げたんだ。その觀察眼。そして相手の雰囲気を察する洞察力と言つのか、勘と言つのか。それを踏まえても格段に評価は上がった。矢張り、噂や調書と言つのは完全に信用は出来ないな」

部隊長は不敵な笑みを浮かべたまま両の手を大きく広げる。

「…………解せない事がある」

「何だ？まあ、それに答えるかどうかは解らないが、一応聞こうじゃないか」

階級。そんな事を氣にもしない口調に態度。

レイナードは既にその事に対しての感心はなく、情報を引き出す事だけに集中している。

「今回の貴様の任務が森に住まつ何かを炙り出す事と過程しよう。それなのに、何故貴様は『黒き鎌使い』と戦闘を行つた？炙り出

すだけが貴様の任なのか？

「残念だ。それは言えないな。まあ、『黒き鎌使い』と一戦交えたのは俺の勝手な行動だ。唯純粹に戦つてみたいと思つてしまつて、な。いやあ、伊達に女で一人稼ぎ屋をしているだけあるな。殺されかけちまつたよ！」

話している途中で思い出したのか、顎を撫でながら笑い出す。

その反面、レイナードは何か考えた様に顎に手を当てていた。その様子に気付き、ニヤリと再度表情を変える。

「考える、考える！　俺の素性や今回の不可解な点を、な！　何故俺は火を放ったのか！　何故俺は放つただけで他のアクションを見せなかつたのか！　何故俺が……此所に居るのか、な」

部隊長が発する言葉自体がレイナードに取つて不可解だった。
何故、懲々考えさせる様な発言をする？

何かを知らせたいのか？何かを教えたいたのか？何かが在るのか？

考えるだけ泥沼に嵌つていく様な感覚に陥る。
裏が在るのでは？罷か？それとも本当に何かが？

この男の本性が全く解らない今、この発言を鵜呑みにする事は無い。

頭の片隅に置いておく。その程度に止めておこう。

それに、随分お優しい様で……。

「……もう一つ良いか？」

「知りたがりだ、な？　まあ、知る権利は多少成りともあるだろ？」

さな。良いぜ？ 開きな

「帝都に帰った後も貴様は、部隊に所属しているのか否、かだ」
「の問い合わせの返答により、部隊長が行った作戦の必要性が多少でも見える。

一時的な、牽制的な作戦だったのか。それともこの作戦 자체が布石だったのか。

「ククツ……なんだあ？ 僕にトキメ」

「断じて違う」

「…………そろかい」

最後まで言わせずに被せ否定する。

その速さにつまらなそうな表情を浮かべ、溜息を吐く。

「はあ、…………居るぜ。一応の軍籍は『第一森対策部隊』だ。知つているだろ？ 今回は少し部隊弄られて変な感じになつたけど、な。一応は今回も『第一森対策部隊』の主導だつたんだ」

「成る程な。てっきり今回の作戦指揮部隊は編成された部隊だと思つていたのだが…………部隊長を任されていたと言う事は、それ相応の戦果を挙げていたらしいな。元から対策部隊に？」

「一いつて話じゃ…………ああ、そうだよ。僕は産まれは違えど育ちは帝国だ。余所者ではない。まあ、色々と経緯があるんだが、それは依頼主にも関わるから喋れん」

先程から表情を変える為、嫌がつてゐるのかどうか、その真意は掴めない。

本当に本性を表つるのが得意な男だ。

「…………『第一森対策部隊』」「
もう一度呟く。

『森対策部隊』

【森】への作戦を実行する部隊。
奇襲・強襲・偵察・侵攻。【森】に関する事は全て行う部隊。

「…………実力か？」

笑みを浮かべる。

その問いに部隊長も一やりと笑みを浮かべた。

「その問い合わせ…………NOだ。半年前か。人員不足による急遽な補充で、な。全く、困ったもんだよな！ 今回も部隊ゴチャゴチャに弄られての部隊長だ。どうやらあの軍隊長様は余程『黒き鎌使い』を邪魔に思つていたらしいな！」

今回の『紅蓮騎士団』に『えられた任務は『黒き鎌使い』の排除だった。

言つてしまえばこの任が一応の本命だ。

こんな大掛かりにする必要が在るかは不明だが、その為だけに急遽編成した様な部隊を【森】へ向かわせた。

火を放つ。と言う作戦はこの男が『紅蓮騎士団』にも知らされない、極秘と思われる任を受けた事によるモノだったが、それでも説明が付かない。

「フフ、…………そうだな」

此所で初めて、レイナードは氣を緩めた笑みを浮かべた。
色々と考える所はあるが、部隊長の苦労している話を聞き、思わずの笑みを零してしまった。

その笑みを意外そうな表情で見る部隊長は俯き、今までとは全く違つ笑みを浮かべた。

「ああ…………本當だ。アンタの言つた通り…………情報だけで決めつけるのは良くない、な」

小ちく呟いたその言葉は、真意の掴めぬ飄飄とした言葉ではなく、彼の素を露わにした言葉。

言葉の意味は解らない。それでも、彼の本音とだけは解る言葉。

「ん？ 何か言つたか？」

小さく呟いた為か、聞き取れずにレイナードが聞き返す。

腰に手を当て、思わず漏らしてしまった自分に首を振りながら部隊長は顔を上げる。

「…………はあ～」

何故か溜息を吐いた。

「何だ？」

「…………可愛くない女だ」

首を横に振る。

「何だ、その態度。そしてその言葉。貴様に言われる筋合には無いのだが？」

額に青筋が浮き出ている。突然の発言に溜まっている苛々が暴れ出しそうになつてゐる。

「いや、別に」

彼がいつもつまらなそうな表情をしてゐるのは、今のレイナード

の表情が団長としての表情だからだ。

先程笑つて見せたあの表情は、年相応のモノだった。

それがいつも一瞬で元に戻った事に、部隊長はつまらないを感じていた。

だが、この事は部隊長が説明しない限りレイナードが知る事はないだろう。

「些か失礼じゃないか？ 説明しないのなら、態々言つ必要があるか？」

「やつぱんツンツンしているより、従順な子の方が良いな」改めて自分の好みが間違つていなかつた事を確認。かなり唐突だが。

「…………私は貶されているのか？」

「いやあ、貶してはいない。唯、俺は女運が無いってだけの話しよ」両手を挙げ、背筋を伸ばしながら歩き出す。

レイナードは眉間に皺を寄せたまま部隊長を睨み付けている。完全に部隊長のペースに乗せられている事に気付かず。

その表情に苦笑しながらも何も言わず、部隊長はレイナードの横を通り過ぎる。

後ろ姿を見ながら、レイナードは寄せていた眉間の皺を緩める。

「…………ぬは？」

不意に、レイナードは尋ねた。

「尋ねすぎだぜ？」団長さん

立ち止まらずに話し続ける。

「…………まあ、良いか…………俺の名はバッグラー＝サファリヤ。調べたいなら勝手に調べな。まあ、知りたい情報は出てこないだろ？
が、な」

腰に手を当て、笑いながら歩いて行く。

「バッグラー＝サファリヤ」

記憶の中にその名が在るかどうか、記憶を辿る。
が、記憶の中にある名にヒットしない。

偽名か？

後ろ姿を眺めながら眉を細めた。

不意に、彼女は蒼く光る左目を瞑つた。
世界を見るのは碧に輝く右目。

「…………

何も言わず、唯々視続ける。

「…………痛ッ！…………」

唐突に、右目に痛みが走る。

余程の痛みなのか足が蹠蹠け、倒れそうになる。
ゆっくりと右目を手で押さえながら左目の瞼を開く。

「ハア、ハア…………流石に、あんな短時間では、本名かどうか程度
しか見えないか」

俯き、苦笑混じりに額を流れる汗を拭う。

未だに痛みが残っているのか、手で右目を押さえたまま顔を上げ

る。

既に田の前にバッグラー＝サファリヤと名乗った部隊長の姿はない。

「…………卑怯かな。少し…………」

自分がやつた事に少し後悔しながらも、唇を噛もつとする。が、

「…………噛みすぎだな。唇が歯形だらけになってしまつ
癖なのかどうなのか。苦笑。

バッグラー＝サファリヤ。

この男が誰の命令により動いたのか。何が目的なのか。

調べる必要がありそうだ。

軍上層部…………または相當上が関わっている可能性がある。

それに、あの男…………、

「…………かなり出来る」

だからこそ、

「…………嫌いに入る分類だな」

押さえていた手をゆっくりと離す。

何度か瞬きをし、痛みが残つてゐるか確認する。

「…………ふう。使い勝手の悪い」

滲む汗を拭う。

碧と蒼に輝くオッドアイ。

双眼は、何を見つめているのか。

Who are you? (後書き)

やつと出たよ隊長の名前。何か格好いい。

本当はここの話だけで一話取る予定はありませんでした。

ですが、何か色々書いている内に結構長く。
なので今回はこれだけ。

まあ、隊長の名前出せただけでもラッキー。

この話書かないと隊長の名前次の登場まで出ない所でした。

因みに、隊長の妄想こくは藤原路沿さんです。
皆様もそんな感じで読んでみて下さい。多分合います。

それでは、それでは……。

どうも。お久しぶりです。龍門です。

リアルが忙しい……充実はしていないのではリア充ではないのでしうね。

色々頑張って書いているのですが、先に進まないですね。
急いで書いたら書いたで駄目でした。

色々読み返して「ああ、あの説明入れてない」などと云つ事になりながらも書きました。

未だに色々と説明していません。

増えるのはキャラだけです。

ラブコメは?

ラブって……ラブラドルーレトリバーの略ですか?

コメだけで良いよ。もう。このまま行くと犬無しにシリアルスに突入しちゃうよ。

……
読んで下さい。

進んではいません。ハイ。

『黄昏の砂丘』

【森】『東』側・『ガランド大帝国』『コードディア共和国』側

月が雲に隠れ、一時的に砂の地を暗くする。

明かりなど砂丘になど無く、夜空に輝く星が盛大に光を地上に放つていた。

その砂の地の上、空で輝く星々を見上げる人が居た。

茶色の布を体に纏い、顔の半分を覆う大きさのゴーグルを付け、腰には左右に一本ずつ剣を下げている。

その人は、空を見上げたまま口周りを覆うマスクを下にずらす。

「……小せエな」

声からして男。色気の在る男の声。20代前半程だろう。

男は付けるゴーグルを掴み、ズリ上げる。

現れたのはスカイブルーの瞳。

澄んだその瞳は、晴れた空以上の青さ。

「そんな小せエ輝じやア、誰もお前等を見つけられねエぞ」

歯を見せながら笑みを零す。

男の足下には大きな袋が一つ置いてある。

「…………取れるだけ取つたがア、どうだかな。俺が扱えるのが在る
かどうか…………大将や狼共は使……わねエさな、きつと
袋を爪先で突き、ブツブツと独りで喋つてゐる。

片から見れば可笑しな男だが、誠に有り難く此所は砂丘。人は何
処にも居ない。

顎に手を当て何か考え込んでゐるのだが、先程から袋を蹴る強さ
が増している。

「どうたもんか。全く、これだけ取つて使い道ねエとか、笑い話に
もなんねエな。売り捌くにも、そこら辺のゴロツキに売るなら壊し
た方が得策だしなア…………あアッ！ クソッ！！」

「ガシヤツツ」、と何かが壊れたであろう音が響く。

音の原因は彼が「クソッ！！」と叫ぶのと同時に袋を思いつきり
蹴つた事によるもの。

「あア？ やつちまつた音が鳴つたが…………もしかしてのもしかし
てかア？」

眉間に皺を寄せ、ゆっくりと蹴つた所を見る。

暫く見た後、袋を開け、中身を確認。

「…………どれだア？ ランクAとかは流石に笑えねエよなア……
FかDまでなら何とか許容範囲内だぜエ…………おつ、コレか」
頭を搔き、袋から何かを取り出した。

袋から出た手が持つていたのは、黒い宝石が嵌められた半月状の
何か。

「…………何だコレ？…………ん？ もしかして…………バングルか？」
半月状の何かを摘みながら気付く。

「そんじゃア、中に割れた片方が、コレか？」

違エ

「コレだな」違エ「コレだる。あア、そうだ。コレ

違エ「面倒だな。一度全部……片付けが面倒だり。ん

コレ、か？おオ、コレだコレ！」

袋の中をまわぐりながら、独りでブツブツと呟いている。

「ほオらな。コレだ……んでも、コレは何だ？」

取り出したもう一つの半月状の何か。

割れた面同士をくっつけ、ピッタリ合ったのを確認し男は首を傾げた。

くついた形を見る限り、男の言つた通りバングルだろ？

黒い宝石が嵌められたバングル。

それ以外は紺色に似た色だ。

が、それが何なのかは解らない。

「形状を見ただけでは解らない……属性すら解らないしなア……色からして『闇』かア？ 確かめたいのは山々だが、どうやら俺は……嫌われているらしいなア」

男は持っていたバングルを地面に落とした。

「……ランクB以上ってHのは解つたな」

落ちたバングルを眺めながら、男は眉を細めた。

男の右手、バングルを摘んでいた右手から血が流れている。手を眺め、バングルを見る。

「……ランクB以上が宿す、拒否反応。物が者を選ぶふつてかア……壊したからじやねエだろ？」「

右手を振りながら顔を歪める。

その表情も直ぐさま消え、溜息が漏れる。

「はア～……上等なモン壊しちまつたなア……」

頬杖を突き、空を見上げた。

「……小つさいなア……俺も、お前等も」

砂の地面に置かれた、二つに割れたバングル。

黒い宝石は、輝く星々を映していた。

【森】『中央』付近

会話をしながら【森】の中を駆けていたセン、ナイトメア、『ティガー、バルデト。

一時間近く駆けても二人と二頭に息切れは無かつた。

センは丸一日走り続ける事が出来、ティガーやバルデト『不^{ゴースト}確か^{ウルフ}な狼』は一週間走り続ける事が出来る。

失速無しに。

ナイトメアもそれなりに体力には自信が在り、丸一日程度なら失速無しに走り続ける事が出来る耐久力を持っている。

二人と二頭は立ち止まり、ナイトメアは腕を組みながら立ち、それを睨み付ける様にバルデトが監視している。

センとティガーは周りと大きさが違う一本の木の前で立っていた。

「…………何だ？」

『…………』

ナイトメアは先程から睨んでくるバルデトに嫌気が差していた。話しがけても今の様に無視され睨まれ続ける。

監視と言つのは解るが、こうも睨まれていないと駄目なものか。

「…………はあ」

小さく溜息を吐く。

「……バルテト、余程嫌らしいね」

小声でセンがディガードに言つ。

何とも言えない雰囲気を察しての言葉だ。

『そう思つならば、連れて来なれば良かつただろう?』

「もう連れて来ちゃつたんだ。どうしようもないし、連れて来ないと言つ選択肢はあの時には無かつた」

木に掌を当てながらそう言つセンの表情に笑みは無い。

『…………』

「冗談などでは、ない。

矢張りディガードにはセンに此所まで言わせるナイトメアードに価値があるのかどうか解らなかつた。

能力値は人間の中でも上、最強と呼ばれる程だらう。

だが、【森】の中では凡人の少し上を行く程度。

【森】には目を視ただけで、触れただけで、確認ただけで、感じ取つただけで、言葉を聞いただけで相手を殺せる力を持った奴等がウジヤウジヤしている。

あの女の力だけでは、不足。

我等を殺す事も出来なければ、自衛すら不可能。

……無残に殺されるのがオチか。

『…………足搔く姿は見させてもらつ』

ナイトメアードをチラリと見、ゆっくりと視線を外し、センを見る。

「…………」

センは木に掌を当てたまま目を瞑っていた。

その状態が一分程度続き、やっとセンが口を開いた。

「 、 。 、 、 」

が、その言葉は人間の言葉ではなかつた。

口が動いている。声も聞こえている。だが、何を言つているのか解らない。

思わずナイトメアーは目を見開いた。

人以外の言葉。言うならば【森】の言葉。

その言葉で会話などされたら、全てに描いて分が悪い。

情報を聞き出すなどと言う次元の話ではない。

「…………合わせていただけ、か」

思わず顔を歪める。

『不確かな狼』が人間の言葉を使つていたのは、私達人間に合わせていただけ。

言葉が伝わらなかつたら、相手に恐怖を与えられない。会話が出来ない。

それと多分だが、センに合わせてているのだろう。

人間が人間以外の言葉を話しては、色々と不都合が生まれる。

【森】の中だけならば問題は無いが、「外」に出れば必然的に人だけになる。

そんな中に一人だけ人間以外の言葉を話していたら、異端だの何だの言われ即捕縛だ。

まあ、【森】から出る氣など無いだろうが。

『良かつたな女。王が人間で』

ナイトメアーを睨んでいたバルデトはセンを見ながら言った。

「そう、かな？ 王が人間だから良かつたのではなく、彼が王だからこそ、じゃないか？」

腕を組み、木に背を凭れる。

『…………本當、何でテメエみたいな人間をセンは氣に入ったのか……』

「私は気に入られているのか？ 王と言う人間に氣に入られるのは、悪く無い氣分だな」

笑みを作る。

が、その笑みをバルデトはつまらなそうに見る。

『…………お前、色々とセンに似ているな』

その言葉は予想外であった。

ナイトメアーは目を見開く。

「…………何処がだ？ 確かに戦闘狂の様な思考回路は似ているが、その他に似ていると言つたら、髪の色と瞳の色ぐらいだぞ？」

『そうじゃねえよ…………まあ、あれだ。今言つた「悪く無い氣分」つて言つるのは嘘だろ？』

バルデトはつまらなそうに言つ。

「そうか？」
地位がある者から好かれるのが嫌いな人間は居ないぞ

お前の今を不繩工過ぎるぞ?』

「なつ！？」

唐突に言われ、思わず自分の顔を触る。

その行動を見て溜息を吐き、首を左右に振る。

『センは嘘を吐いた時に浮かべる笑みは、最高に笑える程に不細工だ。まあ、見る奴によつては解らないだろうが、解る奴には解る。一応の笑みと言うか、適当な笑みだ。お前の笑みがその笑みなんだよ。最高に不細工で流石に引く』

ハツキリと言えば、ナイトメアーの笑みは先程から浮かべているものと変わらない。

だが、ナイトメアーは眉間に皺を寄せた。

「…………余り良い気はしないな。お前にバレると言うのは、私の演技力にガッカリだ」

人差し指で「こめかみを押さえながら溜息を吐く。

『馬鹿にすんなよ！…………まあ、其処が似てゐるつて話だ。他は全然だけどな！　それ以前にテメエは女でセンは男だ！』

「…………何となくあの狼の気持ちが解つたな」

バルテトの発言を聞き、同情を混ぜた溜息をまた一つ。一瞬「ん？」と思わせる発言をしたと思えば、一気にそれも下が

る。

だが、溜息を吐いた後にナイトメアはニヤリと笑つた。
「お前、今私とセンが似ててゐると言つたよな？」

『んああ？ 沸いたか？ 物忘れが異常に早いぜ？』

『言つたよな？ ……』『お前、色々とセンに似ててゐる』って
腰に手を当て、髪を耳に掛ける。

『何の確認だクソ女！ 言つたぜ！ それがどうした！？』
バルデトは苛つきで吠える。が、気付いていないのだろうか？

態度とらじけ何度も確認を取る。いや、確認ではなく気付かせる為
に何度も繰り返し尋ねる。

『『色々』…………と、言つたな？』

『だから言つた…………んああ？ 色々？ ……い、言つたか？』
やつと気付いたらしく、「ヤバイ」と思ったのか惚けたフリを
する。

が、時は既に遅く、

「他に何処が似てているか是非にも聞きたいものだな。お喋りな狼さ
んのく・ち・か・ら

ニヤリ、もじくはニヤリ。悪魔が如く…………もじくは悪女。

『し、知らねえ！！ 全く見当も付きませんが何かアアアアアアアア！

！！！』

若干言葉使いが可笑しなりながら叫ぶ。

「嘘を吐くのか？ 気高い『不確かな狼』が嘘を？ これは、これは、これは！ 今までの評価が落ちるのでは？ ん？ ん？」

『調子に乗りやがつて……』

歯ぎしりをしながら睨み付ける。

が、優位になっているナイトメアーにそれは効かない。

どんどんと立場が可笑しくなっていく。

流石のバルデトもこれ以上お喋りが過ぎるとディガードに何か言わ
れると察する。

その為逃げようとするが、ナイトメアーの挑発により思わず口が
滑りそうになる。

嘘が言えないのではない。唯々、彼は……残念なのだ。

「どうした？ 言えない事はないだろ？ 言える事だらけではな
いか。その口から、簡単に言つてしまえば良い事ではないか？ そ
うすればその苛つきからも解放されるぞ？ 言つてしまえば立場は
元に戻るぞ？」

前髪を搔き上げながら言つその様は、女王様を彷彿させる。
女王さ……ナイトメアーは前屈みになり、バルデトの顔に自身
の顔を寄せ髪を耳に掛ける。

「ん？ どうした？ 言つてみな？」

『くツ……』

人間嫌いのバルデトはナイトメアーの態度が大層気に食わない。
叫びながら思わず言つてしまいそうになる。それを何とか……
堪え……、

『クソ女が……あんまり……俺を……な、舐めるなよ……』

言葉を選んでいるのか、歯切れの悪い話し方をする。

「ん~?」

首を傾げ、口角を吊り上げる。

可愛らしいのではあるのだが、その笑顔は大変真っ黒だ。

『…………クソ女が…………舐めるんじゃ ねえ…………』

「開いたよ!――」

バルデトが我慢の限界で色々と暴露しながら叫ぼうとした瞬間、それを遮る様にセンが叫ぶ。

それはバルデトに取つては助けであり、ナイトメアーに取つて邪魔だった。

『ん?　ん?　ん!?　そうか、そうか!　開いたか、開いたか!
随分早かつたな!!』

小走り＆スキップを器用にしながらバルデトはセンに寄つていく。

「チツ!」

小さく舌打ちをするナイトメアー。

「え?　別に何時もと変わらないけど?　……何でそんなに笑つてるの?』

事の次第を知らないセンは首を傾げる。

『氣にするな!　全く氣にするな!　氣にしなくとも困らないからな!!』

変に上機嫌なバルデトは叫びながら笑う。

のだが、その横にゅつくつトイガーハーが近づき、センに聞こえな

いぐりいの小さな声で囁いた。

『…………喋ついたらクイスと共に前を八つ裂きにする所だつたぞ?』

『……?』

バルデトの笑みは固まつた。

センは何かの作業で聞こえていなかつた、見ていなかつた。が、ディガーハその自慢の耳で聞き、チラチラと見ていた。全てを知つています。

サーー、と血の気が引く音が聞こえてきそつな程にバルデトの表情に血の気が失せる。

『…………言わないでくれ…………クイスにだけは…………死にたくはない』

引き攣る笑みを浮かべたままディガーハ懇願する。

『大袈裟だな。死ぬなんて…………』

そこまで俺は鬼じやない。と、言わんばかりの笑みを浮かべたディガーハなのだが。

『…………死ななければ良いのだろう?』

誠残念。

『慈悲を』

『獣の慈悲など、死骸を喰わないでやる程度だぞ?』
そんな慈悲必要ないのでは?

『…………クソう』

諦め、涙ながらに吐き捨てる。

「何しているの？ 行くよ？ メア！ 行くよーー！」
ディガーとバルデトの小声のやり取りを見ながら首を傾げ、ナイトメアーに手を振り呼ぶ。

ナイトメアーはゆっくりと歩き出す。表情には苦笑を浮かべている。

「慣れないな。メアと叫う呼び名は」

元々彼女は『黒き鎌使い』と呼ばれる方が多い。

ナイトメアーも彼女の名前でもあるが、本名ではない。
ナイトメアー 悪夢と付ける親も居ないだろ？。

メア。色々吹っ飛ばして呼び名だけは親しい。

これは嬉しい事なのだろうか？

完全に信用していない相手に親しみを込めて、そう呼ぶのだろうか？

色々考えるが、解る筈がない為その思考を消し去る。

「今から『森神樹』^{グランドツリー}に会いに行くから。付いて来てね」
センは笑みを浮かべる。

「そのグランドツリーとは何だ？」
首を傾げる。

【森】の知識など全くと言つて良い程に無い。
一つ一つ理解して知つていかないと話に付いて行けない。

『森神樹』……森の絶対にして森その物。守護し統べ、住まう

物だ。名に神を司る森の神…………そう捉えても良い』
ナイトメアーの問いに『ティガー』が答える。

「『森神樹』…………今から会つのか？ 私が？」

説明通りに解釈をすれば、『森神樹』は【森】の象徴とも言える存在だろう。

そんな大層な存在に、自分で言うのも何だがこんな賞金稼ぎ如きが会つても良いものか？と、言つか会つてくれるのか？

私が有無も言わせらず攻撃する可能性を考えないのか？

「そつ！ 今からメアは『森神樹』と会つて貰う。だから…………その前に教えておく事がある」

そう言つた瞬間、センの雰囲気から「少年」が消えた。
その指す意味は、今のセンは「王」と言つ事。

「…………」

ナイトメアーは息呑んだ。

「『森神樹』を俺等と同等に考えては駄目だ。俺と対峙する程度の覚悟では死ぬ。肝に銘じておけ、田の前に立てるは…………森その物だと」

「…………森、その物」

意味は解らない。

いきなりそんな事を言われても、把握出来ないのが人間だ。
だが、下手に行動すれば死ぬ事は解る。

私だつて【森】と殺し合^ハう程の度胸などない。

一体、どれだけ凄いのだろうか。

楽しみ……いや、セン達の表情を見る限り、本当規格外らしい。

それでも……疼く。

「……肝に銘じなければな」

自然と、私は笑みを零していた。

悪い癖かどうなのか。

彼女の理性は限界の「ホールサインを盛大に鳴らしていた。

特にないですなあ～前書きで喋ったから。てか、書いたから。

今回のをグダグダとか言つんすかね。

先に進まないなあ～……。

突然ですが、R18がアニメ化するの多いですね。

それ知らないで普通に観て「面白い」とか思つて原作探したりー8
禁とか。

ラノベも多いし。そんで第一期も多い。

それでも最近「面白い」と素直に喜べる物が見あたらない。

何かないかなあ～……。

お久しぶりで間違い無いですよね？

どうも、龍門です。

この先の話は考へてゐるのですが、そこに繋げる部分を考えるのが苦手の様で。悪戦苦闘。

てか、長い。『森神樹』に会つまで何話使つの！？

と、言つ事で此所からは小走り氣味で行きます。

とか言いながらも全然だけどねえ。

まあ、今回は少し慌ててしまつた感がありますね。

書いている本人が尋ねるのもなんですが、これ主人公どれ？

【森】『南』側。

光届かぬ【森】の中、浮かぶ様に紅い光が蠢く。

『…………ナトルト、気付いてるか？』
低い声が響く。

『ああ。近くだね。その近くに、セントさん達の匂いもある。共に居るみたいだ』

高めの声が響く。

四つの紅い光は静かに動く。
それは奇妙であり美しくもある。

『俺の嫌いな匂いを駄々漏れにしながら近づいて来る…………自殺志願者か？ それとも唯の肩か…………どつちだと想つへ』

『どうだどう……セントさんと一緒に時点で後者は無いんじやない？ でも、そう考えると前者も無いね。だって、強い魔力を感じる』
『成る程な…………まあ、姿を見れば解る事だ…………アルネリアはどうした？』

低い声が尋ねる。

『ああ…………いつものアレだよ』

『カツ！ 鼻と耳は何の為のモンだと思つてんだが……』
へ向かひや』

『了解』

紅い光はスワーと消える。

『…………殺すか否か…………遊んでやるよ

声だけが響き、静寂が訪れる。

【森】 『中央』

『…………『ノレば』

ナイトメアーは辺りを見渡しながら思わず呟いた。

「そんなに吃驚？」

その様子を見ながら笑みを浮かべるセン。

「……幻想的な」

広がる景色は先程とは差ほど違わない。

同じく樹が生え、草が生え、光が届かない。

だが、確実に違つと解る箇所がある。

「……何故光っている？」

【森】、と言つのか、周りが白い光で溢れている。
木々の葉が発光しているのか。地面の砂一つ一つが輝いているのか。

数え切れない程の小さな粒状の発光体が溢れている。

「『光の雨』^(ライト・レイン)の後だからね。確かに森の外でも降るでしょう？」

センは驚くナイトメアーを見ながら笑みを零し、同様に辺りを見渡す。

「これが『光の雨』？…………森の外でも確かに降りはするが、この様に落ちた後も光つてはいないぞ？」

『光の雨』

言葉通り。光輝く雨を指す。

晴れの日が続き、雨などが一週間以上降らない時、その雨は忽然と降り出す。

『不可思議な現象』の一つとして挙げられている。農民からは「天の恵み」と称され、人体についても悪影響は無い事から調査などは差ほど行われていない。

「そうなの？　『光の雨』が降った後はいつもこんな感じだよ」

「『光の雨』は地面に落ちれば直ぐに消え、葉に落ちても直ぐに消える。これも森特有なのか？」

降る。それは同じだ。過程は同じ。だが、矢張り違う。

「へえ、同じ『光の雨』でも違うんだね」「センは感心する様に頷く。

「…………まあ、私はその辺の専門的知識が無いから何とも言えないが、専門職が見たら発狂しながら喜ぶだろうな」「その姿を想像し、苦笑を浮かべながら歩き出す。

この【森】は未知だ。

それも宝に変換出来る未知だ。

知識的な宝。歴史的な宝。

与太話で済ませる事が出来ない。

『さつさと行くぞ。余り遅いと『見回り』が動く』

「見回り？」

ディガーの言つたクエスチョンワードに首を傾げる。

『決まった時間に森を徘徊して異物を排除する奴等だ。コイツ等は決められ、命令された事以外に考へる事も、行動する事も出来ない』

「それは危険なのか？」

『アイツ等の仕事は森の異物の排除って言つただろ？ 考えてみろや。この森での異物つて何だ？』

ナイトメアーの問いにバルデトが笑みを浮かべる。

「森の…………異物？ ……侵入者。詰まる所、私が」

『その通りだ。森の異物。つまりは侵入者。そして侵入者の定義は森の加護を受けていない物全てだ。奴等は話が出来る程の知能を持つていない。見つかれば即座に貴様の排除に動く。そうなれば、面倒な事になるからな』

ディガーは既にこの説明を言つ事すら億劫なのか、所々で欠伸をしている。

「お前の態度に些か腹立つが…………ん？ 待てよ。此所の掟で森に住まう物の事を言つてはいけないのでないのか？ 今思いつきり説明しているが」

「それは大丈夫。『見回り』自体も異物だから」

「ちゃんと説明してくれないか？ 全く解らないのだが」

現段階で、セン達はナイトメアーに詳しい説明が出来ない。

その為か、話が全て知っている体で話される。

全くの無知状態のナイトメアーにしては、首を傾げるだけでは足りない程に困惑してしまつ。

「まあ、色々省いた説明になっちゃうけど、要するに『見回り』も

実は異物で、誰かに何かによつて何かしらの事をされてる訳

「…………省いているのかどうなのか。まあ、その何たら言つてている所は森の辻に触れる部分だから説明出来ないのだろ?」

大体慣れてきたのか、頭を搔きながら溜息を吐く。

「うん。詳しい説明は後だね」

センは腰に手を当て、笑みを浮かべている。

「…………」

改めて。ナイトメアーは思つ。
この「少年」は何者だと?
純粹無垢なこの笑みは、到底血の臭いを知つてゐる人間の笑みではない。

「王」としての素質はあるのだろう。
現に初めて会つた時や戦闘中の彼は、まさしく「王」そのものだ。

だが、今の彼からは「少年」以外の何も感じない。

今此所で鎌を造り攻撃を仕掛けても一瞬で首を刎ねる事が出来そうな程に、彼は無防備だ。

だが、解つてゐる。

それは私を信用しているのではない。警戒する必要が無い程に、力量差があるからだ。

私が一瞬でも、鎌を造り出す為に魔力を手に集め出したものならば、彼含め一頭の狼も私の喉笛を食い千切るだろう。

泣き出したい程に嫌な状況だ。

今日は何だ？ 私を惨めにする日か？

此所まで来て何だが、矢張り私は何処かで何かの選択肢を間違え

て選択したのだろう。

まあ、所詮は過去だ。

悔やみもするし後悔もあるが、戻りたいとは思わない。

「さて、そろそろ向かわないとね。本当に『見回り』が現れたら100%と戦闘になっちゃうし、『見回り』相手だと本気出した所で無駄になるし」

セツが気になる事を言っているのだが、当然尋ねても答えてくれない事を知っている。

ナイトメアは知りたい欲を必死に押さえながら自身に言い聞かす。

後々だ。後々になれば。

『何を悶えている？ 気色悪い』

まるでゲテモノを見るかの様な目でナイトメアを見ながらディガーハが吐き捨てた。

「悶えている様に見えたのか？ そうか、そうか。どうやらお前の目は末期の様だ。素直にそこら辺の木の枝で目玉を抉りだした方が良いんじゃないのか？」

無表情で木の枝を指しながらナイトメアは歩き出す。

ディガーハナイトメアを睨みながら何かを言いそつになるが、その前に欠伸が口から出る。

『…………』

反論も次の罵声も言つ氣を失ったのか、何も言わずに歩き出す。

ディガーの後ろを歩くバルテトはそのやり取りを見ながら笑おつと/orするが、開きかけた口が止まる。

『……チツー!』

舌打ちが耳に届いたのか、ナイトメアが振り返りバルテトを見る。

「何だ？ 私が何かしたか？」

『……一応言つておく……ヤバイと思つたら逃げるか攻撃するかしろみつ。』

バルテトの口から出たその言葉は、ナイトメアの問いただす掠りもしない。

『……何を言つ……！？』

眉間に皺を寄せ、首を傾げようとしたその瞬間。

『招かれざる黒き女よ』

その声は響いた。

一瞬。声が聞こえた一瞬に、ナイトメアの膝は笑った。それと同時に心臓を、命を、全てを握られる感覚に陥る。

終わる。終わる。終わる。終わる。終わる。

本能が告げる。理性が諦める。

このままだと、死ぬ、と。

『未熟な王よ。捉えられぬ獣よ』

『『……？』』

その声に遅れて反応したのはセンヒトイガーだった。

そして直ぐさまセンは自身の指を噛んだ。

血が流れ出し、食い千切るのではと思つ程に。

「！？ 何をして……い、る
いきなりの行動にナイトメアーハは困惑するが、センの表情を見て
表情が強張る。

「…………まさか俺にまで掛けるとは、な」

その声は既に「少年」ではなく「王」。

目に浮かぶのは明らかに怒り。

『…………眠いから気付くのが遅れたか。どうやら『森神樹』グラウンドツリーは森に火が放たれるのを防げなかつた俺等に対しても『立腹らしい』

『眠たいから気付くのが遅れたつて、間抜け過ぎやしねえか？』
ディガーハの言い訳にバルデトが口角を上げ喜ぶ。

「ディガーハをからかうのは後にしろバルデト」

センは静かに命令する。

表情は先程の笑みとは打つて変わつての無表情。

『ああ、解つてる。解つてるぜ』

それ以上バルデトは何も言わない。

ナイトメアーハこの場の空氣を感じ取つていた。

先程の声、あれは明らかに異常だ。

声だけ。声だけで、私を殺そうとした。

向けられたのは殺氣ではない。唯々排除するだけのモノ。

殺意など微塵も込められていない言葉に、私は一瞬持つて行かれ

た。

センの突然の行動を見ていなければ、完全に墮ちていた。

一瞬だけ見た黄泉の世界。

ナイトメアーは額を流れる汗を拭う。

「い、今…………のは？」

「…………森の神、『森神樹』。どうやら、此方から向かわなくとも向いから出迎えてくれたらしい」

〔冗談を言わないセンが、この状況で笑みを作る。

『…………いつもならば、その口調に対して何か言う所だが、今回は些かいきなりでそして俺の勘に障つた。まさか俺等も一緒に捲き込むとはな。一瞬全てが弾け飛ぶかと思ったぞ』

ディガーモ笑みを作るが、その目はセン同様に怒りが灯っていた。

「この声が…………『森神樹』」

センとディガーハ会話を聞きながら、ナイトメアーはその名を口にする。

森の神と名に記す、この【森】そのもの。

「…………ハハツ…………規格外過ぎるだろ？」

勝てる勝てないの次元ではない。

楽に死ねるか苦しんで死ぬかの一択しかないではないか。

顔を片手で覆いながら、溜息を吐く。

自身の浅はかさと、今日死ぬかもしれないと言つ気持ちで一杯であつたナイトメアーは、気付くのに遅れた。

「…? メア…!」

センが叫んだ。

突然名前を呼ばれた事、この場で叫ぶとは思わなかつた人物が叫んだ事。

目まぐるしく変化する状況にナイトメアーの思考回路は完全に痺していた。

「ん? ! ! ! ? ?」

視界に入る。それは足下。

何故か光輝く足下。

既に汗と先程の気持ちは消え飛んでいた。

動け!

そう自分の足に対して命令を出すが、両脚は動かない。

パンッ!!

「クソが!!」

センが顔を歪め吐き捨てる。

この瞬間、ナイトメアーは一人と二頭の目の前で忽然と消えた。

『おい。お前は何番目だ?』

『……4番目』

『既に2番は死んでるし、3番は発狂したまま監禁されてるし。て
つ、事はお前が2番みたいなもんだな』

『……順番に何か興味無い』

『そりか? まあ、番号つつても、ちゃんと生きているのは4人しか
居ねえけどな』

『……じつでも良い』

『まあ、1番の顔見た事無いし。2番も顔知らないし。」
「ううん、確かにじつでも良いな』

『……』

『お、つこて無視か。まあ、良いや』

『…………』

『たじや、俺は行くぜ？ またな4番』

『…………次が在るか解らなーのー、「またな」？』

【森】『中央』

「うつ…………」

地面の冷たさを感じ、襲う身に覚えの無い頭痛に顔を歪める。

全身黒の女、ナイトメアーは何故か倒れていた。

先程までは立っていた。

いきなり倒れると言つ事は大差問題でもないし、有り得ない事で
もない。

だが、立つていた先程と倒れている今とでは決定的に違う。

「…………」、此所は？

頭痛が酷いのか、体を起こしながらも頭を押さえている。
眉間に険しい皺を寄せ、辺りを見渡す。

居ない。

「…………センや、狼は…………」

先程まで一緒に居た筈の一人と一頭が居ない。
何処かへ行つたのか？

記憶が混濁している。

何故倒れているのか自体が解らない。

この頭痛のせいか、上手く脳が考えを纏めてくれない。

「痛ッ！…………最悪な気分だ」

吐き捨てる。

頭痛のせいでもあるが、それ以前に何か、心底腹の立つ事をされ
た様な気がしてならない。

地面に手を付き、四つん這いの様な格好になり膝を地面に付けたまま上半身を完全に起こす。

一瞬目眩が襲つたが、気にせずに辺りを見渡す。

「さつきまで居た場所とは、違つ場所みたいだな」
一面木なのは変わらない。

だが、周りの木の大きさや枝、木の量が違う。

「…………私が移動したみたいだな」
センやディガー、バルデトが移動したのではなく、自分が移動したのだと此所で解る。

もし、あの場で倒れていたのならばきつと田が覚めるまで狼の頭や二頭が見張りで近くに居る筈だ。

それが居ないと言う事は、私がセン達に取つて予想外の手段で移動したと言う事。

追うタイミングも失う程に、一瞬で。

残念な事に私にはそんな一瞬で何処かに行ける様な力は持つてい
ない。

と、なるとこれは他の奴が私を移動させたと言う事。
しかも、無理矢理。セン達の目の前で。

「…………誘拐か？ それとも何か私がしたかな？」
口角を上げ、立ち上がる。

光が無い。

『光の雨』は此所には降つていないらしい。

動き出したいが、無闇矢鱈に動いた所でこの【森】の土地勘などない。

道に迷つて何かに出会いして、最悪死ぬ。

そんな格好悪い死に方は御免だな。

ナイトメアーは自分の体に異常が無いか確かめる為、足・腰・手・肩・首と動かして行く。

「…………どうやら、頭痛以外に異常はないらしいな」

今でも鈍く痛みが走る頭。

「さて、どうしたもの

『招かねざる黒き女よ』

「！？」

声。聞き覚えのある声。

倒れる前。確かに聞いた声。

その声を聞き、ナイトメアーの口は動いていた。

「…………『森神樹』」

名に森の神と記す、【森】そのもの。

『運命を知らぬ女よ。自滅を歩む女よ。欠落した女よ』

輝く。ナイトメアーの目の前。木が生い茂つていた筈の田の前には、木は無く。道が続いている。あんな道、在ったか？

まるで暗闇の中で差す光の様に。

何時の間にか現れた道の先が光輝いている。

「……誘つているのか？」

「」の演出は、確実に私を誘つている。

罠か？ それとも、友好的なまさかのサプライズか？
迂闊に動けない。

『来い。汝の価値。見定めてやろ』

挑発。

何時もならば引っかかる。安い挑発。

だが、頭痛のせいか。いきなりの出来事のせいか。今日のハード
さのせいか。

ナイトメアーはその安い挑発に歯ぎしりをした。

「上等だ……！」

ゆづくじと足を前に出し、歩き出す。

『来い。招かれざる黒き女よ』

ゲームって、面白いですよね。

遅いかもしれませんが最近ペソナにハマっています。

ゲームで冒険しない派なので、パッケージ見るだけだったんですけどね。

気がつくと店員が笑みを浮かべて袋に入ったゲームを渡してくれました。

薄くなつていく財布と言つのは矢張り悲しいものですね……。

さてさて、無駄話は切り上げ。

次回は少しでも早く投稿するよう努力します。

評価して下さる方や、お気に入りに登録してくれている方が増えて

いるので。

……頑張りますので見捨てないで下さい。

それでは、それでは。

P . S .

TR GUNの劇場版をDVDで観た。
あの世界観が好きなんですよねえ。

少し早い投稿。

頑張った俺！

ちゃんと書けてるかは解りませんがね。

早く進めたいのに中々。

今回、少しだけバルデトが格好いい事言っています。
狼なのにな。

【森】『中央』

一人と二頭、特に一人は苦虫を噛んだ様な表情を浮かべていた。

「やつてくれたな…………！」
吐き捨てる。

表情は歳不相応な憤怒。

まるで親の敵を見つけた様な、全ての悪の根源を見つけた様な。

「…………ディガー、バルデト。今からメアの…………『森神樹』の場所まで行くぞ」

それだけ言い、センは歩き出す。

が、

『んああ？ 何でだ？』
バルデトが尋ねる。

この問いは、場の空氣に相応しくない。

案の定センは歩を止める。

「…………バルデト。今…………なんて言つた？」

『ハツキリ言つちまえば、テメエが氣を緩めていた事以外に原因が見つからないんだが?』

「…………んああ?」

『なんだ？ 逆ギレか？ 所詮人間の女が『森神樹』に連れて行かれただけの話だろ？ 何をそこまでキレる?』

センはゆっくりとバルデトに近づく。

殺氣をばらまき、見ただけで冷静さを失つていて解る。

「バルデト…………それ以上喋るな」

『んああ？ 「王」を嫌うお前が、今まで「王」の様な命令を出しているぞ？ お怒りの時は「王」を利用するのか？ 僕等森の住まう物に対してではなく、余所者のしかも人間如きに「王」を利用するのか？ ……少し都合が良過ぎやしねえか?』

センの威圧にも屈せず、バルデトは口を開く。それと同時に脚が黒い靄に包まれる。

戦闘態勢。何時でも殺れると言つ現れ。

『止める、バルデト』

すかさずティガーが止めに入る。

『俺は別に止めても良いんだぜ？ だがよお…………「王」様がどう

やら殺る気満々らしい』

『タリ……と、笑みを作る。

「…………バルデト、俺を「王」と……呼ぶな
俯き、肩を振るわせながら命令する。

『――コアンスの問題だろ? 王と「王」、何処が違う? 俺は唯、
何時も通りに「王」って呼んでいるだけだぜ?』

「バルデトッツ! ! !

叫ぶ。センの表情は先程以上に歪んでいる。

『…………中途半端なんだよ。あの女を此所まで連れて来た事自体は、
テメエがテメエで決めてやつた事だ。だがな……予想外の事起きて
て「王」を利用してようなんて下らねえ事してんじゃねえよッツ!!
!』

「! ?

センは言葉を失う。

『バルデト』

ディガーがバルデトの名だけを呼び、止める。が、バルデトは止
まらない。

『何で其処までの女に肩入れするか知ったこっちゃねえが、狼狽
えてどうする? ……格好悪い姿見せるんじやねえよ。言つただ
ろ? テメエが「王」になろうが、ならないだろうが、俺はテメエ
を手助けするつて。それはテメエが「王」以外の自分の価値を見い
だそうとしているからだ。……だがな、テメエのミスで起きた出
来事に「王」を利用するのは随分と勝手が違うだろうが? んああ

！？』

バルデトは叫ぶ。

……………』

その叫びを聞き、ディガーはバルデトを止めるのを止める。バルデトの叫びは本心であり、代弁であるからだ。

「王」しか認めないのならば、「王」を嫌うセンになど従わない。だが、現にこうして「少年」のセンに従っている。

センは認めてはいないが、【森】の中ではセンは見習いの「王」であり、時期「王」であるのだ。

だが、そんな決め事を取つ払つてお前に従つと、少なくともこの場に居る二頭は誓つている。

その誓いをその張本人がぶち壊そうとしている。バルデトはそれが腹立たしくてならなかつた。

『…………今此所で決める。テメエは「王」としてあの女に肩入れしているのか。それとも「セン」として肩入れしているのか。それによつて、俺等の態度が変わるぞ？』

「王」として肩入れし、ディガー達に命令するのか。
「セン」として肩入れし、ディガー達にお願いするのか。

何故、いきなりこんな状況になつたのか。

人間を助ける。

そこが問題なのである。

これが人間ではなく、【森】に住まつ物なのならば、この様な問答をしなくても良かつた。

同胞の為とバルデトも何も言わずに素直に「王」になつてゐるセ
ンに従う。

が、人間。つまりは敵。その人間を助けるとなると、センにもそ
れ相応に決意してもらわなければならぬ。

それは「王」として人間であるナイトメアーを利用するのか、「
セン」として人間であるナイトメアーを助けるのか。

後者を選んだのならば、何かしらの面倒事が起るだらう。
この選択を後悔する程の。

だからこそ、今此所で決めて貰わないと困るのだ。
ナイトメアーの事に関してだけは決めて貰わなければ。

『テメエは「王」として行くのか。「セン」として行くのか。……
先に言つておぐぞ？あの女を「王」として護るのは不可能だ。
だが、「セン」としても役不足……テメエはどうちでの女護る
んだ？』

センの表情から怒りが引いていく。

静かに、静かな、「少年」の表情になつていく。

その表情を見ながら、ディガードは溜息を吐いた。
バルデト、お前も随分優しいな、と。

この問答は別に今此所で決めなくとも良いものだ。
早いに越した事はなのだが、それでも今までなくて良い。

先を見てバルデトが此所で口を開いた。
コイツなりの優しさ。

戦いの時は「王」になれば良い。
日常では「セン」のままで良い。

どっち着かずどっちにも屬すで良い。

だが、あの人間の女。

義理も何もなく、理由も何もない。此方の利益に何もならない女の女を護る事に関してだけは、どちらかを選ばなくてはならない。

「俺は

「

……解つていろや。

お前がどっちを選ぶかな？」

だがな、セン。

我は、お前を「王」にするつもりだ。

永遠に「王」にするつもりだ。

」の先面倒で、最悪な事が起きたら。

だから、今だけはその答えを選ばせいやる。

あの女の隣だけは、お前の本心で居れば良い。

「 「セン」としてメアを護る」

我は、お前に付き従うだけの話。

これはお前が完全な「王」になるのが遅れるだけの話。

センの答えを聞き、バルテトが笑みを浮かべる。

『ケツ！あの女に惚れたのか？』

「ん？」

……それだけ阻止させて貰つ。

【森】『中央

ナイトメアは忽然と現れた道を歩いていた。

まるで木々が除けたかの様に出来上がったその道。獸道の様な道ではなく、人工的な道が続いている。

「…………嫌がらせか?」

歩きながら、ナイトメアは呟いた。

彼女は歩き続けているのだ。

誘いに乗り、目の前で輝く光。其処に居るであろう『森神樹』。が、歩けど歩けど距離が縮まらない。

辺りの景色は変わっている。

その筈なのだが、一向に近づかない。

「来いつて言って、これは無いだろつ…………それにしても、風邪でも引いたか？ 鼻が詰まっている様だ」

愚痴を零し、眉間に険しい皺を寄せ鼻を擦る。

新手の嫌がらせならば、凄まじいダメージを喰らわしているだろう。

狼達と共に兵士達相手に躊躇し、『中央』に入るまで休憩無しで走り、田まぐるしく変わる展開に混乱し、そして何故か頭痛。

ハッキリ言ってコンディションは最悪だ。

肉体的なモノと精神的なモノを満遍なく喰らっている。

今すぐでも【森】を飛び出し、ふかふかのベッドが備わっている宿で寝たい気分な彼女だが、現在地が良く解らない上にどうやって【森】を出るかすらも解らない。

「…………精神的な攻撃」

両腕をブランと、力無く下げる姿勢ながら唯々歩き続ける。

「本当に、どうなつ……………？」

突然ナイトメアーは固まつた。

固まりながら、口を何度もパクパクと動かす。
そして、ゆっくりと首に手を持つて行く。

「……………！」

口を大きく開き、何かを叫ぶ。
が、声は出でいない。

「……………？」

目を見開き、必死に叫ぶ。いや、實際声が出ていない為叫んでいる様に見えるだけだ。

『語る。不安を、憎しみを、怒りを、独りを、悲しさを』
声が響く。その声は彼女の、ナイトメアーの声だった。

「……………？」

突然響いた自分の声。

だが、彼女が喋つた訳ではない。今の彼女は声が出せないのだから。

では、誰が？

ナイトメアーは困惑しながらも考えた。だが、直ぐに答えは出る。
此所に私を拉致したのは誰だ？

『森神樹』ツツツ！…！

『声が出ない事は恐怖だ。自分の言いたい事が伝わらない。それは

何よりも恐怖だ』

響く彼女の声は淡々と続いている。

ナイトメアーは辺りを睨み付ける様に見渡す。が、姿などない。見えるのは木や草だけ。

それでも必死に辺りを見渡し、捗すナイトメアーの視界が唐突に閉ざされた。

「！？」

突然、見ていた筈の【森】の景色が消えた。

目を瞑ってしまったのか？

何かに目隠しされてしまったのか？

『見る。空を、森を、建物を、者を、表情を』

彼女の声が響く。

が、ナイトメアーはまた自分の声が響いた事よりも、今の自分の現状で一杯一杯だった。

突然と消えた視界。

何も見えない。
何も映らない。

苛つきを吐き出す為の声をも出ない。
募り出す。それは肥大していく。

『真っ暗。何も見えない。笑っている？泣いている？怒っている？だが、それを聞きたくとも声が出ない』

響く彼女の声は淡々と続ける。

既に、ナイトメアーは身動きを完全に封じられていた。
喋れない程度なら、相手に伝えたい事が中々伝えられない程度だ
ろう。

だが、見えないと言つるのはその次元を超えている。

今誰かに襲われたりでもしたら、一瞬だ。
心の目？笑わせるな。この二つの目が無ければ何も出来ないに
決まっている。

見えないと言つ状況を考えた事が無い。
対策などある筈もない。

目が見えなければ戦わない。これに限る。
けれども今はそんな事を言つていられない。現に見えないのだか
ら。

嫌な汗が流れる。
辺りに誰も居ないのは感覚で分かる。
肌で感じる空気があるだけマシ。

そう、思つた瞬間に消える。

「！？」

いきなり彼女は両腕を前に突き出し、そして力無く地面に崩れた。

両手で自分の顔を触る。

が、彼女の表情には恐怖しか浮かんでいない。

『感じる。風を、熱を、冷たさを、痛みを、悦を』

彼女ではない彼女の声が響く。

失った。それは触覚。

触れている筈の自分の肌が解らない。地面の冷たさが解らない。

空気の生ぬるさが解らない。

自分が立っているのか座っているのか、それすらも解らない。

見えない事が一層にその恐怖を煽る。

『生きているのか？ 全てのモノを感じない自分は、生きているのか？ 自身の熱すらも解らない。これは生きているのか？』

響く彼女の声は淡々と続ける。

その声の通り、ナイトメアーは生きている心地がしなかった。唯一残る音で、今此所に自分が居ると解る。

何も感じない中、自分で自分を抱きしめる。

抱きしめているかも解らない。彼女の心は不安定に揺れていた。

怖い。

感覚を奪われている事もそうだが、彼女には聴こえる声が何よりも怖かった。

全てを見透かしたかの様に響く声。

私の声で。まるで私を言つ様に。

ナイトメアーの体が震え出す。

が、今の彼女にはそれすらも感じられない。

「…………

出ない声。だが、叫ぶ。

必死に叫んでいる様に見えるその姿は、今までの彼女の姿からは見当も付かない姿。

日常で襲つて来る恐怖に怯える様な、無垢な子の様な姿。
死を感じる彼女の日常では、既に感じる事が出来ないモノ。
失つていた筈の何かが蘇る。

それは何か？

何時の間にか、ナイトメアーの目から涙が流れ出していた。

「…………

何度も。何度も。出ない声を振り絞ろつと叫ぶ。

『…………』

「…………

幼い子の声が突然に聞こえる。

『だれもいないの？ ひとりなの？ どうして？ ねえ、どうして？』

その声を聞き、ナイトメアーの顔は青むらむらいく。
聞き覚えのある声。

『わたしはいらっしゃらないの? どうして? わたし、がんばってる
のに?』

その幼い声は、まるで助けを求める様に、か弱い声で誰かに尋ね
ている。

ナイトメアーはその声を聞きながら、首を横に振った。
それは否定。

『なんでみんなわたしをキライになるの? わたしなにもしてない
のに』

止める……。

『どうしてそんな目でわたしを見るの? わたしわるい子じゃない
の?』

止める……! —

『私は、何もしていない。ただ、欲しかつただけなの』

止める! —

『奪う気などない。私に無いモノが羨ましいだけなんだ』

止めてくれ……。

『結局、満たさうとしても叶ひませだ』

止め、て。

『私は悪夢…………苦しめるだけの存在』

頼む…………止めてくれ。

『ねえ…………幸せって、何だ?』

声が響く。

最初は幼く、どんどんと彼女の声になつていいく。そして、彼女の声は全て、何かの代弁の様に響く。

ナイトメアーは、見上げながら涙を流していた。

顔を歪め、まるで聞きたくない本心から逃げるかの様に首を横に振る。

『何を恐れる?』

声が響く。まさしくこの現状を引き起こす主、『森神樹』の声。

『汝の思い、何故封じ込める?』

『孤独を満たさうと振るつ刃。その中で汝は何を見いだせた?』

『何故、本心を押し込み偽りを氣取り求める?』

尋ねる。

解つているかの様に尋ねる。

『 答えてみる』

見上げながら、ナイトメアーは未だ首を横に振っていた。
何かに逃げようと。何かを否定しようと。

『 答えてみる』

自身を抱く腕に力を籠める。

止めてくれ、と心で叫び続ける。

これ以上、私を乱さないで。

止めて。止めて。止めて。止めて。止めて。ヤメテ。止めて。

『 答えて』

「 その必要はないよ」

『 森神樹』 の声を遮り、新たな声が響く。

「 今此所での答えは、嘘にもなる。無理に出せなくとも良くて
その声は優しく響く。」

……誰？

「 今は、眠つても大丈夫」

……独りは、嫌。

「俺が、側に居るよ。涙を止めて、ゆっくりと眠りな」
声の主は、ナイトメアーの肩に優しく手を乗せる。

感覚が無い筈のナイトメアーの肩は、一瞬ピクッと震える。
が、直ぐにその震えが消える。

「…………大丈夫だから」

見えない筈の目が、映し出す。

ぼんやりと、霧がかかったかの様に不確かだが。

「…………セン…………」

強張った表情が、ゆっくりと緩み、小さな笑みを作る。

「オヤスミ」

ナイトメアーはゆっくりと瞼を閉じる。

その瞬間、糸が切れたかの様に力無く倒れる。が、センがナイト
メアーの肩を抱く様に支える。

『何故、邪魔をした?』

ゆっくりとナイトメアーをその場に寝かせる。
頬に残る涙を拭い、センは立ち上がる。

「此所からは俺とアンタとの話だ」

『もう一度問おう。何故、邪魔をした?』

「俺は少し驚いている。アンタは、何時から女を泣かせる様な趣味

を持った？」

ヤンは一步、前へ出る。

「今日は、少しやり過ぎた様だな……俺は、随分と久しぶりにアンタに怒りを抱いている」

また一步。

「さあ、姿を見せへ

一步。

「始めよ。俺とアンタで

一步。

「久しぶりの口喧嘩を……」

いやあ～突然だよね。

「王」と「セン」の件は必要だと思いましたので。

もつ少し話進めないと何で「王」を嫌がっているのか?とかが解りませんので、今回の件は頭の隅に置く程度で。

ナイトメアーの描写はですねえ～、これだけ読んでも「は?」なんですね。

彼女の本性と言つのはまだ完全に出てませんから。これも頭の隅に置いておく的な感じで。

……もつ頭の隅が隅じやなくなつていいく感じがしますね。

次回は「セン、口喧嘩する」の一本です。

いや、そんなサブタイではないですよ。

それでは、それでは。

P . S .

キュンと来るような女性を書けません。
魅力的とでも言つのか……。

ムカツクおっせんは書けるのに……。

お久しぶりで良いですか?
どうも、龍門です。

本当はもうひと早く書き、投稿するつもりでした。
ですが、『森神樹』とのやり取りを何度も書き直して……。

まあ、言い訳は後書きも。それでは。

【森】『北』付近

巨木が薙ぎ倒され、数メートル範囲内に草木が無く、地面が抉れている。

その真ん中。

白い、白い獣が一頭鎮座していた。

白い鬚。白い尻尾。蹄までも白い。

俯き、静かに、動かず。

白い獣の額には、1メートル強程の金色の角が一本生えている。角は螺旋状に捻れ、暗闇の中でも輝いているかの様に見える。

白い獣は動かず、静かに俯いたまま、瞼を開けた。現れた瞳も金色に輝いている。

『…………久しい香りだ』

低い声。

白い獣はゆっくりと立ち上がり、辺りを見渡す。

『『中央』、か……成る程。あの糞餓鬼が連れて来たのだな』

白い獣は歩き出す。

『糞餓鬼の好奇心は反吐が出る程嫌いだが、たまには良い事をするではないか』

白い獣は頭を振る。う。

『…………行こうとするか』

ゆつくりと歩き、白い獣は【森】深くへとその白い姿を消す。
そして、抉れた地面。

白い獣が鎮座していた場を中心、螺旋状に抉れていた。
大量的の血と肉片を残し。

【森】『中央』

「なつ……」

センは口を開き、阿呆な表情を浮かべていた。

『何を呆けている?』

「いや、ちょっと待てよ。俺はアンタと罵声飛び交う言い合いを想定して此所に来たんだが、何でこうもあっさりと」
センは眉間に指を当て、考える様に唸り出す。

先程まで、今にも殺り合ひそつた雰囲気を醸し出していた筈なのだが、何故こうなったか。

理由としては、『森神樹』^{グランドツリー}が言つた言葉。

『認めよう』

と、結構簡単に言つてのけたのが原因。

ぶつちやけると、呆氣ない。

ナイトメアの様子を見るからに、精神的攻撃、トラウマに鋭利な刃を突き刺した様なエグい方法を取つたに違いない。

それをしておいて、呆氣なくナイトメアを受け入れると言つた。メリットの無い爆弾の様な者を、『森神樹』が許可した。

その為、勘ぐってしまう。

何か、見たのではないか?と。

『森神樹』が有益と考える何かが、メアにはあるのでは?

「……何を、見た?」

『汝は何時から他のモノの過去を知りたがる様になつた?』

「……いや、教えてくれなくとも良い。唯……その過去はアンタからしてはどんな感じだつた?」

その問いに、遅れて『森神樹』が答える。

『醜惡』

「!?」

『一筋の希望も見えず、生きる意味を探す為に死ぬ。束縛から逃れても見続ける悪夢に血の首を絞めて死ぬ。一言で言えば醜惡。他の言い方を探すのであれば……』

物語の粗筋を説明するかの様に簡単に言つてのけた。

「……そう、か

それ以外の言葉が見つからない。

『では、始めようか』

不意に、そして突然に『森神樹』は言った。

「何を?」

怪訝するかの様な目で尋ねる。

セン本人は、ナイトメアーを安全な所に連れて行きたいと言つ気持ちがある。

それに、加護を受けられるのならばこれ以上の問答など不要だ。

『決まつていいだろ?。汝と我的 契約だ』

「! ! ?」

契約。その言葉にセンは怒りを滲ませた表情で虚空を睨んだ。

「巫山戯るなよ……ツツ! 契約だと! ?」

声を張り上げる。

『至極当然な流れだ。黒き女に加護を与える義理は何も無い。その者は厄災以外の何物でもない。それを受け入れるなら、対価を払うべきではないか?』

「……ツツ! ?」

奥歯を噛み締める。

上手過ぎた。

『森神樹』が、そう簡単に利益にならない者に加護など与える筈がなかつた。

何時爆発するか解らないモノを一つ返事で抱える程、優しい訳でもない。

だが、全て蹴つて否定するのではなく、不利益なモノを抱える以上利益を求めた。

それが、契約。

契約。この【森】では所謂呪いの様なモノだ。
結べば一生をその契約に縛られ終わる。

この【森】で契約を結んでいる物は少なからず居る。
先程の話でも出た、『見回り』がその一つだ。

『それ相応の対価。結ぶか否か 選ばせてやひつ』

選択はさせてやる。言い方はそうだが、実際に選ぶ権利は無いに等しい。

断れば、メアは此所で殺されるだろう。
しかもだ。既にセンは言つてしまつて居る。

「セン」として、と。

ディガーやバルデトの前で言つた宣言。

もし此所で断れば、その言葉すらも嘘になる。
そうなつてしまえば、信頼など消えて無くなる。

裏切る事など出来ない。

最初つから逃げ道など無い。

『森神樹』はそれを踏まえてこの様に言つたのだ。

飽く迄選ばせた、と。

お前が言つたのだから一言はないだろ、と。

「クソガツ…………」

吐き捨てるその表情は怒りに染まり、彼の「少年」と言つ部分を完全に消していた。

いつも言つ勝負でセンが『森神樹』に勝てた事は一度も無い。センの意見が通る時は、『森神樹』が先を見通して折れる事が多い。

今回、強行に出てきた『森神樹』を納得させる程の説明は出来ない。元より無理を言つているのはセンだ。

何かの条件を持ち出されるだけならば、覚悟の内だ。だが、契約まで持ち出されるとは思つて居なかつた。

互いに縛りかねない諸刃の剣を。

『選べ』

一言言ひ放つ。

猶予など無い。

今此所で、直ぐさま選べ。

女の首を絞め殺すか？

自分を犠牲にして女を助けるか？

もしくは、第三の道でも見つけるか？

『選べ』

俯く。

必死に逃げ道を考える。

逃げ道など、言つていて格好悪いかもしないが、そう易々と領
ける程に契約は甘くない。ましては、その内容が易々と予測出来る
のだから。

『格好悪いぜ?』

不意に、声が響く。

「…………バルデト」

声の方を向き、その獣の名を呼ぶ。

『セン。悩む必要があるなら其処の女など殺せ。その程度なら無意
味だ』

もう一つ、違う声が響く。

「ディガー…………」

ディガーはセンの横に立ちながら見上げる。

『元より何かしらの枷を嵌められる事は予測済みだ。例え、契約の
内容がお前に対しても不利であろうとも、此所で頷かなければ、あの女に道は無い』

バルデトもセンの横に立ち、虚空を見つめる。

『何の為の俺の説教だつづの。…………無駄にすんなや』

センは一頭の言葉を聞き、拳を強く握る。

「…………やうだな…………そつだよ、ね」

「少年」が表に現れ、小さく笑みを作る。

「上等！ 乗つてやるッ……！」

『フツ』

『んじゅ！ 姿見せましょうか！』

ディガーハ笑い、バルデトが叫ぶ。

その瞬間、バルデトの紅い眼から紅が消え、双眼共に白く塗り潰される。

白い双眼で虚空を睨み付けた時、目の前が歪む。

捻れる様に、割れる様に、潰される様に。

そして、まるで鏡が割れるかの様に目の前の景色が消え、現れる。

『汝と我との契約を始める』

巨木。

堂々と、一本の巨木。

威厳を醸しだし、その樹を見た者を威圧するその姿。

薄く発光し、鮮やかな緑を蓄え、その巨木は現れた。

『森神樹』

名にて、【森】の神と付いた統べ、住まう物。

『異論は無いな？』

「無論

『契約を交わす』

』

『ガランド大帝国』 南西『ヴァジュラメイス』 内

煉瓦で出来た建物が多く、大きな時計台が聳える比較的大きな街、

『ヴァジュラメイス』

商人達の多くが此所を通り、街は年中賑わっている。

出店の明かりが輝き、モダンチックな街をより一層引き立てる。

飴菓子を持つ子供達が笑みを浮かべながら走り、出店の親爺が叫ぶ。

カツプルの二人がお揃いの指輪を買い、頬を赤らめる。

大きなジョッキを持ち、高笑いする冒険家達。

街は盛大に、そしていつも通りに賑わっている。

そんな明かりに灯された表街の裏。
出店の明かりが届かず、暗い裏街。

酔いつぶれた男が酒瓶を抱き地面に寝転び。

野良犬がゴミ箱の生ゴミを漁り。

黒ずくめの男が家からゆつくりと出て何処かに走つて行く。

暗い裏街。

その道の真ん中、ゴミ箱を荒らす野良犬を見ながら立ち止まる黒いロープを纏つた人。

「グルウ ウウウウウウ……」

野良犬はその目線に気付き、唸り威嚇する。

ロープの人はゆつくりと前を向く。
其処に複数の男達がやつて來た。

皆それぞれ腰に剣などを下げ、いかにもな雰囲気を醸し出している。

その男達の集団の一人、真ん中を歩く男がロープの人には話しかける。

「ヴァジュラメイスの酒は？」

「…………不味くて飲めたもんじゃない」

「んああ！？」

その返答に男は眉間に皺を寄せ、腰に下げていた剣の柄を握る。

「フフ、冗談ですので。ヴァジュラメイスの酒は大陸一の娯楽……
でしょ？」

ロープの人はクスクスと笑う。

男は柄を握つたまま尋ねる。

「…………随分若えな、しかも女か？」

「疑つてているので？」

「いや…………ああ、そうだな。疑つてる」

そう男が言い、後ろに居る他の男達も剣なり槍なりを構えようとする。

「…………では、これを」

ロープの女はゆっくつと右腕を前に出す。

一瞬男達は身構えたが、女の右手の人差し指で光る銀色の指輪を見て柄から手を離す。

「成る程な。スマンな、疑つて
男は頭を豪快に搔く。

「いえいえ、必然的ですでの。疑わずにあれこれ言つ様でしたのなら、この依頼は無かつた事に致しまして、刺客を数名口封じの為に放つていた所でしたので」

せりりと背筋が凍る事を言つてのける。

「…………まあ、良いや」

「では、今から簡潔に説明致しますので」
そう言いながら女は足下に置いてある小さな袋を持ち上げ、男に差し出す。

「これは？」

「支援品…………と、でも言いましょうか、詰まる所差し上げると言つ事ですので」

男は怪訝しながらもその袋を受け取り、開けて中身を覗き込む。

「…………こりゃあ」

田を見開き、小さく呟く。

男の後ろから他の男達が袋の中身を覗き込み、その中に入っている物を見て驚き小さな声で話し始める。
男は袋を覗いたまま尋ねる。

「ランクは？」

「ひです」

「上等なもんだな。しかも三つも…………雇い主はそれ程俺等に期待してくれていいのか？」

男は口角を吊り上げ、袋の中から入っている物を取り出す。

袋の中から現れたのは、黒い指輪。

宝石が黒いのではなく、指輪全体が黒く、宝石など嵌められていない。

「それ以上ランクを上げてしまふと、足が付いてしまつ危険性がありましたので」

女は少し申し訳なさそうに説明する。

が、男は指輪を眺めながら笑みを浮かべている。

「いやいや、十分上等なもんじゃねえか」

「…………その指輪の力は『器産^{キハツ}』と言いまして、武器を産み出す『リミテッドマジック^{リミテッドマジック}』有限魔法^{リミテッドマジック}』です。十一分に力を發揮して頂きたいと思いますので」

「成る程な。その期待に応えるとしようじやねえか」

男は指輪を袋に戻す。

『力の欠片^{アトワレインクス}』により機能した『有限魔法』はFからSに分けられる。

F、Eは一般的に出回る安い物。

D、Cは余り出回らぬ、能力的にも価値がある。

B、Aは国の所有物となり、勝手に扱う事、売る事を禁止し、破つた者は処刑される。

Sはまず出回る事はなく、既に一種の宝具までと言われている。

このランク付けの基準は「破壊力」「扱い易さ」「稀少」で分けられている。

その為、ランクが上がれば上がる程、強く、使い安く、稀少価値があるのだ。

今男達が貰つた『有限魔法』のランクはC。十分に戦力と成る代物だ。

男達の浮かれようも頷ける。

「それでは、開始は一週間後ですでの

「了解だ。俺等を囲いたく成る程の成果を出してやるよ」

男は上機嫌に笑う。

「…………楽しみにしておりますので」

「おうおう、しててくれや。さて、野郎共、今から呑み明かしに行
こうじゃねえか」

男は振り返り、男達に向かって言ひ。

男達はその言葉を待つていましたと拳を擧げる。
そしてゾロゾロと歩き出す。

ふと、男達は立ち止まり振り返る。

「おう、アンタもどうだ？ ヴァジュラメイスの酒で宴会だ。参加
するか？」

女はゆっくりと首を横に振る。

「素敵なお誘いなのですが、残念な事に私はお酒が飲めませんので

「そうか、そうか。それじゃ、報告を期待してくれ」
それだけ言つて男は振り返らずに明るい表街に消える。

見えなくなるまで男を見続け、誰も居ないと確認すると女は呟いた。
「……あんな不味い酒、飲める訳ないので」

その瞬間、女は糸が切れたかの様にその場に倒れる。

「グルウウウウウ…………」

まだ居たのか、野良犬が倒れた女を睨みながら威嚇し続いている。

その時、女の右手人差し指に嵌つていて銀色の指輪が突然割れる。割れたのと同時に、女の右手が独りでに燃え出す。

「ガウツ！ ガウツ！！」

野良犬はその火を見て吠え出す。

火は少しずつ大きく成つて行き、倒れる女の体を完全に包み込む。黒いロープは灰に変わり、女の皮膚が溶け、女の肉が露出する。女の首筋には「〇二一五」と謎の数字が刻まれている。

ふと、女の左手の人差し指が光る。

赤い、赤い火の中、黒い、黒い宝石すらも嵌められていない指輪。同じ、同じ指輪。

あの男達に渡したのと同じ指輪が

……。

はい。後書きと書いて言い訳と読む場です。

今回の『森神樹』とセンのやり取り。

最初はセンが臭い事を言つてOK貰う的な感じ。

次はナイトメアーは自分で自分の意見を言う感じ。

次はセンが『森神樹』との戦闘の末認めさせるな感じ。

……いやいや。

と、言つ事で契約と言つある意味逃げを使いました。
まあ、そのお陰でなんとか次へ行けると思いますね。

ナイトメアーをその場で直ぐに認めなかつたのには、彼女の抱えて
いる物全てが一気に書ける程薄くないからです。
ですので、あのナイトメアーが倒れる前のアレ何?的に思われると
思いますが、片隅に……。

さて、言い訳は此所までに致しまして。

やつと動きましたね。はい。まあ、微々たるものですが!!

もつと白い歎を書きたい。まあ、既に何かは気付いていると思いま
すがね!!

次こそは早く投稿します!……と、思います。

それでは、それでは。

お久しぶりなのでしょうか？龍門です。

いやはや、卒業シーズン。

毎年訪れるモノですが、余り好きではないですね。

もう、一生出会う事のない人も居るだろ？

さて、話を変えまして、今回は今まで一番長いです。
その割には進んでいません。

戦闘シーンを書きたいが、入れる場所なんて無い。
話してばっかり！！

Idea · Idea · Idea · His idea?

此所は？

『何処だろうね』

私は？

『誰だろうね』

お前は？

『なんだろうね』

私は死んだのか？

『どうだろうね』

問答。ちゃんと喋れていのつかすら解らない。

そこに私が居るのか、側に誰か居るのかすらも解らない。

暗いのか、明るいのか。
狭いのか、広いのか。
大きいのか、小さいのか。

此所は何処だ？

『さあ、記憶に無いなら知らない場所。思い出せないのなら知っていた場所。名前を知らないなら、知っていても無駄な場所』

お前は？

『名前？ 性別？ 容姿？』

……名前だ。

『さあ、仰仰しい名前か。弱々しい名前か。それとも可愛らしい？ 傷げ？ どれでも構わないけど、知らないモノは知らないままの方が幸せだよ？ 知つて得するのは誰かの好みと嫌いな物ぐらいじゃないかな？』

要は答えたくないって事だろ？

『それは違うね。まず、名前を尋ねる時点で場違いなんだよ。此所は互いに名乗り、お辞儀をする所ではないからね』

その口ぶりからすると、お前は此所を知っているのか？

『さあ、どうだろうね。知つているかもしないし、知らないかもしない。知つても言わないかもしないし、言いたくても言えないかもしない』

凄まじく無駄な問答をしている気がするが？

『奇遇だね。同じ事を今思つたよ』

……で、私は何故此所に居る？

『その問いは此所が何処かによるね。天国か地獄か。現実か幻想か。
もしくはそれ以外か』

お前は何も知らないのか？ それとも知つてているが言わないのか？

『せうだね………… それじゃあ、一言だけ』

『まだ、早いよ』

「……？」

【森】……。

草木が生い茂つてゐる。

背中が少し冷たい。

横になつてゐるらしい。

首だけを動かし、辺りを見渡す。
生き物の気配はない。

だが、【森】だろう。

「……私は、何をしていた？」「記憶があやふやだ。

セント、狼一頭。

『森神樹』

の声を聞いた。

「……あの後、私はどうなった？」

何か、『森神樹』と話した気がするがそこの記憶がもの凄くあやふやだ。

思い出せない。何を思い出せば良いかすらも解らない。根本から記憶を持つて行かれた様な、不快な感覚だ。

だが、思い出せなくとも解る事はある。

……私が気を失ったと言う事だ。
何分、何時間、もしかしたら何日。
そんな時間を無防備に私は過ごした。

上半身だけ起こし、ナイトメアは自分の左手首を思いつきり握つた。

悔しい。

此所は敵地だ。

そんな場所で、気を失うだと？

無謀。笑える話だ。

何も出来ずに死ぬ所だった……。

このまま目を覚ますのが遅ければ、もしかしたら……いや、確実に死んでいただろう。

何だ。今私は。

……何も出来ていない。

此所に来たのは無謀だったか？

もつと自分の力量を極めてからの方が良かったか？

「…………クソッ」

苛立ちが募る。

自分の弱さに腹が立つ。

今の実力でも、十分に戦えると生きて行けると思つていた。

だが、場所が変われば相手が変われば。
気がつけば死に近い負けを味わつていて。

相手が強過ぎるなどと言つのは言ひ切に過ぎない。

「不甲斐なさ過ぎるだろ…………ッ！――」

吐き捨てる。

どうして、どうしてッ！――

あの部隊長の男と戦った時、最初から本気で行かなかつた！
どうして、狼共を見て直ぐに負けると悟つた！！

浮かぶのは今までの自分の不甲斐なさ。
それが限界を超えて溢れ出す。

何故ッ！ 何故ッ！

死ぬ事が怖いのか！？

死ぬより生きる恥を選んだのかッ！！

生きていればどうにかなる！？

此所まで自分の不甲斐なさを突き付けられ、何をどう糧にすれば
良い！？

生きていれば、と言つ彼女の信条が崩れて行く。

彼女は強者に会つのが早過ぎたのだ。

一気に相手のレベルが上がり、置いて行かれる。

強者に出会つた事に喜ぶが、その反面自分の弱さを悔いる。
面と向かつて立つだけで、相手との力量差が解るのは戦う者と
しては屈辱だ。

勝てない。絶対。

そう過ぎる考えをねじ伏せ、何とか彼女は立つていた。
だが、流石に今回は立ち上がれない。

気付けば氣を失っていた。

何故氣を失つたか解らない。

しかも此所は敵地。

これだけのミスが連発すれば、流石の彼女でも立てない。

彼女のプライドはズタボロに裂かれ、今にも全てを繫ぎ止める何
かが千切れる。

「クソが……」

涙は出ない。が、その分自分への苛立ちが口から零れる。

「随分荒れていますね」

「！？ 誰だッ！？！」

突然自分へ向けられたであろう声に対し、叫ぶ。

すると、彼女の向いていた方の【森】の闇から、白いローブが現れる。

「脅かせてしましましたか？ それは失礼。…………殺氣を抑えてくれませんか？ 今の貴女の殺氣は、随分痛々しいです」

現れたのは白いローブを着た、声からして男。

男はローブのフードを深々と被つており、表情が解らない。

ナイトメアーは掌を開き、鎌を造り出す準備をする。
相手が敵味方解らないのであれば、まずは敵と判断する。

それは独りで生きていいくには必要な事だ。

警戒に気付いたのか、白いローブの男は両の手を小さく上げる。

「ハハッ…………怖いですね。ですが、私には戦意も殺意も無いです

よ？」

「…………何者だ？ この森に居ると詫ひ事は…………お前も幻想種か

？」

「そうですよ。私も幻想種と言われている者です」

殺氣を弱めず、鋭い眼で睨むナイトメアーに若干畏縮しながらも白いローブを着る男は答える。

「…………そのフードを取れ、と言つたら素直に取り、素顔を見せるか？」

「この私に」

「ええ、取れますよ」

男は何の躊躇も無くフードを脱いだ。

「…………ツツ！？」

現れた男の顔を見て、ナイトメアーを驚く。

現れたのは白い長い髪。蒼い瞳。そして尖った耳。
幻想種、『エルフ』と呼ばれる人外。

「驚きましたか？」

男はニッコリと微笑む。

「…………隨分有名所が出て来たな」

「そうですね。まあ、有名になればなるほど色々と尾ひれが付いてしまいますけどね」

「そうだな。傲慢で他の種族を蔑む神の隣を気取る人外、だつたか？」

ニヤリと笑みを浮かべ、軽く挑発をする。

沸点の低い奴は、これぐらいで挑発に乗る。

ナイトメアーの中では、『エルフ』と言う種族はまさしくそれな

のだ。

己が何よりも勝つていると。

「フフ、その通りですよ。居るかどうかも解らない神の隣を召乗る、哀れな道化です」

「…………」

「」の返しは予想外だった。

浮かぶビジョンでは、あの挑発で憤怒し何かしらのアクションを見せると思ったのだが、苦笑を浮かべるだけで剩え自分で自分で自分を罵った。

「さて、もうそろそろ私が貴女の敵ではないと解つていただけましたか?」

その言葉通り、ナイトメアーはこの男は敵ではないと認識していた。

まず、フードを彼女の前で躊躇無く脱いだ時点で解つてはいた。

敵である相手に、態々素顔を見せる者も居ない。

「…………そうだな。敵ではないかもな。…………だが、味方とも考えられない」「油断はしない。

「御賢明な判断ですね。ですが、一応は信じて貰いたいですね。
……ああ、」うと言えば良いですか？私はセン側の者だ、と「
胸に手を当て、お辞儀をするかの様に前屈みになる。

セン側の者。

「」の言葉は「」の【森】に描いて、ナイトメアーの敵味方を区別する重要な事だ。

此所にナイトメアーを連れて来たのはセンの独断。

『不確定な狼』であるあの一頭が手を出さなかつたのも、あの一頭がセン側の物だつたからだ。

即ち、セン側の物にはナイトメアーに手を加える氣は一応は無いと言ひ事。

「せう、か

氣を緩めても良い物か、軽く息を吐ぐ。

「せう、張り詰めなくとも良いですよ。此所は既に『中央』の中央です。殆どがセン側の物であり、そうでない物でも下手に手出しが出来ません。……それに、貴女は既に加護を受けていますから」

「……？…………加護、だと？」

その驚きは先程までのモノとは全く違つモノだつた。

此所までの流れ、記憶が中途半端に途切れ詳しくは解らないが、加護を受けられる様な流れでは無い筈だ。

自分で言うのも何だが、私は十分過ぎる程凶器だ。
抱えてメリットが有るとも思えない。

それなのに、加護を「えた？」

加護の事も詳しくは知らないが、この【森】に認められたモノが
受ける風に聞いている。

それを、この私に？

「…………冗談か？」

「いえ。そんな詰まらない冗談など言いませんよ」

「…………何故？」

その疑問に『エルフ』の男は首を傾げた。

「何故？ 加護を受けた事がそんなにも疑問ですか？」

「大ありだよ。少なくとも私に加護を与える義理は無い筈だ。下手をしなくとも誤爆しかねない者を抱えるんだ。そう簡単に容認出来る程、甘くはないだろ？？」

自身の立場が解っているからこそだ。

だから、「そうか、良かつた」と納得出来ない。

深読みのし過ぎかもしれないが、下手に納得するより追求してちゃんと納得出来る方が良い。そう判断し、彼女は尋ねている。
もし、ナイトメアー自身に利用価値がありそれを利用したいのなら、それはそれで良いのだ。

明確な理由の無い善意は悪意だ。

与えれば、何かを渡さなければならぬ。

この【森】が、与えるだけで終わる筈がない。
何かしらの見返りがある筈だ。

彼女はそれが何か知りたい。

それに、加護を受けたと言ひ事は、既にナイトメアーは知る権利を得たと言ひ事。

先程までの様に、端折りまくつた説明でなく、ちゃんとした説明を聞ける筈。

「…………そうです、ね。貴女が疑う氣持ちは解りますよ。私が貴女と同じ立場であれば、同じ様に疑い、勘ぐりますからね。…………ですから、素直に説明致しましょ」

そう言いながら、『エルフ』は木の根っこに腰を下ろす。

「さて、まずは自己紹介をさせて貰いましょ」

先程と同じ様に胸に手を当て、お辞儀するかの様に前屈みになる。

「私の名は、ラル＝シューです。好きな様に呼んで下さい」

「私の名は、ナイトメアー。此方も好きに呼んで貰つて構わない」

互いに名を交わし、ラルは笑みを浮かベロを開く。

「さて、まず説明しなければならないのは、貴女がどうやって加護を受けるまでに至つたか、ですかね」

「そうだな。一番気になる所だしな」

「まあ、簡単に言つてしまえば、センのお陰、ですかね」

「センの、だと？」

「はい。少し戻つて数時間前です

」

【森『中央』

『エルフ』、ラル＝シューは木の根っこに腰を下ろしながら本を読んでいた。

辺りには誰も居なく、彼一人だ。

一枚、また一枚と結構な速さで本の頁を捲つて行く。そんな中、辺りの雰囲気が少し変わったのを感じる。

「……帰つて來たのでしょうか？」

辺りを見るが、現れる気配は無い。

だが、確実に雰囲気は変わっている。
少し警戒し、ラルは持っていた本を閉じ、立ち上がりつとめた瞬間。

「……？」

突如目の前が輝き出し、虚空が捻れる。

そして、その捻れからまるで吐き出されるかの様に何かが現れ、地面に落ちる。

ドサ、ドサ、二つの何かが落ちる。

普通であれば、その瞬間に叫びたくもなる様な出来事だ。
だが、ラルは一瞬にして理解した。

この様な現象の事ではなく、落ちた二つのそれがなんなのかを、だ。

「セン！」

思わず倒れるそれ、つまりはセンを見て驚く。

センは地面に倒れ、全く動かない。
直ぐさま側に駆け寄る。

「……死んでは、いない様ですね」「
思わず吐き忘れた息を吐く。

「……ですが、何故？」

センに外傷などは見あたらないが、顔色が芳しくない。何かしら、内面的な精神的な何かを受けたのか？

直ぐさま原因を考える。ふと、センの隣に目が行った。

「……人間の、女性」

センの隣に倒れる、漆黒に身を包んだ人間の女。

見覚えが無く、そしてラルはその女の内に在る魔力に気付く。

「……これは」

見覚えが無いと言ひことは、外部の者。

では、何故その者が此所に？ そしてどうしてセンと共に現れた？

人間の女には致命傷となるであるつ外傷は無いが、所々服が破けたりかすり傷がある。

その程度だが、この女性も顔色が悪い。

考えに没頭していると、

『クソがツ！ いきなり飛ばしやがつてツツー！』

聞き覚えのある声が響いた。

『全くだ。随分手荒い運び方だ』

その声がした瞬間、【森】の闇から一頭の獣が飛び出す。

『不確かな狼』、ディガーとバルデト。

『一頭共無事でしたか』

『ん？ ラルか』

ディガーがラルを見て、近づく。

『かアー、やつぱ氣を失つてゐるか』
倒れるセンを見つけ、バルテトが囁く。

『やつぱつ、と血の事は』

『ああ。俺等は一応立ち会つた』

ディガーのその言葉に、ラルは思わず眉を細めた。

『……立ち会つた？ もしや、契約の……ですか？』

『その通りだぜ？ しかも相手は『森神樹』だ』

「なつ！？ 正氣ですか！？」

思わず叫んでしまうが、それは正常のリアクションである。

『正氣か異常かは、俺等には判断しかねる。全てセンが「セン」として決めた事だ』

ディガーのその言葉により、ラルは全て理解した。
何故、契約などと言ふ危険な手を使つたのか。

そして、センが少なくとも何かしらの覚悟を見せた、と。

『…………』の、女性のためですか？』
センの横で倒れる女を見ながら尋ねる。

『ああ。胸くそ悪い話しじはあるがな。どうやらセンの野郎その糞女を随分気に入つたらしくてよ。契約結んでまで護るつもりらしい

ぜ?』

表情を歪めながらも、口元だけは吊り上げるバルテト。

『進歩と言えば進歩だ。それが俺等にとってプラスかどうかはさておき、な』

そう言つティガーの表情も言葉とは裏腹に明るい風に見える。

「そうですか。まあ、彼が彼で決めた事ですからね。…………ですが、問題は契約の内容ですね」

『ああ。まあ、予想通りに不利な条件だった』

矢張り、か。と納得する。

『森神樹』が態々契約まで持ち出したのだ。生温い内容の筈がない。

「……大方内容は予想出来ますからね。センの行動を縛るのと同時に、森への奉仕ですかね」

『ああ。その通りだ。結ばれた契約内容は三つ』

- 一、【森】に住まう物を護る為に命を捧げる。
- 二、【森】に害があると判断した場合、如何なる手段を用いてでも排除せよ。
- 三、【森】に関して害があると見なされる行動を行つた場合、その場で死す。

「……成る程、他の森に住まう物からしては痛くも痒くも無い内容ですが、センに取つては痛手ですね」

内容を聞き、ラルが難しい表情を浮かべる。

『ああ。俺達からしてはな。けど、センは「王」を拒絶している。「王」自体が嫌なんじゃなく、「王」の在り方を嫌つてゐるからな。この契約内容は、否応無しにセンに「王」として生きさせる為のものだ』

バルテトの言つた通り、【森】に住む物からしては当たり前の様な内容だ。

だが、センからすれば最悪と言えるモノだ。

契約内容は「王」としての責務なのだ。

【森】の「王」は【森】の為に生き、【森】の為に死ぬ。

これは他の選択肢が無く、死ぬまでの一生を【森】に捧げなければならぬのだ。

既にセンは「王」見習いではなく、「王」そのものに実質上なつてしまつた事になる。

詰まる所、今後センは「セン」としての行動を行えなくなる。

「セン」としての行動はセンの為の行動であり、【森】の為ではない。

最悪の場合「セン」の行動によつて【森】に害が及ぶ可能性がある。

その為、無闇矢鱈に「セン」として行動したのならば、契約の内容により害となると判断され、その場で死ぬ。

既にこれは、契約などではなく一種の呪いだ。

「センを縛り付けるには、十分な内容ですね」

『今回、センの願いが願いだつたからな。拒否したくとも出来ない状況だつた』

「今後、センが「王」になる事を拒否させない為の布石でもあるのでしょうか。」「王」を拒絶する事が森の害になる行動と判断されても可笑しくはないですから」

『こんな契約結ぶ程、俺にはあの女に価値があるとは到底思えないがな』

『…………』

バルデトの言つた通り、現段階ではナイトメアーの価値など無いに等しい。

そんな者の為に、センは一生を捧げるのだ。

ディガーもバルデトも、そして他のセン側の物からしても其処だけが煮え切らない部分だった。

この契約が結ぶ原因となつたナイトメアーが消えれば破棄される。などと言つモノであれば、即座に皆が殺しに動くだろう。

セン側の物は是非ともセンに「王」になつては欲しいが、それは飽く迄センの意志によるモノ望んでいる。

強制でなつたとしても、此方は此方で煮え切らない。

『…………今更、言つても遅いだろ』

「そうですね。既に、賽は投げられました」

『Jの騒動の善し悪しに関係無く、センと並ぶ男が【森】の「王」に実質上なったのだ。

外であらうが、内であらうが、否応無しに動き出す。

それが全て裏田に出るか、それとも思いがけない当たりを出すか。

『全ては、センとの女が握つて居ると言つても過言ではないな』

中心に立つてしまつた少年と、その少年を動かした女。

『ケツ！ 面白くねえ話だ！』

「何處かの御伽噺の様な、少し夢のある内容なんですか。此方としては、心臓に悪い話です」

『そりだな…………Jの事は直ぐにでも森へ伝わる。そうなれば、『^{ラフィアン}無法』の阿呆共は必ず動く。最悪の場合には溢れ者すらも動く。本当に、困つた展開だ』

否セン側の物が動き出すには、十分な理由。

あわよくば殺す。そうでなくとも殺す。そんな危険思想の持ち主が一斉に動けば、【森】の内部で争いが起るのは目に見えて明か。「今後は、『無法』への牽制なども考えなければいけませんね。……まあ、の方が動けば全て丸く収まるんですが、無理でしょうし」

『の方を可能性に入れるのは無意味だ。あれ程までに自由奔放は他に居ないだろ？。それに、センに取つての方は天敵だろ？しな。

助力して貰おうとしたら、センがまず拒否するだろ？』

『んじゃあ、一先ずは俺等の内だけで様子見つて事か』

「そう、ですね。下手に動くよりまず相手の出方を見ましょ。向こうも下手には動けないでしょ。し、動くとしたら此方が動く時だけ。もしくは痺れを切らせてか、です」

此方から動けないのは痛手ではあるが、向こうもそれは同じ。どんな大義名分で動くのか。それが問題であり、それになり得るのがナイトメアーと言つ事である。

『…………まあ、こいつ言つ言葉は使いたくはないが、成る様に成るだろ？』

ディガードのその言葉に、何ともやるせない表情でラルが頷く。

『まあ、向こうから動いてくれれば、俺等も大義名分で存分に暴れられるんだ。此所は我慢つてヤツだな』

『ほお、貴様もやつと我慢を覚えたか？ 進歩だな。もしくは遅い進化だな』

『んああ！？ どう言つ意味だコラアーー。』

『さて、取りあえず、センと彼女を運びましょ。』

ディガードバルダートのやり取りを気にせず、そつぞとセンを抱え上げる。

『どちらか彼女を運んで下さいね』

その言葉に心底嫌そうな表情を一頭が浮かべる。

『……バルテト。お前が運べ』

『嫌だ。もしくは嫌だ』

『どっちも同じだらうが…………』

一頭はナイトメアーを見下ろす。

『…………良し、アレで行こう』

『そうだな。アレしかねえ』

「…………私はどうやって運ばれた？」

色々と気になるワードは出たのだが、最初に気になってしまったのは此所まで運んだ方法が何か、だった。

「さあ、私は見ていませんでしたから」

「――」と笑みを浮かべながら首を傾げる。

明らかに、この『エルフ』は知っているだろう。思わず鎌を造り、首筋に刃先を当てそうになる。

「…………まあ、良い。それよりも、だ」

溜息を吐き、話を変える。

「契約の内容は解った。それと私の立ち位置もだ。だが、一番重要な所が抜けていないか？」

「はて、何でしちゃうか。一応は言いましたけど？」

「…………今、お前が言つた事も私が知りたかった事の一つだ。だが、それ以上に、いや、それを聞いたからこそ尚知りたくなった事がある」

ラルは変わらず笑みを浮かべている。

それがナイトメアーからしては不敵な笑みにしか見えない。睨みに近い眼差しを向ける。

「…………何故、センは私にここまで？」

「…………フフ、そうですか。それが一番知りたいのですか」

一瞬キヨトンとした表情を浮かべたが、直ぐに笑いがこみ上げた。

「それが一番重要なんだ。今の話を聞いた限りでも、自分で言ったくはないが私には利用価値は無い。それなのに、何故センは周りの反対を押し切り、契約と言う自分の首を絞める様なモノを受けたのか。私には、センに取つて何か価値があるのか？」

疑い。とは少し違う。けれど切実な思いだ。

利用する為の行為なのか、それとも全く違う、センが何か思つての行為なのか。

【森】の為か、センの為か。

それによつて、ナイトメアーの心境は大きく変わるだろ？。向こうが自分を利用しようとしているのか、どうなのか。

「…………そうですね」

ラルは懶とらしく間を置いた。

次の言葉を待つナイトメアーの表情は、今までのとは違つ表情だった。

……隨分、乙女な所もあるのですね。
思わずそう思つてしまつた。

ナイトメアーの表情は、年相応のモノだった。
何かに締め付けられるかの様な、切なそうな表情。

多分、自分では気付いていない。
無意識に、彼女は願っている。

【森】の為ではなく、センの為に自分を求めたのだ、と。

その思いが、何処から來るのかは解らない。

だが、少なくともこの【森】では彼女に取つて一番安心出来る場
はセンの側なのだろう。

言い方が合つているかは解らないが、彼女もまた、センに惹かれ
ているのだろう。

「…………私には解りませんね」

「ぐつ…………間を置いてそれか?」

「まあ、本人に聞いた方が良いと思いますよ? 彼の気持ちが聞き
たい訳なんですし」

そう言いながらラルは立ち上がる。

「…………そつ、だな」

歯切れ悪く答える。

その様子を見ながら、ラルは笑みを浮かべる。

「フフ、怖いのですか?」

「…………何言つている。怖い訳ないだろ?」
首を横に振りゆつゝ立ちはある。

「そつあと行け?」

ナイトメアーはそつと歩き出す。

後ろ姿を見ながらモラルの笑みは消えない。

「……無意識ですね。『これは』思わずそいつ零してしまつ。

恋、とはまた違うのだろう。

でも矢張り、必要とされたいのは彼女の価値ではなく、彼女そのものなのだ。

どんな返答が待っているのか、言わばこれも分岐点だ。

「センも、罪作りな男ですね」

他人事の様に、まるで楽しむかの様に、歩き出す。

「……あ、そっちじゃなくてこっちですよ?」

恋ではないです。

それに似た、だけじまだ程遠い感情とでも言いましょうか。

やつとラブが書けそうな予感がします。

甘いのを書きたいのですがね。この作品ではセンとメアに求めるのは無理ですね。

代わりに他の人で書いくつかな?

今回は少し自分で書いていても「中身があいつで無い」と思つてしまつた。

ぶつちやけると同じ事書いてる様な気がする。

まあ、メアは今回余りの不甲斐なさに苛つき、
ディガー達は一応様子見に落ち着き、
ラルはメアの心境に気付き、それを楽しみ、
センの考え方、本心が見えない。

などと書く感じ。

因みに、契約の内容は甘い様に感じますが、結構工ゲつないです。
今後話が進むにつれ、どんどんセン君が縛られていきます。

次は「メア、センとお話しする」です。

戦闘なんて……。無いですよ。

それでは、それでは……。

いつも。龍門です。

今回は速めに投稿出来たと思います。

改めて思いました。

俺にラブは無理だ。

少しその分を書いたのですが、なんともまあ～……。

今回も長いですが、少し不調。

何て言うか、焦ったのかなあ～、って。

それでは、寛大な心で読んで下さい。

【森】『中央』

年十年も前に倒れたであろう巨木。

その巨木に三頭の狼が鎮座している。向かいには三頭の狼。巨木に鎮座する一頭の狼が、震え出し、そして叫んだ。

『に、に、に、人間の女だとオオオツツ！？ 巫山戯んじやねえぞゴラツ！』

耳に複数のピアスを付け、低い声で叫ぶ、『不確かな狼^{ゴースト・ウルフ}』。

『私が処理している間に、まさかそんな事になつているとはね』唯一の白い毛の色を持つ、『不確かな狼』クイス。

『センさんが押し通したんだよね？ それだったら文句の言いようが無いよ』

左の後ろ足が無く、少し高めの声で丁寧に話す『不確かな狼』。

『そうですかあ～、人間の女人ですかあ～。どんな方なんですかあ～？』

首から十字架のネックレスをかけ、ゆつたりと話す雌の『不確かな狼』。

『ケツ！俺はだつて承知した訳じゃねえよー。あの糞女がヘマすれば直ぐさま首噛み千切るつもりだ』

尻尾に鎖を巻き付け、お馴染みに叫ぶバルデト。

『クラフト。余り騒ぐな。バルデトの様になるぞ？』

いつもの様に冷静にバルデトを貶す、右側の牙が欠けたディガー。

喋る狼が六頭。一般人が見れば腰を抜かし叫んでしまう程の異様な光景。

六頭とも『不確かな狼』に名を連ねる、いや、この六頭こそが『不確かな狼』なのだ。

『女連れ込んだ結果がそれか！？』

『い、いや、クラフト。連れ込んだって言い方は…………どつかと思ふよ？』

『何言つてやがる！？此所に連れてきたんだ、連れ込んだで間違いねえだろうがツツ……！』

クラフトと呼ばれた『不確かな狼』は盛大に叫んでいる。

左の後ろ足が無い『不確かな狼』はあるで苦笑しているかの様に歯切れの悪い声を漏らす。

『連れ込もうが、何しようが構わないのだけれど、少し不味い事になってるんじゃないの？』

『ああ。至極不味い事になつてゐる』
クイースの言葉に肯定し、ディガーが頷く。

『契約の期限は無いんですよえ～？』

『ああ、ねえ…………か、アルネリア！　その喋り方どじにから
ねえのか！？』

バルデトがゆつたりと喋る『不確かな狼』に向かつて怒鳴る。

『それは無理ですねえ～。これが素ですい～止めさせたかつたら何
か面白い事して下さい～』

狼からは考へられない口調で話すアルネリア。

『んああ！？　面白い事！？』

『はい～。この前やつた死んだフリでもやつて下さい～』

『アレは死んだフリじゃねえよッッ！～　死にかけたんだよーーー。』

『ええ～、そうだつたんですかあ～』

本氣で驚くアルネリアを見て、バルデトは溜息を吐いた。

そんなやり取りをしている横で、

『その女を此所に連れて來い！　俺が直ぐさま殺してやるー！　噛
み千切つて、碎いて、裂いてやる！～　ナトルト！　せつと連れ
て來い！～』

『無理だよ。それよりも落ち着いて』

騒ぐクラフトを抑える、左の後ろ足が無いナトルトと呼ばれた狼。

『止めるな！ 人間なんてもんは見つけたら直ぐさま殺すのが鉄則だ！！ 僕は今それを実行しようとしているだけの話だアアアアアアア！！！』

狂うように叫ぶ。

『だから！！ 無理だし駄目だし！！ 鬼に角落ち着いて…』
それを必死に抑える。

『喧しいわね。クラフトの人間嫌いもあそこまで行つたら一種の病気よね』

四頭の馬鹿騒ぎを見ながらクイスがそう零す。

『全くだ。阿呆ばかりで話など一向に進まない』

クイスは「嫌だ、嫌だ」と言つ風に首を横に振り、ディガード最
近増えてきた溜息を吐く。
ふと、クイスが尋ねる。

『…………女つて、あの子でしょ？』

『ああ』

少し間を開け、クイスは尋ねる様に自分の考えを口にする。

『…………『森神樹』^{グラント・ツリー}は王を「王」にしたくてその子を容認したのか
しらへ』

『…………それはどういひ意味だ？』
ディガードは解らないと言つ風に尋ねた。

『解つていいでしょ？』森神樹は過去を視る事が出来る。あの子が本当に危険かどうか確かめる事が出来る。もし、見たのではば、あの子がどんな子かは解る。それを視た上で、あの子をこの森に置く事を認めた。剩え、加護を完璧でなくとも『えた。……王を縛るだけ為に、此方の首を絞めかねない者をあの『森神樹』が置くかしら？』

『…………俺等が気付かないあの女の価値があると？』

『可能性の話よ。…………どうも、あの『森神樹』の対応が優し過ぎる。不気味な程に。契約だつて、「セン」として行動させないだけ。契約まで持ち出すのならば、もつとキツくても可笑しくはない筈。…………どう？ 少しは可笑しいと思わない？』

そう言い、クイスがディガーを見る。

その可能性の話に、ディガーは考える。

随分すんなりと話が進んだ、とは思つてはいたがまさか、な。

ナイトメアーの価値。

現段階でティガーラは無いと思つている。

センはどうか解らないが、あれは可能性を感じてではなく、唯々惹かれた様に見える。

では、『森神樹』は？

契約もそう言われれば、結構甘いのかかもしれない。

センは直感で動くタイプの為、【森】に害なす行為つて言うのは多々ヒットするだろ？

それだけを見れば十分に縛つてはいる。

が、逆に言えば「王」としての行動をすればセンは幾らでも動け

る。

『…………やられたかもしけんな』

思考が辿り着いた可能性の一つの答えは、「セン」の行動が縛られ行えなくなつたが、「王」としては動けると言う事。

「王」とは即ち【森】の為、【森】に住まう物の為。そして、その住まう物には加護を受けた外部の物も含まれる。

『センは、あの女の為に今後も動く事が出来る…………』

『森神樹』はあの女を害と言つた。

それなのに、何故契約内容に「ナイトメアーの為の行いを禁止」としなかつた？

何故、「これ以上の人間との余計な接触を禁止」としなかつた？

何故、逃げ道を残した？

今後、あの女に纏わり付くのは面倒事だ。

この【森】ではあの女は異端。外であろうとも、あの女は異端に近いだらう。

そんな女が面倒事を起こさない筈が無い。

つまり、センはあの女と共に居る事で何かしらに巻き込まれる。もしくは自ら飛び込む。

それを防ぐ為の契約、ではないのか？

此所まで考へると、あの女には何かしらあるとしか言えない。

『…………あの女に何があるって言うんだ？』

『……考えれば考える程泥沼に嵌つていく感覺ね。……現時点
で言える事は、あの子には何かしらの秘密がある。それは『森神樹』
がこの【森】に有益と考える程の事。それ以外はサッパリよ。でも
まあ、センは一応あの子の為に動ける。あの子に危機があれば助け
られるし、あの子が助けを求めても助けられる』

クイスの言葉にティガーは苦虫を噛んだ様な表情を浮かべる。
まんまと嵌められた。

契約の実体はセンを「王」とするのではなく、行動を強制する事
だけ。

【森】に住まう物の為なら危険が在ったとしても、動かなければ
ならない。

それにはあの女も含まれている。

これではまるで、あの女を護る為の契約だ。

……いや、考え過ぎか。

だが、契約内容からしてはこの考えは妥当。

『……鍵はある女の過去』

『そうね。『森神樹』が視るのは過去。その過去を見てのこれだから
ら、きっとそうなんでしょう。知りたい内容ではあるけど、尋ねて
教えてくれる訳ないし、あの子に聞いてもきっと無理よね』

『ああ。女に尋ねて答えが返つてくるのなら簡単な話だ。だが、『
森神樹』があの場で言わなかつたんだ。何かしら女の記憶にでも細
工しているだろ?』

ディガードが溜息を吐く。

結局は、『森神樹』の掌の上と言つ事に変わらない。

考えた所で解らない問題を残し、態と考え方をそつとしている様にも思える。

全てが考え過ぎで、杞憂に過ぎれば良いのだが。

そう考えたが、直ぐに鼻で笑い消し去る。

消し去るには、些か大きい事だ。

『……結局は成る様に成る、か』

その眩きに、クイスが笑う。

『あら？ アンタがそんな言葉を言つなんてね。他にアンタりしき言葉が無かつたのかしら？』

『茶化すな。……十分に今に適している言葉だらう？』

『フフ、それもそうね。……今は場に身を任せて。分岐点を見極めながら、じつくりと行きましょう。無限ではないけれど、有限も結構たっぷり有る訳だしね』

『……その考え方をお前りしい』

『フフ、どうも。一応褒め言葉として取つておくわ。……バルデト！ いい加減叫ぶの止めなさいよね？』

笑みを零し、クイスは歩き出しながらバルデトを止めに入る。

『だ、だけどよー。コイツの喋り方が鬱陶しいんだよー』

『アンタも十分鬱陶しいわよ。それとクラフト！　いい加減アンタも落ち着きな！　それ以上騒ぐなら灰に変えるわよ？』

『う、鬱陶し……』

『んなー？　サラッと恐ろしい事言つんじゃねえよーー。』

『んん？　私に命令するの？　この私に？　この、わ・た・し・に？』

『あ……いや……スマン』

『よひしー』

『…………アレはアイツの凄い所なのか？』

威圧かはたまた、クイスの強さか。

騒ぐバルデトとクラフトを一瞬にして大人しくさせた。

バルデトは穴を掘りながらブツブツと何かを呟き、クラフトは目を泳がせながら俯いている。

その様子を見ながら何故かクイスは満足した表情を浮かべている。

ディガードは軽く再度溜息を吐く。

問題などが色々浮き出でてきたが、今の所はこの有りそつで無い統率が気がかりである。

考えても仕方がないので、ディガードは「雖は強い」で片付けてしまおうと心の奥底で納得していた。

セシはゆっくりと一本の木に掌を当て、静かに目を瞑つた。
地面は濡れ、木が濡れ、葉が濡れてい
る。

『光の雨』^{ライト・レイン}の輝きがまだ残つており、暗い【森】を薄く照りして

心地の良い風が吹き、センの黒い髪を揺らす。

静かに息を鼻から吸い、口からゆっくりと吐き出す。

センの顔色は未だ芳しくはないが、絶不調と言つ訳ではない。

此所に運ばれる前に比べれば、幾分良くなつていた。

再度、鼻から吸い口から吐き出す。

「あれ？ 起きてたんですか？」

「さつき起きたばかりだよ」

後ろから掛けられた声に振り返り、センは軽く笑みを浮かべる。

「もう少し寝ていた方が良いんじゃないですか？」

センの後ろに立っていたのは金髪天パでタレ目の人間。黒と赤の上下が繋がった服を着ており、ブーツを履いている。

至つて普通の青年。

表情からどことなく頼りなさそうな雰囲気を醸し出している所も、特別変な所ではない。

「起きちゃったから。それに、今は起きていた方が楽なんだ」

「そうですか？ あ！ でも余り激しい動きとかはしないで下さいね？ 全快している訳じゃないんで」

「ハハッ！ 大丈夫だって！ 今の所は身体を動かす予定はないから……そうだ」

青年の言葉に笑い、そして思い出した様に尋ねる。

「メア……俺と一緒に居た女人人は今何処に？」

「女の？ ああ、確かラルさんが一緒に居る筈ですよ？ 監視つて訳じやないみたいですが、独りにするよりは良いだらつて」

「俺と一緒にすれば良かつたじゃん。それなら態々ラルが付いて居なくとも」

若干不満そうな表情を浮かべるセン。青年は思い出した様に付け足す。

「離れさせたのはティガーさん達が」

「えっ？ そうなの？ ……「ん~、ビツモティガービバルデトはメアを嫌うよなあ」
腕を組み、首を傾げる。

「メア？あの女性の名前ですか？」

「そつ！ 俺が付けたあだ名。結構良じと想つんだけど、ビツモ？」

嬉しそうな表情を浮かべるセンに苦笑しながら頬をポリポリと搔く。

「いや、どう？と言われても、僕あの女性の名前知らない訳ですし」

言われれば、と手をポンッと叩く。

「そつか、そつか！ メアの名前はねー ナイトメ

」

「あれ？ 起きたのですか？」

【森】の闇から現れたのは白いローブを着たラル＝シュー。表情には変わりの無い二口二口の笑みを浮かべている。

「あっ、ラルさん」

「おっ、ラル！ ゴメンね！ 心配掛けたみたいで」「頭を搔きながら照れくさそうな表情を浮かべる。

「フフ、無事でなによりですよ」

「おい！ 一人で行くな！ こっちは此所の土地勘なんて無いんだよ！ お前が見えなくなつたら確実に私は迷つぞ！？」

ラルの後ろから女性の怒鳴り声が響く。

その声に反応したのはセンだった。

「メア！？」

「ん？ その声は…… センか！？」

それでも向こうもセンの声に反応した。

「フフ、まるで惹かれあつてゐる男女ではないですか」
楽しそうに顎に手を当てながら笑みを浮かべるラル。
随分場違いな言葉だ。

ガサガサ、と音の音が聞こえ、闇から葉まみれのナイトメアーガ
現れる。

「おっとつと、………… 全く、葉っぱだけだ」
肩や服に付いた葉を払いながら愚痴を零す。

「ハハッ！ まだ夜目が利く訳じやないみたいだね！」

センは楽しそうな表情に楽しそうな笑い声を出し、木の根っこを飛び渡りながらセンの田の前に立ち、ナイトメアーの頭に手を伸ばす。

「ん？」

若干身構えそうになつたのだが、センの表情を見て直ぐに反射的に払おうとした手を止め、片方の手で黒い自身のスカートをぎゅっと握る。

「ほり、頭にも！」

取つた葉っぱをナイトメアーに見せながらセンは満面の笑みを浮かべた。

「……あ、ありがと」

その笑みに思わず赤面し、止めていた手をゆっくりと元に戻す。

「チキン……見て下さー。アレが屬に言つ天然ですよ」

「……ラルさん。何でそんなに満面の笑みを浮かべてるんですか？」

少し離れた所でラルとチキンと呼ばれた青年がコソコソと話している。

「あつ、怪我とか、具合とかはどう？」

笑みから一変、心配そうな表情を浮かべ尋ねる。

その表情は言つなりば、母性を擗ると言つのだらつか？ 何とも言えない破壊力。

ナイトメアーのその表情で見つめられ、またまた頬を赤くしてしまっていた。

「えつ！？ あ、具合？ だ、大丈夫だぞ？ 少しダルさが残つて
いるぐらい、かな？ ハハハ」

少し声が裏返り、クールな彼女からは想像出来ない様な慌て振り。

大抵の者ならこのナイトメアーの様子で色々勘ぐるものだ。
だが、センはその言葉を聞き、直ぐに笑みを浮かべる。

「そつか！ なら良かつた！ 何処か怪我でもしてたらつて心配だ
つたからさ！」

全く気付かず、無邪氣か素直か喜ぶセン。

ラルの言った通り天然なのか、鈍感なのか。

……どちらもだろう。

此所で「あれ？ 顔赤いよ？ 風邪？」と尋ねないだけマシとも
言える。

「そ、そうか。心配、してくれていたのか」

センの心配と言つ言葉に若干喜んでしまう。

「当たり前じやん！」

「あ、当たり前か」

その言葉に再度顔を赤くする。

この当たり前、がどの当たり前かは知らないが、残念な事に特別
な意味は含まれていない。

それが解つても、ナイトメアーは顔を赤くしてしまつ。

原因としては、此所に来る前のラルとの会話。

センがどうして私を？ などと言つ会話が変にナイトメアーを意

識させていた。

別にこれが恋だとか、そんな事は微塵も考えていないのだが、それでも女性の無意識と言つのか、反応してしまうのは仕方無いだろう。

センの勘違いし易い言い方も言い方なのだが、それは天然だと片付ける以外ない。

「…………し、心配かけた、な」

歯切れ悪く、俯きながらの一言。

「まあ、原因が俺にもあつたしね。言い方は変かもしけないけど、お互い様で」

「…………原因」

赤くなっていた頬の熱が引け、聞きたい事が脳裏に再度浮かぶ。チラシと、上目遣いでセンを見た。

少し、苦笑いを浮かべて頭を搔いている。

それが凄く年相応で、でも何処か大人びて。

どうして、どうして。

「どう、して……」

「ん?」

「あ、いや」

途中まで出かけた言葉が、突然出るのを躊躇する。

言葉が出ないのは、返ってくるその問いの答えを聞きたくないか

らなのか。

利用したいのか？

その問い合わせたくない。

返つてくる言葉が、安易に予想出来てしまつ。

別に、価値がどういつ言われても大差気にはしないだろ？

だけれど、センには言われたくない。その言葉を、私に言つて欲しくない。

「セン」の言葉で、言つて欲しくない。

此所に私を連れて来て、私の力を悉く壊し、私のプライドを潰した。

けど、私に次を教え、私に違つ名をくれた。

味方が敵か解らない関係が、今の私に取つてはある意味心地良い。変に気遣わず、センも、私も互いを気にしなくとも良いから。

でも、この問いを尋ねてしまつたら、解つてしまつ。

向こうが私を利用しようとそれで引き入れたならば、私はきっと味方として接する事が出来ないだろう。

敵ではないのに、味方になれない。味方なのに、敵になってしまふ。

利用されたくない。

そんな考えは、今まで微塵も考えなかつた。

利用したければ、すれば良い。

その変わり、私もお前等を利用する。

稼ぎ屋として変にプライドを持つたら仕事など出来ない。時には偉い奴に罵られ、時には共闘した者に裏切られ。

利用し、利用され。

そうしながら生きて着た。

だから、特別利用される事を毛嫌いする訳ではない。

それでも。

「…………何故、私を此所に？」

尋ねたくはない。けれども、尋ねなければ私は彼と共に戦えない。

「何故、契約を交わしてまで、私に加護を？」

お前に取つて、今の私は何だ？

こんな言葉は、まだ会つて数日も経っていない者が尋ねる言葉ではない。

「…………そこまでして、何故…………」

ハハ、何だろうな。この不安な気持ちは。
随分、胸が痛い。

「…………わ、私を、利用する為か？」

柄じゃない。

これは、私じゃない。きっとそつだ。心身共に疲れているから、

思つてもない事を考へてもい無い事を言つてしまつた。

「…………どうして？」

ああ、一体どんな答えが返つてくれるのか。

耳を塞ぎそうになるのは、矢張り私が疲れているからだ。
きっと、ううなのだ。うう、違うない。

頭を振り、息を吐く。

逸らしていた目を、静かにゆっくつとセンの目線に合わせる。

言つてくれ。

どんな答えでも、多分笑つて私は返せる。

センは、真剣な表情でナイトメアーを見ていた。
黒い瞳で、ナイトメアーの黒い瞳を見つめ。

ナイトメアーより少し低い身長。

それでも、大差変わり無い。

どことなく大人びた雰囲気を醸しだし、ビートな少年のあざけ
なさが残る。

「…………解らない」

「…………

センの口から出た答えは、答えでは無かつた。
解らない。ある意味、逃げの言葉に感じる。

だが、センが気遣つてその言葉を選んだのではないと、ナイトメ

アーは解っている。

会つて間も無いが、センがどう人間かは何となくは解つているつもりだ。

だから、黙つて次の言葉を待つ。

「…………でも、興味があつた」

真つ直ぐに見つめながら紡いで行く。

「同じ髪の色。瞳の色。そして内に宿る魔力。『失われた魔法』^{ロスト・マジック}を扱えて。だから、興味が湧いた」

「でも、今は何となく違う。勘、なのかも知れないけど、だけど、俺はメアと一緒に居たいと思った。一緒に居れば楽しいかも知れない。一緒に居れば違う景色を見る事が出来るかも知れない。新しい何かを見つける事が出来るかも知れない。そんな、あやふやな勘を信じて。きっと、メアを此所に連れて來た事は、未来の俺も後悔しないだろうって。未来の俺も同じ事をしただろうって。…………でも、やっぱりちゃんとした理由を言えって言われたら解らないって答える。余りにもあやふやで、説明出来る言葉が見あたらないから」

かもしけない。

彼女と居れば

かもしけない。

特別、何かが有る訳ではなかつた。

あやふやで、思いつきり勘だ。

だけれど、ナイトメアは何処か安堵した表情を浮かべていた。これを聞き、スッキリする訳ではない。

けれども、ナイトメアは嬉しかった。

後悔しない。

この言葉だけで、ナイトメアは安心した。

今言った言葉であって、本当に未来のセンがそう思つのかは解らないけど、それでも彼女は感じた。

味方で、居られる。と。

彼は信じられる。

変に飾った言葉を言われるよりも、彼らしい言葉で飾られたそれが、何よりナイトメアを安心させる。

職業柄、人を直ぐに信用する事は愚かな事だ。
それでも、信じられると思つてしまつたんだ。

どうしようもないだろ？

どうして信じられる？ など聞かれれば、彼女もこいつ答えるだろう。

勘、かな？ と。

「…………こんな答えで、良い？」

心配そうな表情で、センが尋ねた。

こんな、と言つ事はセン本人もこれが答えになつていないので解つてゐる。

でも、これ以上ちゃんとした答えが無いのだらう。
元が勘だ。勘に答えを求めるのも酷と言える。

センの表情を見て、思わず笑みを零してしまつ。

「ああ。十分だ。私の、聞きたい答えだつた」

「そつか！ なら、良かつた！」

心配そうな表情から一変、明るい表情に変わる。

「ハ、表情がコロコロ変わる所は、年相応なのだろう。

「王」としてのセンが余りにも大人びていて、「少年」のセンが少し新鮮に感じてしまつ。

「……………ありがとウ」

「へ？」

髪を耳に掛けながら、ナイトメアーは微笑んだ。

「……………何となく、言いたかつたんだ」

照れ臭そうに、頬を赤くしながら、彼女は優しく微笑んだ。
一瞬、呆気に取られたセンだが直ぐに満面の笑みを浮かべた。

「そつか！」

「これで、味方だ。

そう心で踏ん切りを付ける。

まだ、不安要素は消えていない。

何故、いつもすんなり加護を受ける事が出来たのか。
他の【森】に住まう物はどう行動するのか。

味方など、センも含めて「僕かだろ」。
敵はこの【森】と言つても過言ではない。

進めるか？

首を横に振る。

違うだろ。
進むんだよ。

死ねない。死ぬ訳にはいかない。

貪欲に、生きなれば。

生きている事が、今誇れるモノなのだから。

それに、生きていれば、センがちゃんとした答えを見つけてくれるかもしれない。

その答えを聞く為にも、死ねない。

「ほおう……チキン。あれが属に言つ青春ですよ」

「何で、隠れるんですか？」

少し離れた木々に身を隠しながら、ラルとチキンが一人のやり取りを眺めていた。

「私達が居たら、素直に話せないじゃないですか。気遣いですか？」

「はあ～…………何でそんなに満面の笑みなんですか？」

「ん？ 笑みを浮かべているのはいつもですよ？」

「…………そう、ですか」

「いやあ～、初々しいですねえ」

狼かあ～。もう良いだらうよって思った。
あと、デレって何？

セン君が少し幼い？と思つたかもしませんが、これがセン君の地
です。

戦闘時は「王」的な上からの口調になり、「少年」では年相応の明
るい感じになります。

これが結構面倒。マジ面倒。

……愚痴はもう良いかな？

次回からやつと沢山の幻想種達が登場します。

それだけが今の楽しみです。

もう、狼だけは疲れた。

猿を書きたいぜえ～。

それでは、それでは。

P・S・

オニグンソウさんの『ヒトガタナ』が面白い。
話もそうですが、なにより絵が好き。
格好いい。そう素直に読んでいて思つた作品。

……伏せ字にしなくとも良いよね？ 駄目？

お久しぶりです。龍門です。

遅くなつてすいません。

少しでも、ほんの少しでも、楽しさを覚える事が出来ればと思つて
います。
それでは、……。

【森】には溢れる程の未知と謎と生と死が蔓延んでいる。

知つているか？

この【森】には存在しない筈の存在が存在している。

知つているか？

この【森】には生きているモノが死んでいる。

知つているか？

この【森】では常識が非常識に変わり非常識が常識に変わる。

知つているか？

この【森】にはまだまだ沢山の未知が存在している。

白い巨躯な身体で駆けるのは氣高き虎。

澄んだ綺麗な湖に住むのはお喋りな精霊。

縛られず蹂躪し全てを無駄にするのは無法共。

黒き闇に沈むその牙を最大の武器としている狼。

空を見上げれば巨大な鳥が羽ばたき、目の前には巨大な蛇が道を塞いでいる。

夢か？

何度目を擦ろうが、何度類を抓ろうが、この光景に嘘は無い。

信じなければ見えないのではない。

信じなくとも、目の前に存在しているのだ。

何と戦う？ 何から護る？ 何を奪う？

理性と欲望でそれを考える我々に、この【森】は牙を剥くだろう。

この【森】は、一種の抑止力なのかもしれない。
人と言つ生き物が、世界を敵にしない為の。

何と戦う？ 何から護る？ 何を奪う？

本能と使命でそれを考える彼等に、誰が敵い誰が勝てる？

花の甘い香りすら打ち消してしまつこの【森】の深さを、誰も知らない。

草木特有の匂いすら打ち消してしまつこの【森】の深さを、誰も知らない。

誰も、知つてはならない。

そう、誰も……。

著者 アルドール＝リー＝ディ
『幻想種物語』第三章・『序幕』一部抜粋。

「成る可く俺から離れない様にね。もう加護を受けた事は皆知つて
はいるけど、知らなかつたで攻撃していく奴が居るからさ。攻撃し
て来た場合は別に反撃仕掛けても良いからね。一応の正当防衛つて
ヤツ」

【森】『中央』

「相変わらず物騒だな。……その加護つてヤツは結局の所何なんだ？ 特別私の身体に何か影響が合つた訳でもないし」

【森】を歩くのはセンとナイトメアー。

先程の会話の後、メアに攻撃を仕掛けないと思つ物達の所に「自己紹介も兼ねて」と言つ理由で連れて行くらしい。

それを聞いた時、「思つ」と言つ葉がこれ程不安を煽るのか、と思つてしまつたナイトメアーは別に臆病などではなく、正常だ。因みにだが、「知らなかつた」と言つのは暗に「知つていたけど」と言つ意味だ。

【森】の闇から突然に『不確定狼ゴースト・ウルフ』並の物が攻撃を仕掛けてくれば一瞬で終わるだろう。

しかし、簡単に自分の死が予想出来るなんて……。死が身近過ぎて少し麻痺しているかもしれない。

倒れた巨木の上に飛び乗りながら先程の問いにセンが答える。「加護つて言うのは一つの意味があるんだよ」

「一つ？」

「ひとつは森に住んで良いって言つ許可みたいな物」

センの立つ巨木にナイトメアーも飛び乗る。

「許可」と言つ事は別に「攻撃してはいけない」って言つ意味ではないんだな」

「加護自体はね。まあ、捷で森に住まつ物に不必要な危害を加えてはならないってのはあるけど、これも曖昧でね。幾らでも穴を突いて行動出来ちゃうんだよ」

捷の曖昧さにナイトメアーは眉間に皺を寄せながら苦笑を浮かべる。

「それで、もう一つは何なんだ？」

「もう一つは、言つてしまえば力の付ワカだね」

「……力？」

「そう。まあ、詳しい説明はディガーラルに聞いた方が早いと思つけどさ。例えばだけど、クイスの使つたアレって感じかな」説明が苦手なのか、苦笑しながらクイスの名を擧げる。

「クイス、とはあの白い『不確かな狼』か？」

「うん。それで力つて言つのがあの白い靄みたいなヤツ」

白い靄みたいなヤツ。

それは兵士達相手に『不確かな狼』含め多数の狼が蹂躪したあの場にて、【森】に本格的にに入る前に白い靄が広がつたアレだろ？

あの靄に触れた死に倒れる兵士は骨すらも残さず灰と化した。

「あの力は、加護で『えられた物なのか？』

「ああ～…………いや、例えで出しどいて悪いんだけど、クイスのはちょっと違つかな？」

類をポリポリと搔くセンに、ナイトメアは首を傾げる。

「…………スマン。既に私は迷ってしまった。もう少し解り易く説明出来ないか？」

「長くなるんだけど、クイスの使つたアレの名前は『森の力』^{フォレスト・フォース}って呼ぶんだよね。森で生まれ森で育つた物に授かる、最初から備わった力。そして加護を受けて発現した力を『自然の法則』^{ネイチャー・プリンシブル}って呼ぶんだ。基本的にこの二つの力は変わらないけど、『森の力』って事に誇りを持つている奴も居るから気を付けてね」

「…………つまり、幻想種が使うのが『森の力』って考えれば良いか？」

その言葉にセンは横に首を振り否定する。

「いや、それは違う。例え幻想種でもこの森にやつて来た物は大勢居る。ラルなんかがそうだね」

何とも難しい、見ただけで判断は出来ないと来たら、対処の方法も限られる。

「ん、そこら辺は見極めるのは難しいな。不用心な発言を控えれば問題は起きないか」

「成る可く話さない方が良いかもね。初見の奴なら尚更かな」

「殆どが初見なんだがな」

ナイトメアが見て知っている幻想種と言えば『不確かな狼』『エルフ』程度だ。

これから会う物全てが全て初見と言つても良いだろ？。

問題は会つた奴を見抜けるかどうかだ。

セン側か、アンチ否セン側かどうかを。

唯、それは安易な事ではない。

セン側を装つて否セン側が接触してくる可能性だつてある。

狼達を見ても、幻想種つて物は随分知能が高い。人間と同等それ以上と考えても差し支えない。

その為人間並に狡い真似をしてくる輩は出てくるだらう。

実力行使で出てくるか、欺き罠に嵌めるか。

解り易いのは前者だらう。

解り辛いのは後者だらう。

「…………森の掟の内容は何なんだ？」

対策を考えるのもそうだが、まずは把握しなければならない。

「沢山在るには在るけど、ぶっちゃけると別に気にしなくとも良いのも在るから、覚えていた方が良いのを説明するよ」

一に、森は秘匿で在るからこそ、謎を孕み神秘的である。それ即ち森だけに関わらずその森に住まう物も同一。森に住まう物は森に住まう物を特定断定出来る情報を流す事を禁ずる

一に、森は多種多様だからこそ、優れ圧倒的なのである。それ即ち住まう物同士の不要な戦闘は愚挙である。森に住まう物は森に住まう物に対し不要な攻撃捕食する行為を禁ずる。

三に、森は悠然で在るからこそ、神懸かり印象的である。それ即ち加護を受けし森に住まう物は森をその身に宿す力で冒流駆逐する事を禁じる。

眉間に人差し指で小突きながらセンは記憶に留めてある綻を引つ張り出す。

「まあ、これぐらいかな？ 気にすべく事は。他のは少し時代が違うから意味無いのが多いし」

「三つだけって言つのは…………」

覚えるのも億劫な数を予想していただけに、三つと三つは何とも苦笑を誘つ。

言葉の中であれば、結構緩い感じがする。
が、縛る箇所はちゃんと縛つている。

「…………一つは情報の秘匿。二つは不要な戦闘の禁止。だが、三つ目のは何だ？」

情報の秘匿は言つまでもなく、この【森】の内部情報。
幻想種の事や、加護云々の事だ。

戦闘の禁止は飽く迄も不要な、だ。向こうが手を出せば此方も手を出せる。

が、最後の宿す力での冒流駆逐とは何だ？

「宿す力って言つのは『森の力』や『自然の法則』の事で、冒流駆逐つてのは要するに森を傷つけるなつて事。まあ、傷つけるなつて言うか、傷つける事自体が不可能なんだけどね

「意味は解ったが、不可能とはどういふ意味だ？」

「傷つけようとしたら、その『えようとした分の力が自分に返ってくる。刃物とか素手とかなら簡単に傷つける事は出来るけど、『森の力』や『自然の法則』では絶対に不可能』

「…………『失われた魔法』でもか？」

「いや、『失われた魔法』だったら容易に傷つける事は出来るよ。でも、不用意にやれば『見回り』が動くから、止めた方が良い」「先程の狼達の会話でも出たが、その『見回り』は何なんだ？」
捷の会話から、気になる話に切り替わる。

一瞬センは「言つて無かつたっけ?」と言つ表情を浮かべる。
それが何となく解ったナイトメアーは首を縦に振る。

「『見回り』はね、この森で死んだ人の事だよ」

「！？…………死んだ人、と言うのはあの兵士達の様な事か？」

「そう。まあ、肉体なんて無いから、死体を操つていい訳じゃない。その死んだ人の内に宿る魔力を具現化させ縛り付けてるんだ」

「なッ…………」

「言葉を無くす。

サラリと出た言葉の意味は、言つこには容易く行つには困難。いや、不可能と言つても過言ではない。

魔力を具現化？

未だ『見回り』と言つのを見た事が無い為、どの用に田に映るかは解らない。

が、そんな事が出来るのか？

人と言つ容器を無くしたら、共に消えるのではないか？

「残留魔力つてあるでしょ？」

不意にセンは尋ねる。

「ああ。……まさか、それを？」

気付く。

「うん。例え人が死んでも、宿っている魔力が一緒に消える訳じゃない。魔力は暫くその死体の周りに溜まり、やがて消える。それが消える前に『森神樹^{グランドツリー}』がその魔力に強制契約を結ばせる。結び方は解らないけど、それによつて魔力はその契約内容通りに動き続ける」

ゾッとする。

魔力を縛る事が出来ると言う事もそつだが、それを行える『森神樹』の底が見えない力量に。

それと、契約と言つ物の強力を。

「まあ、魔力だから考えたり出来ないし、その契約通りにしか行動出来ないから、話し合いで止めようとしても無駄。見つけたり見つかつたら即座に逃げた方が良い。相手は魔力の固まりだから中々に倒せない」

危険で、用心しなければならないのは否セン側だけではなく、そ

んな異物も含まれるのか。

改めてナイトメアーの【森】のおぞましさに顔を蒼くした。
不可能と思えた事が此所では可能になつてゐる。

本当に、その道の専門職が見れば発狂する程喜びだらう。

「それと『無法』^{ラフアイアン}の話もしといた方が良いよね」

未だ【森】の恐怖に顔を蒼くするナイトメアーを尻目に、センは
次の話へと変える。

「『無法』は確か北側の」

「やつ。多種多様で纏められた、この森で唯一の敵つて言つても差
し支えない連中。中には話も出来て状況把握の出来る奴は居るけど、
それもほんの一握り。他の殆どは自分以外を見たら即座に攻撃を仕
掛けた来る」

少し表情を歪める。

「……まあ、仲良く手を取り合つては不可能だと言つのは解るが、
そこまで過激なのか？」

吐き出された溜息には何が含まれているのか。少なくとも良い物
は含まれていない。

此所までで、残念な事にナイトメアーにプラスになる事がない。
見ただけで攻撃を仕掛けたるなど、危険以外に言ひようがない。

「…………ん？」

ふと、センを見た。

変わらない筈の雰囲気。「王」でなく、「少年」の筈のセンから

醸し出される空氣は、哀れみに塗れていた。

今まで見た事がない。卓越し過ぎているその雰囲気に、思わず呑まれた。

黒い髪を揺らり、センはゆっくりと口を開く。

「…………ある意味忠実に生きている。獣の域を出す、獣の域を超越する。奴等は強さを手に入れても尚、今までを貫いつとじてこる。

「獣は獣」と言つ枠組みを、とっくに超えているのに

「…………矛盾しているな」

何となくだが、ナイトメアは理解した。

獣とは、本能で行動し、本能で回避し、本能でその身を削る。理性はその行動に歯止めと並び物を産んでしまつ。

殺しては…………。喰つては…………。

理性と共に付いて来た知性もそれに拍車を掛ける。

戦闘本能。

これを無くした獣は獣ではなく、唯の餌だ。

『無法』の幻想種達は、それを避ける為に獣と言ひ域を超えていながらも、超えずに戦で居続けようとしているのだ。

餌にならまいと。肉の味を忘れまいと。
立ち止まれば死、立ち上がるは生。

生きる為に彼等は矛盾している事を知った上で、『無法』と呼ばれている。

「……なんだか、遣る瀬無い、な」

理由無き行動と、理由が在る行動では、善し悪しに問わらずに決心を鈍らせる。

そんな物は、考えただけで寝首を搔かれるのは知っている。

だが、ナイトメアーは生きる為と云つ今の自分と似た行動理由に、『無法』達と自分をダブルさせてしまっていた。

「……奴等が選んだ道だから。けび、同情もしないし情けもかけない。挑んでくるなら、危害を加えてくるなら、俺は容赦無く殺す」

真っ直ぐに、鋭い眼で、センはその言葉を吐き出した。
実際に起きてしまったらどうなんだ？ と、野暮な奴だったら尋ねるだろ？

が、彼女は解っている。

センが、この様な冗談を言つ程安くない。

「……強い、な」

思った事を口にした。

両方共、生きる為なのだ。
情けなど、必要無い。

そう割り切れるセンに、ナイトメアーは心底感じた。

強さを。

そして、のし掛かっているだらう、重力を。

「…………ハハツ！ 湿つぱい話はこれぐらいにじよつか。これ以上は動きに支障を来すだらうし」

両手を頭の後ろで組み、目を細めながら笑う。

「…………そつ、だな。考え過ぎて簡単にサヨナラは少し呆氣ないしな」

苦笑を浮かべる。いや、苦笑しか浮かべられなかつた。

子供の様な笑顔を浮かべる今のセンが、今まで一番大人に見えてしまつたのだから。

何かを繕う時の、我慢する時の、隠す時の。

そんな、笑顔だ。

お前は、何を抱えている？ 何を考えている？ 何をしたい？ 知りたいけど、その重さはきっと、私には解らない重さなのだろうな。

笑つて流してしまいそうな程、簡単で複雑で、重たくて軽くて。そんな笑顔が出る程に。

「…………行こうか」

だから、この言葉は私が口にしよう。

「王」が、お前の重荷だと思っていた。
「私」が、お前の重荷だと思っていた。

だけれど、その根は深く、

「森」自体が、お前の重荷なのかもしれない。

一緒に背負えば軽くなど、思つていない。
目に見えない物だから、重い物は重いのだ。

「……教えてくれ、君の事を」

ああ、陳腐な言葉だ。

でも、

「……うん！ 行こつか

今まで一番、綺麗に叫んだ言葉だ。

【森】・『東』側。

夜だと黙つてこの場は輝いていた。
上を覆う生い茂つた木の葉。

が、その上だけは月が覗けた。

その月光が湖に反射する。

それによりまるで湖が光輝いている様に見える。

【森】の中にあるで何処かから持つて来たかの様に、少し不自然
にその湖は存在している。

水は透明と言える程に澄み切り、ハツキリと底が見える。
風が吹き、葉が落ち、波紋が広がる。

『チャップ』 チャップ 』

突然に、若い女の子であるつ声が響く。

『アナタを待つて少しすつ、この湖の水位を上げてみよ

『お土産と共に運ばれる、笑みと話に花咲かせ

『次は私もとお願いしてみて

『ギュッと抱き合おう

』

』

『チャップ チャップ』

』

』

軽やかな唄が響く度に、湖に波紋が広がる。

湖の中心。水が噴き出したかの様に浮き上がる。

「ゴボゴボ、と音を立てながら水は球体を弾き出す。

弾き出された球体は落ちず、宙に止まり、水を如雨露の様に出し始める。

球体は一個だけではなく、一一つ、五つ、と増えていく。

『スレンダーな方が良いかな?』

浮き出る水が生き物の様にうねり、何かの形を形勢していく。

一本の浮き出る水柱の左右から水が噴き出る。

徐々に勢いを弱め、噴き出た水は腕に変わる。

水で出来たその腕で水柱の天辺を撫でる。

すると、噴き出落ちる水が止まり、うねり形を形勢する。

『ロングの方が良いかな?』

水柱の天辺に凹凸が出来上がり、人の顔の様になる。

『フフフ、此所からがメインイベント!』

声の主はテンション高くそう叫ぶと、水柱を囲む様に水が噴き出

た。

『田舎せスレンダー美女！』

軽く木々の高さを超えた水は、勢い弱め、徐々に高さも落りる。

『フフフッ、成功だ

』

言いかけたその時、弱まっていた箒の水が不意に爆発したかの様に噴き出た。

『ふんざりやああああああああああああああああああああああツツツ！』

叫び声。そして噴き出る轟音。

間近で見れば噴き出しているのではなく、落ちているかの様に見える。

さながら滝だ。

サーーと雨の様に噴き出た水が落ちる。

水柱を囲んで噴き出していた水も消えている。

『…………』

湖の中心。水が浮き出た所。

そこにも水柱の姿は無い。無い、のだが……。

『何で……』

ポチヤ、ポチヤ、と響きが落ちる音が響く。

水柱が消えた代わりに人、女性が立つて居た。

蒼い髪。蒼い瞳。蒼いドレス。

宙を漂う水の球体が、その光景を幻想的なモノに変える。さながら何処かの御伽噺の様な、運命を感じる様な。

まあ、立っている女性が女性ならば、だ。

水面に立つのは、綺麗な蒼いドレスを……着こなせていない幼女なのだから。

叫び声と共に、宙を浮く水の球体を天高く蹴り上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6045m/>

King of the forest ~Improved version~

2011年5月22日15時21分発行